

291.09  
K0724A



022484-000-9

291.09-K0724A

山水無尽蔵

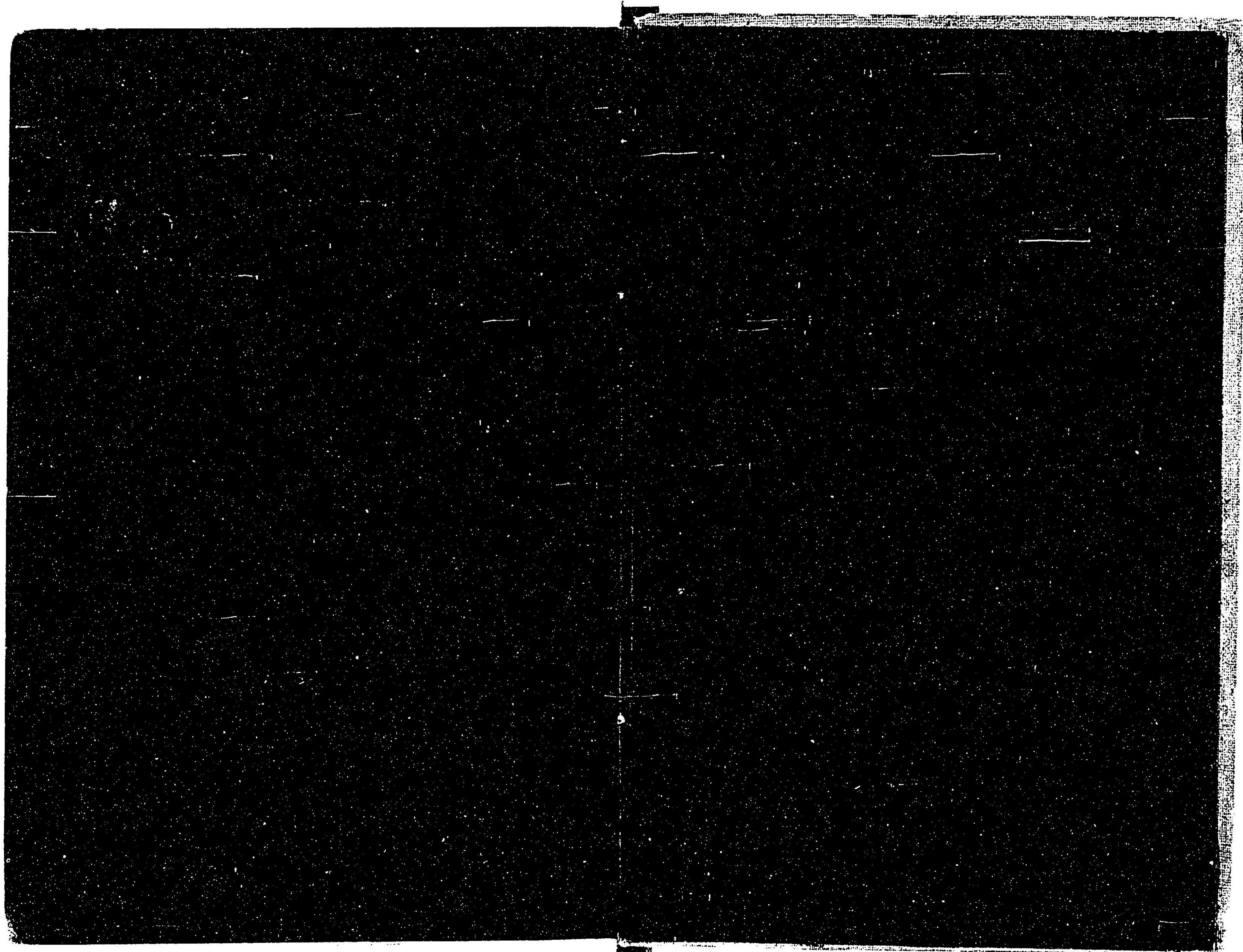
小島 鳥水/著

M39

ADB-0150



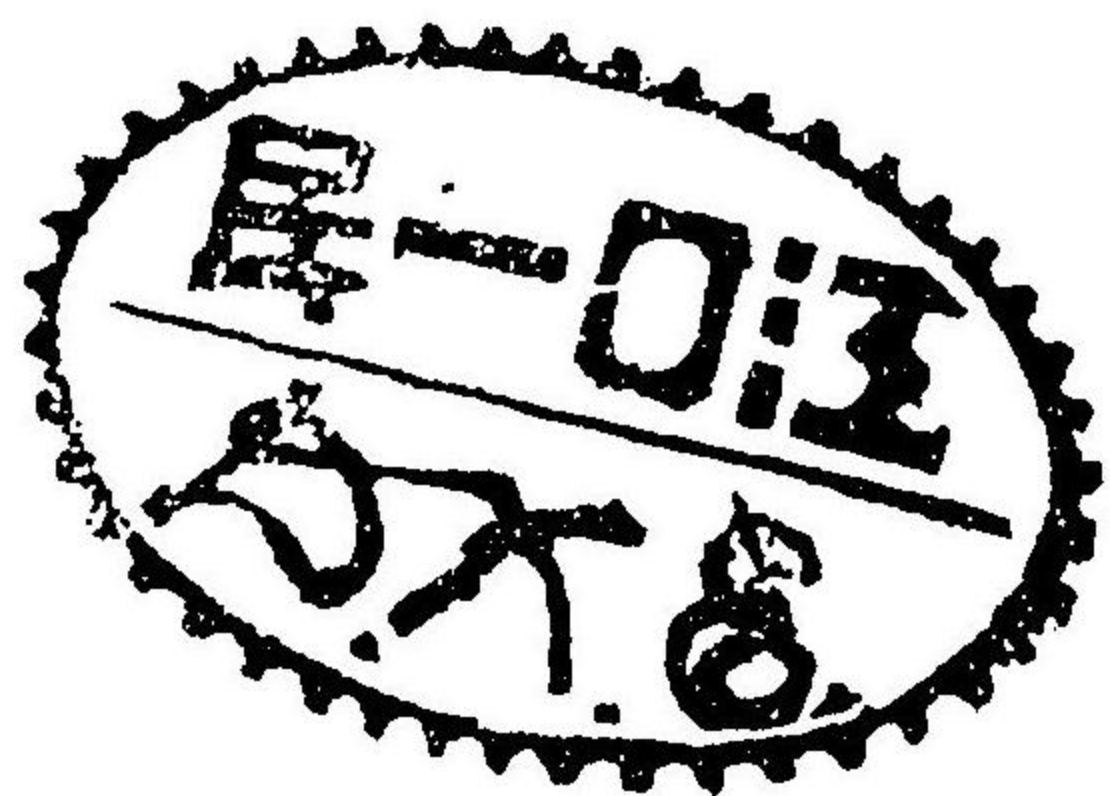






山水無盡藏

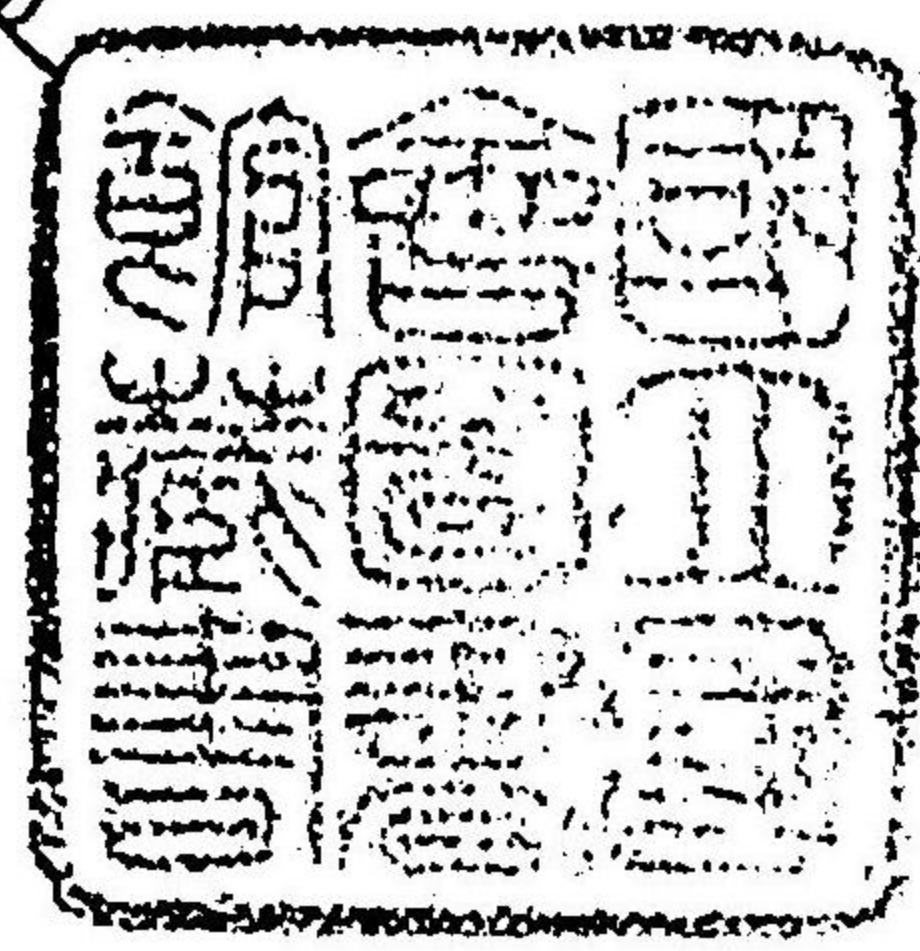
小島鳥水著





Kozima, Usui

291.09  
K0124r



紺  
育  
に  
在  
る  
我  
が  
弟  
に



218943



祖先は夢み、子孫は行ふとかや。暗き中世の昔より幾多のすぐれたる先達ありて、山嶽に通ずる道路を開拓し、自然の堂屋に參することを教へたりき。かゝる祖先は皆な豪邁なる創設者なり、観察者なり、指導者なり。惜しいかな、形式いたづらに存して精神埋没す。明治の今日、石に刻まるゝ靈神の名を見ること多しといへども、人を導くに足るべき先達あること鮮し。多くの行者は自然の説明者にあらずして、山嶽の案内者たり。こゝに於て別に山嶽に通ずる思想の道路と、新しき先達との要あるを見るなり。小



鳥島水氏の新著、山水無盡藏成る。思ふに氏のごときは新代の精神を以て遠き祖先の志を行ふものといふべし。予はこの書の讀者が著者の精神に導かれて、別途によりて自然の殿堂に登攀し得ることを疑はず。

三十九年五月

藤村生

### 自序

本書は、余の紀行文をあつめたるものなり、登山記の多きは、素と「自然」の多變化なる時々刻々、新容を示さざるはなきが中に、殊に山の色に於て、山の形に於て、山の靈に於て、その然るを見るのみならず、山は力の表現にして、山を中心とするにあらざば、自然美に只一個の緊束を欲く感あるを以てなり、されば西の國には、『我にアルプスを與へよ他は用なし』と叫びたる、詩人ありき、余が遊へるところ、多くは日本アルプス中の高山大岳にして、從來世に聞わざりしものなり、余は茲に之を描くと言はず、只た山を愛するが故に、『吾取適我』と言ふのみ、おもんみるに余の如きは、山の幻像（まぼろし）のみ、追ひて、捉ふるところなき、いたづらなる自然崇拜者の一人なるか、されど我げ雲と二人にて、最も天に近き凸點に立ちたる秘密の味を永世忘る能はざるをいかにせむ。

明治三十九年六月

著者



本書を世に出だすに當りて、山水畫家丸山晚霞氏が秘藏の逸品をしげらく割愛せられ詩人島崎藤村氏が醫科大學の病室にて後に致えなくならせたまひたる、令嬢を看護の勞らわづらひの中に、序文の筆を染められたる厚情を謝す、二氏共に信州の人、信州の山河に最も縁みある本書に「自然」の造詣深き巨匠の作を乞ひ得たる榮を悦ぶ。

「自然」を主とする紀行文は、いかに書くべきものなりや、草木岩石の乾ひたる標本の臚列を見て、却つて「自然」を忘るゝもの、非なると共に、「自然」は猶醇酒のごとし、心ゆくばかり酔ひて足りなむといふもの、亦あそらくは是ならじ、前なるは、記憶と經驗と、單調なる並行線の中を行きて、知覺の驛亭に身を托するを、をはりとするのみ、活潑々如なる「自然」の、生命の、挿外に躍れるを悟らず、後なるは幾何の權威を佩べりともあもはれざる小感情を以て、線もなく、傅彩もなき物體を描き、猶且「自然」の名を冒す、これ僞像の彫刻者にあらずして何ぞ、あよそ物に象あり、線的描法を捨つ可らず、萬象皆色あり、没彩色なる可らず、殊に「自然」は時々刻々に變



化せり、今日の今は、昨日の今にあらず、明日の今にてもある可らず、一朶の陰影にも暗示あり、一閃の明光にも暗示あり、その所見、所觸、所響、所感を、逸早く知網を以て捉へ、永へに情緒を以て繋がば、やく可ならむか、かくすれば零細も真なり、刻畫も真なり、苟くも真ならば、斷片も重んずべし、スケッチ悔る可らず、ノートブック捨つ可らず、『山水無盡藏』は、余が寫生帳の幾十枚を破りたるもの、今となりては、繁瑣を病むこと甚だしと雖も、實は『紀行文』はいかに書くべきものなりや』の疑惑の中に生れたる難産の兒どもなり、幸多かるまじき門途かどに立たすにあたり、いさゝか思ふところを述べて、しかも思ふところに肖さりし、いましを憫れむ。

目次

鎗ヶ嶽探險記

昭和十一年五月十三日 藤

其一 發端……………一

其二 地理上より見たる鎗ヶ嶽……………二六

其三 千曲山脈横斷記……………三五

其四 梓川を溯る記……………四〇

其五 檜峠を踰ゆる記……………六

其六 白骨温泉の記(上、下)……………六

其七 霞澤の急湍を渉る記……………四〇

其八 梓河畔に立ちて穂高山を觀する記……………一〇八

其九 鎗ヶ嶽二回登山の記(上、下)……………一六

其十 鎗ヶ嶽裏山踰えの記……………二六



拾遺一章……………一五四

淺間山の煙……………昭和十一年四月廿九日讀了 一五九

秋の木曾街道……………昭和十一年四月廿九日讀了 一六〇

(一) 諏訪湖……………一六〇

(二) 洗馬宿……………一六六

(三) 鳥居峠……………一七〇

乘鞍嶽に登る記……………昭和十一年四月廿九日讀了

(上) 奥飛驒……………一七五

(中) 平湯湯泉……………一七六

(下) 飛驒乘鞍嶽の絶頂……………一七七

飛驒縦断記……………昭和十一年四月三十日讀了

(一) 益田川を溯る記……………一八四

(二) 中山七里の記……………一八八

(三) 飛驒高山の記……………一九六

(四) 高原川の記……………一九〇

(五) 越中に入る記……………一九九

日本海の虹……………昭和十一年四月三十日讀了 二〇六

計 六篇貳拾貳章

### 附 録

鎗ヶ嶽の植物……………二〇三



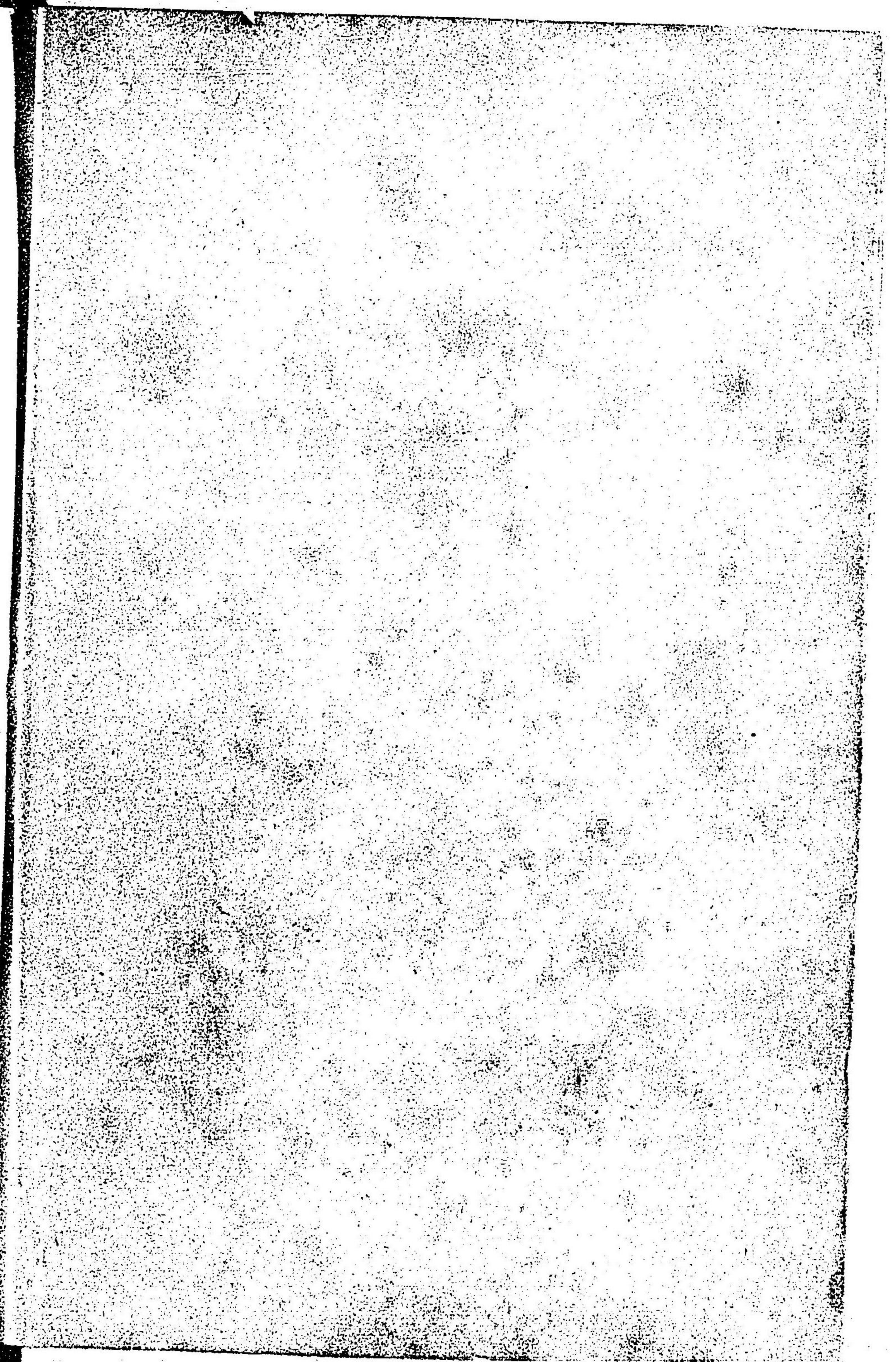
小島鳥水著

扇頭小景	第四版(絶版)	新潮社
木蘭舟	第三版	服部書店
銀河	第一版	内外出版協會
不二山	第四版	如山堂
日本山水論	第二版	隆文館
鳥水文集	第一版	本郷書院

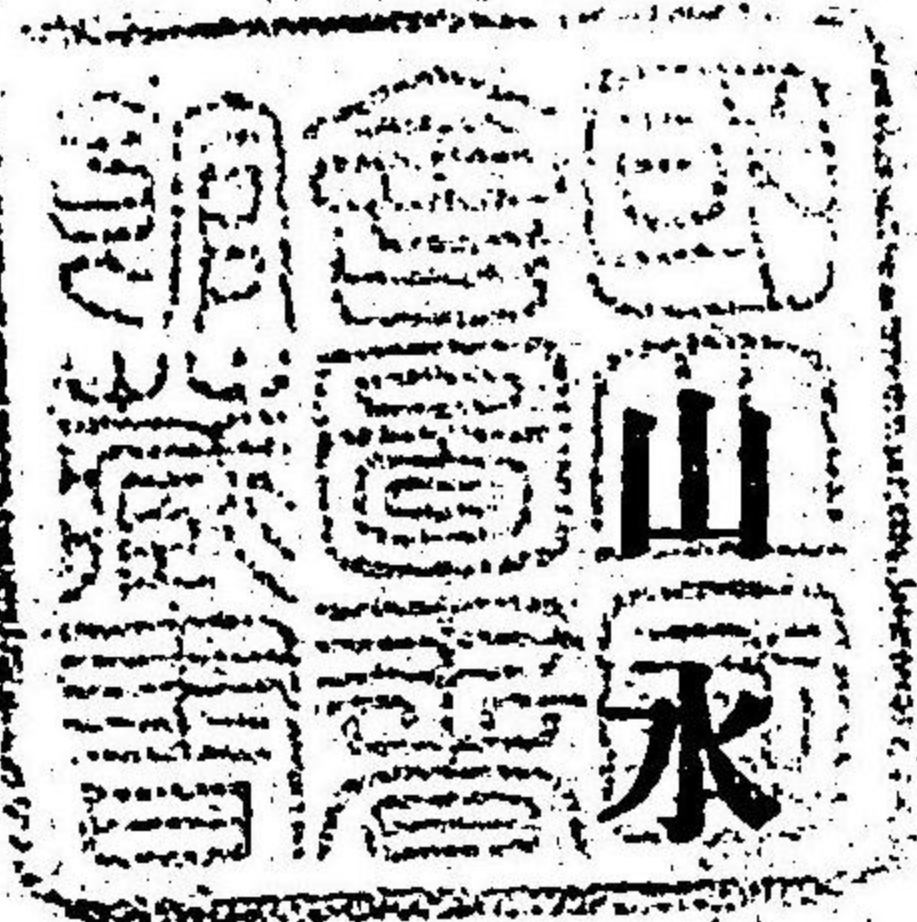




丸山晚霞





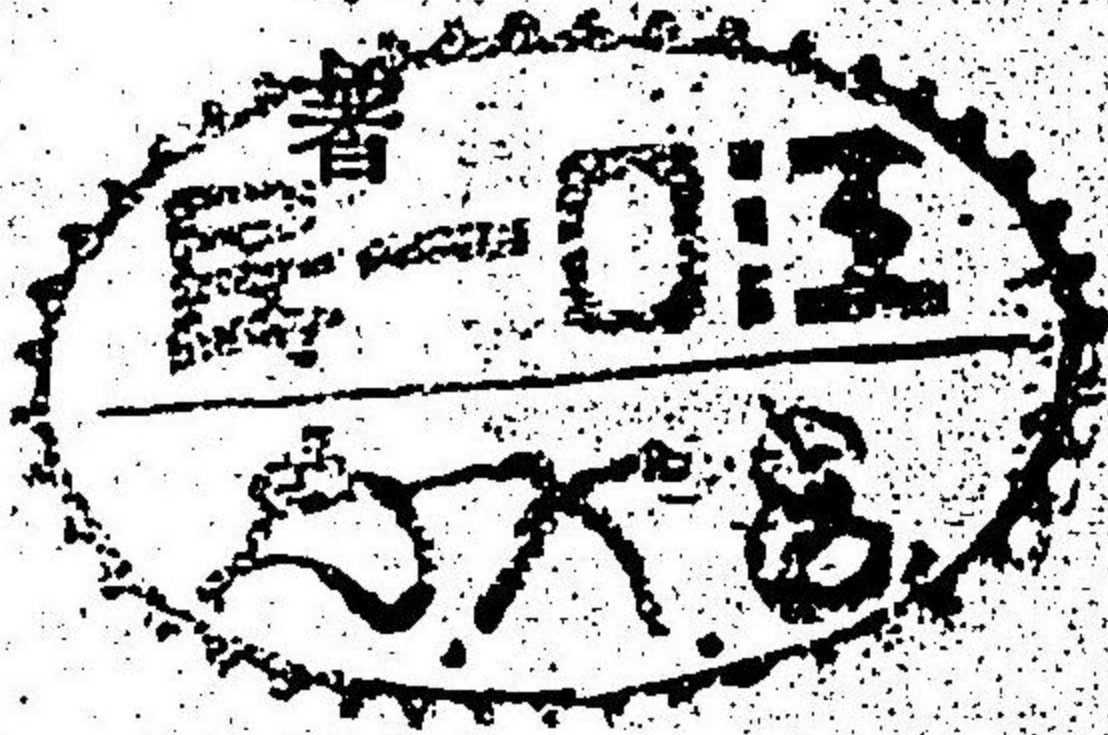


無盡藏

鎗ヶ嶽探險記

其一 發端

小島鳥水著



余が鎗ヶ嶽登山をもちひ立ちたるは一朝一夕のことにあらず。  
何が故に然りしか。

山高ければなり。  
山尖りて峻しければなり。

試に思へ、山といへば本邦の如き火山に富める國にては、先づ富士山によりて代表

鎗ヶ嶽探險記



せられたる圓錐形、及び類似の形態を想像するにあらずんば、筑波山によりて目に熟したる、頂は扁平にして斜面は鈍角なること、臥牛の如きものを推し測られ得るに過ぎざらむ、その然らざるものと雖、支那流の所謂文人畫によりて、潑墨淋漓たるツクキ芋的丘山を連想し來るに止まる。

而して、鎗ヶ嶽は、いかに名稱自證とはいひながら、その疊々として鋭く尖れるところ、一穗の寒剣、晃々として天を削る、その體たらくは日本山嶽に通有せる尖塔形ピラミッドにあらず、一個無煙の煙筒形を成して聳ゆるなり、鎗ヶ嶽が千山萬嶽鐵桶の如く十重二十重に圍繞せる中に、昂々然として一肩を高く抽くさまは、之を草に喩ふれば、裾野に穂を閃かす薄の如く、木に形容すれば、野路にひと際秀てたる一本杉の如く、人に具體すれば風骨珊として秋に聳えたる清瘦の高士の如し。

その高さこと、海拔一萬一千七百尺、水は積層雲と厚さを競ひて脚下に渦き、山は衛星と高さを比へて肩を繞ぐれり、彼喝していへらく、汝等何ぞ霸王の威を讃せざるかと、この一帯に在る群山は、日本に在りても跌宕峻拔、無二の高山大嶽のみ、しか

も彼の前に僞伏して、命を聴かざるはなし、西に加賀の白山、東に信濃の御嶽、北に越中の立山、南に飛驒の乗鞍嶽は、四天王の如く遠近よりこの山を匝ぐりて長揖す、或ものは額に雪の白鉢巻して立ち、或ものは頭上高らかに氷の刃を抜いて立ち、或ものは鬣を逆立てたる肥馬の、今にも天風に嘶かんとせるさまなるに跨がりて、叱咤啞の態甚だ昂れり、若し之に近かんとするものあれば、非情有情の何にてもあれ、危石を與へ、迅湍を與へ、風を起し霧を下し、彼等をして睨いて哀を乞ひ、半途より踵を旋らさざれば止まざらしむ、呵護の力の偉なる哉、かくして鎗ヶ嶽は萬山を統へて、東南の方を顧み、威武遠く富士に迫れども、大靈の鍾まるところ、謙りて之を凌がず、されば萬山富士には其徳を敬し、鎗ヶ嶽には其威を畏る。

余は嘗て木曾の溪谷に沿ひて旅せむとちもひ立ち、信濃上田より松本に到る途すがら、稻倉峠イナクラトウの頂にて初めてこの山を仰ぎたりき、突兀として尖葉形の高塔、霄漢に聳えたるさま、四周よっしゅうに山も無げなり、余はかの塔には人間の覗ひ得ざる何物かを秘めたるにあらずやと疑ひぬ、そは宇宙の創造記を刻みたるにてもあるべし。



その翌くる年、余は乗鞍嶽の絶頂を窺めぬ、浪の如き峻山は、虚空にうねりを打つて、披麻鮮かに、ひた／＼として脚下に寄せたるが、その中に際立てる高波あり、紫影を亂し日光を揺つて、大荒洋の中必より一氣に凸騰す、導者いふ、鎗ヶ嶽は即ち是れと。

次いで余は越後の大岳妙高山に登りぬ、面に當りて直前搶目、天柱の屹として揺がざるものあるを見る、その頂は純白に洗はれて盤然たり、しかも明らかにその何萬年以來の鎗ヶ嶽なるを虚空に刻印したり、おもふに霧島山にありとか聞く鐵にて鑄りたる天の逆錐は、之に比ぶれば霜柱よりはかなき運命を、衝へるものにあらむべし。草鞋の緒はかくして結ぶものぞと、手を取りて教へられてより今は至りて十年、人と爲りては須く鎗ヶ嶽の如く倔强ならざる可らず、文を作りては又須らく鎗ヶ嶽の如く骨力醜態ならざる可らずともいひぬ。

他は圓錐にして彼は尖錐なり、吾性素より尖を愛す、他は婉容にして彼は冷峭なり、我は冷やかなるものに參じて初めて醒むるの快きとおもふ、富士は詩に入り書に入り

たれど、彼は只た天上の光線を浴びて白描せられ、混沌たる雲霧に刷かれて黒寫せらるのみ、彼の影は紙に落ちず、筆に載らず、只た宇宙の或一點にあやしげなる弧線を結ひつけて、千萬年の後、之を解き得る天才の現するを俟つ。

神取は我が企て及ぶところにあらず、我は畢生の力をつくしてなりと、せめてその一端を貌取し來らむ。

二

さらば鎗ヶ嶽はいづこの山なるぞ、いかなる山なるぞ、いかにして上り得べき山なるぞ。

余は之を知らむとして、一二の書に就きぬ、「飛騨國小地誌」は記して曰く、東脈モ亦鷲羽山ニ起リ、北ヨリ南ニ連亘シテ信濃ノ國境ヲ劃ル、此脈ハ高山峻岳殊ニ多ク、下層ハ喬樹長幹森々トシテ挺立ストイヘトモ、漸上層ニ至ルニ從ヒ次第ニ萎縮シ、絶頂ハ殆草木ヲ生ゼズ、今其著名ナルモノヲ北ヨリ順次ニ擧グレバ、北ノ俣岳、中ノ俣岳、坂戸山、鎗ヶ岳、越高岳、燒山、硫黄山、乗鞍嶽、朽洞山等ニシ



テ、其鎗ヶ岳ノ西方ニ接シテ聳エルモノヲ笠ヶ嶽トシ、更ニ其東南ニ隣レルモノヲ錫杖ヶ岳トス、乗鞍ヶ岳ハ國中第一ノ大嶽ニシテ益田大野ノ二郡ニ跨リ、絶頂四陷スルノ形ハ宛騎鞍ノ如ク、鎗ヶ岳ハ峻秀駿河ノ富嶽ニ亞キ、巖崑峭壁半天ニ聳ユルノ形ハ、猶孤劍ノ空ヲ削ルガ如シ、是此二嶽ノ其名ヲ得タル所以ナリ。

と、しかもいづこよりして到り得べきかを説かざるなり、志賀矧川氏の「日本風景論」は記して曰く、

信濃松本町より一里二十町、新村に到り、新村より三里二十一町、島々村に到り、此村にて登山の諸準備をなし、且つ案内者人足を賃し、二日間山中に宿する豫算を以て出發すべし、島々村より登ること八時間にして、海拔凡一千五百米突の處に到れば、「徳本ノ小屋あり」、夫れより三里にして「宮川の小屋」あり、之を山麓とす、宮川より登ること六里即ち、七時間にして絶頂に達し得、其間花崗岩を穿てる奔湍に沿ふこと三時間、花崗岩の群嶺、交々天を衝きて起り、奔湍を去るや、山愈々峻、景物益々莊嚴、花崗岩恣に其の怪奇の状を呈出すること、一幅の大畫圖に異らず、

行々積雪を踏み、時にライ鳥、熊、カモシカを見る、花崗岩山の本色を知らんと欲せば、須らく此山に登るべし。

と、稍や精細なれど、果して誤謬なき紀事なるや否やは、保し得ざるところにして、今一段の檢覈を加ふる要ありしかば、友なる飛驒人に咨りしに、答へは粗ぼ左の如くなりき。

鎗ヶ嶽は私の國のものでも、上つたといふ人はツイを聞いたことがありませぬ、高原川の上流に溯ると、蒲田温泉といふ、至つて邊鄙な村がありますが、それから笠ヶ嶽といふ山へは稀に獵師などが登ることがあるさうですが、鎗ヶ嶽となると、その又奥の高山で、間には溪谷や絶壁などもありませうし、到底人の行けるところではないやうです、さういへば、かういふ話がありました、國のもので何でも鎗ヶ嶽には、奇石珍草が多いと聞いて四五人て入つたところがどうやらかうやら、上りだけは上れたさうですが、霧が涌いたり、風が勁かつたりして、どこをどう迷つたものか、歸れなくなつて、溪へ落ちたり、木に躓つたりして、一週間も山の中を彷徨



いた揚句、漸と人里へ出られたさうですが、その時は皆餓卒のやうな態になつて、折角擔つて來た石などは疾くどこかへ捨て、了つて、生命辛々這つて來たといふこととす。

と、余は衷心頗る安んぜざるものありき。

今年(三十五年)夏八月、余は斷々乎として鎗ヶ嶽を征すべく決心の臍を堅めつ、されどさすがに一人にては、何かにつけて不便を感じたれば、竊に或友に同行を求めたるに、彼も血氣の士、曰く乞ふ往かむ。

山とは何ぞ、土の傾斜の少しく急なるのみ、植物之に攀づ、人間何を攀ぢ能はざらむ、禽飛び獸奔る、人間何を尾し能はざらむ、余はかくの如く山の外廓を易々と描き成して、勿論鎗ヶ嶽をも例外とせず、強ひて自ら慰めたれど、しかも己を知りて敵を知らず、悶々の情なき能はず、又之を飛驒の未見の友、某氏に咨りたるに、その返書は左の如くして、今更に駭目に値ひするものなりき。

鎗ヶ嶽へ御登山の趣、信濃よりか、斐太よりか、信州よりの路は不案内なれど、斐州よ

りは、随分險にて、なかく乗鞍嶽の比にあらず、一人二人の登山者は、何時も行衛不明、一生一代不歸、且目的を達せし者は殆皆無の由、是は事實談に候、熊、狼、山狗、猪の本場に候へば、六連發一挺に、山刀手槍の一振り位は、是非共御用意可然と被存候、下山は斐州吉城郡金木戸へ路を取らるれば、雙六谷の材木石を見る事可出來候、又信州へ下山ならば、白骨峠を越えて、平湯へ出らるれば、話の種とならんかと思はれ候、兎に角、登山の目的相果て候節は、絶世の一大快事に候。余の父母は、平生余の瘦軀羸身、事に堪へざるを慮り、居常小兒に對するが如き干涉を余に賜はるものなりき、されば登山の如きは、殊にその不興としたまふところなりき、然るにこの「はがき」は余の不在中に配付せられて、先づ父母の目に觸れたるなり、父母はいかばかり矚目して、ひた呆れに呆れたまひにけむ、余が歸宅するを遅しと待ち受けて、こゝへ來よと宣ふにぞ、さらぬ顔して言はる、儘に席に就きたるに、父は容を正してあん身は、今年の夏を鎗ヶ嶽とやらへ赴きたまふとかと頼されぬ。同行の友の外には固く秘めたるものを、いかにして父は知りたまひけむと、狼狽の氣味を



いた揚句、漸と人里へ出られたさうですが、その時は皆餓卒のやうな態になつて、折角擔つて來た石などは疾くにどこかへ捨て、了つて、生命辛々這つて來たといふことです。

と、余は衷心頗る安んぜざるものありき。

今年(三十五年)夏八月、余は斷々乎として鎗ヶ嶽を征すべく決心の臍を堅めつ、されどさすがに一人にては、何かにつけて不便を感じたれば、竊に或友に同行を求めたるに、彼も血氣の士、曰く乞ふ往かむ。

山とは何ぞ、土の傾斜の少しく急なるのみ、植物こゝに攀づ、人間何ぞ攀ぢ能はざらむ、禽飛び獸奔る、人間何ぞ尾し能はざらむ、余はかくの如く山の外廓を易々と描き成して、勿論鎗ヶ嶽をも例外とせず、強ひて自ら慰められたれど、しかも己を知りて敵を知らず、悶々の情なき能はず、又之を飛驒の未見の友、某氏に咨りたるに、その返書は左の如くして、今更に駭目に値ひするものなりき。

鎗ヶ嶽へ御登山の趣、信濃よりか、斐太よりか、信州よりの路は不案内なれど、斐州よ

りは、随分險にて、なか／＼乗鞍嶽の比にあらず、一人二人の登山者は、何時も行衛不明、一生一代不歸、且目的を達せし者は殆皆無の由、是は事實談に候、熊、狼、山狗、猪の本場に候へば、六連發一挺に、山刀手槍の一振り位は、是非共御用意可然と被存候、下山は斐州吉城郡金木戸へ路を取らるれば、雙六谷の材木石を見る事可出來候、又信州へ下山ならば、白骨峠を越えて、平湯へ出らるれば、話の種とならんかと思はれ候、兎に角、登山の目的相果て候節は、絶世の一大快事に候。

余の父母は、平生余の瘦軀羸身、事に堪へざるを慮り、居常小兒に對するが如き干涉を余に賜はるものなりき、されば登山の如きは、殊にその不興としたまふところなりき、然るにこの「はがき」は余の不在中に配付せられて、先づ父母の目に觸れたるなり、父母はいかばかり瞠目して、ひた呆れに呆れたまひにけむ、余が歸宅するを遅しと待ち受けて、こゝへ來よと宣ふにぞ、さらぬ顔して言はる、儘に席に就きたるに、父は容を正しておん身は、今年の夏を鎗ヶ嶽とやらへ赴きたまふとかと訊されぬ。同行の友の外には固く秘めたるものを、いかにして父は知りたまひけむと、狼狽の氣味を



色に見せず、かく知りたまふを包むも詮なき業なればと、一伍一仕を述べたるに、父は益す呆れてこれを見よと一葉の「はがき」を投げ出しつ、余が讀み了るを待ちて、宣ふやう、扱も扱も心なき男にて侍るかな、一家の嫡子にして、老いたる親を戴き、幼き弟ども多く控へて、輕からぬ責めある身にてありながら、何を好みてさるところへは赴きたまふ、卿にして若し、土地の測量、地質の調査、植物の採集などが、その職ならば父もえこそは止めじ、よしや屍を深山に横たふとも、その身の義務とならば我がかてか之を惡しとはいはむ、されどちん身は、日常の職業を他に有するにあらずや、若氣の至りとはいひながら、世の常ならぬ好奇に驅られて、さる深山に足踏み入れむとは、心なしとやいはむ、輕重本末を辨へぬ沙汰とやいはむ、まかりならぬことなりと叱る傍より、母は愁ひに沈みて、さる企ては思ひ止まりてよと、口を添ふるに、余も進退谷まりて、鎗ヶ嶽は、いかにも思ひ切りてさふらふほどに、御心安く思されさふらへと、言ひ放ちて獨り室に戻りぬ。

それより後數日、余は或古雜誌を翻へしたるに、地質調査所技師大塚專一氏がものしたまへる「信飛越山間旅行談」といへるがあり、その中の左の數節は、烈しく余が心臓を鼓動したるものなりき。

地圖を繙けば、本邦中部は山脈重疊して、其錯雜なるを知るべきか、此北邊に蜿蜒する飛驒山脈は、信飛越の國境に在りて、大概海拔三千米突内外の秀峰蟻集して、無人の區域を爲す、此山脈の形貌を、其西側越中平原より、或は其東側姫川澗谷より望めば、絶壁宛も數個の屏風を並列したる如く、誰か其巖々嶄々たる秀峯に一驚せざるものなからむ、飛驒吉城郡有峯村以北、二十里、幅十里許の山間には、人屋更になく、唯立山温泉浴屋二軒あるのみ。

余は昨年(明治二十二年)地質調査の公用ありて、九月初旬より、前後一ヶ月間餘の露宿にて、飛驒山脈の信飛國界以北を跋涉したり、實に山路の峻なるに、人をして震慄せしめたり、探求の目的ありて、跋涉せんとする人無きにしてもあらざるべければ、露宿の用意を此かる人の参考に述べむ。難場多き山間を跋涉せむには、獵夫を雇ふべし、食物は米、味噌、鹽食物等にて足れり、又鍋、面桶、山刀杯は缺く可らざる



ものなり、其外餅と麻繩、毛布及油紙も必要の品なれば、用意すべきことなり。餅は溪水なき山嶺を跋涉する時の食物に便なり、麻繩は數十丈もある断崖を下るに便なり、毛皮は露宿の節、之を敷きて寝れば、濕氣を受けず、且温かなり、油紙は寝る折、之を掩へば、雨露を凌ぎ、且身體の蒸發を幾分か防ぎ、ために體温を暖かにすれば、手輕の蒲團の用を爲す。

山脈跋涉の手初は、九月九日なりき。

野口村より其北にある鹿島谷入を登り、信越國界の骨髓ともいふべき、秀峰の鎗ヶ岳、乗鞍岳、不歸岳、祖父岳、祖母岳、蓮華岳等乗り越え、越後西頸城郡大所村に出てたり、此露宿日数は十四日間たり、此山岳は高山峻谷多く、巒間は断崖多く、又累年の積雪結んで尙ほ解けず、進路極めて困難なれば、山背に攀登り峯又峯に亘り行くを尤も好とす、然れども絶頂四近にはハヒ松繁茂すれば、歩行難滞なり、鹿島谷入より四日間を費し、花崗岩の地を経て、針木峠より連なる火山脈、鎗ヶ岳に達せしは、九月二十四日頃なりしが、時に烈風降雪の難に遭ひたり、實に高山降雪

の早きに驚きたり、同岳より乗鞍岳に至り、乗鞍岳の西邊に不歸岳あり、祖父谷、硫黄澤あり、俱に黒部川に注入する谷なるが、南谷は立山積雪の火山脈なり、噴氣孔數孔ありて、其周邊に硫黄を堆積し、厚さ一尺より二尺に及ぶ、其面積兩谷を合すれば八町四方もあるべきが、山路の險なると、高山積雪の地なれば、未だ之が採掘に着手するものなし、鎗ヶ嶽四近は、殊に深山なれば猪熊多く居を占め、不歸岳

(近傍に在て、數次猪の奔るを見たり。)

と、この文を讀みたるときの余の感はいかなりしぞ、たゞしこゝにいふ乗鞍岳又鎗ヶ岳といへるは、孰れも信越の境に高聳したる山にして、余が所謂鎗ヶ嶽乗鞍岳とは全く同名別山なり、余の所謂鎗ヶ岳乗鞍岳は信越境上のものにして、鎗の高さは海拔三千五百三十二米突、鞍の高さは三千六百六十七米突、而して信越境上の鎗に至りては海拔三千二十米突、即ち信飛のものに比べて遜ること一千七百尺、鞍も又漸く三千米突の前後に過ぎざるべければ、又信飛のものに下ること數段なり。しかも頑兒の性質によりて嚴父の人格を下し得べしとすれば、彼に比していやが上に高く且つ深き、余が



目的の鎗ヶ岳が、人跡未だ到らざるところに、牢く神秘の扉を閉して、峻絶峻絶を極めたるさまは測知するに難からず、余は大文字に疊の上に寝そべり、手足を勢一杯に弩張して、天椽を睥睨しながら、地圖中の山名を胸中に思ひ泛べ、かしこの村にて準備を整へ、かの川を亂りてこの時に出て、かくして……空想は殆ど盡くるところを知らず、双親に誓ひし語を破らむは不孝の兒なり。されど不孝の兒たらざらむには、一片兀傲の意氣地を奈何せむや。

余が當時の腹案は、以上の見聞を取捨して實に左の如くなるものなりき。

(一) 飛驒より、鎗ヶ岳に登るは不可能のことなれば廢すべし。

(二) 信濃島々村より、鎗ヶ岳に登るは、或は可能の事なるに似たるを以て、島々村にて詳細を探り、可否を決すべし。

明治三十五年八月十六日、余が鎗ヶ岳の絶巔を究めたる當日までは、余自身と雖、實に鎗ヶ岳登山の能と不能とを知らざりしなり、あらず、登山を欲するか、欲せざるかも、未決の問題なりしなり。

## 附記

鎗ヶ岳の標高は、諸書に散見するところ、三千五百三十二米突(志賀氏「日本風景論」)一萬二千六百五十二尺(松島剛氏「近世地理學」及び矢津氏「日本地文學」)一萬三百呎(Rev. W. Weston's Japanese Alps)一萬二百四尺(明治三十六年長野縣第二十二統計書及び高頭式氏「日本山嶽志」)三千九十二米突(山崎佐藤兩氏「大日本地誌」第三卷)等あり、余は次章に、假に一萬二千六百尺説に従ひたれど、實は高きに過ぐるが如し。

同山に遊ぶ志ある人のために、參考書を擧ぐれば、前記「日本風景論」「日本山嶽志」「大日本地誌」ウェストン氏の Mountaineering in the Japanese Alps 四書の外に、チャムパレイン、メーンズ二氏合著、Hand Book for Japan 第七版(二百七十二頁より二百七十四頁に至る)及び、横濱の英人某氏が、昨三十八年に私刊して、知人に頒ちたる Glimpse of the Japanese Alps (シヤパン、ガヤント社印行)一卷あり、就中此最後の書、及びウェストン氏の著を詳密となす、惜しい哉、共に汎く世に布かれざるを。

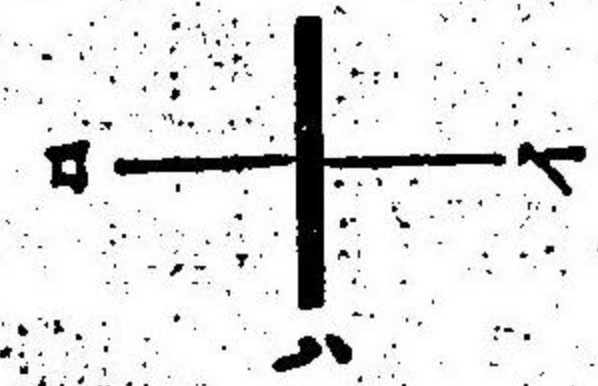


余が本紀は三十六年に著したるものにして、日本人の手に成りたる。同山最初の紀文なりしと信す。

### 其二 地理上より見たる鎗ヶ嶽

二個の巨人あり、瑠璃盤に湛へたる碧水の中に相對して、浴を潔れり、その手肢は節くれ立ちて、扇骨の如くに横がり、こゝは無慮四千八百萬の生靈を扼して、自らは干興せざるもの、如く、その肩の少しく高く挺くところ、表よりひた打つ水を太平洋といひ、裏より寄せて返へすを日本海といふ。

この巨人とは何物ぞ、日本國の骨節を成せる、二鎖の縦嶺是なり。



試に我が日本の地圖を披けば、日本國土の大體は、實にこの二鎖の縦嶺と、別に一個の横嶺とによりて、十字架狀に組織せらるること、約そ上の如くなるを見るべし。

即ち其一はイの方面よりするものにして、樺太より南々西に來る、他の一はロより來るものにして、支那北嶺の楊子江口に於て東海に入り、九州より東々北に走りて前の巨人と握手す、時を同じうして生れたる同胎の兒、始めより合一の默契ありて、存するもの、如く然り、この二巨人の握手隣辱せるところは、源頼朝と義經と兄弟交手したる函嶺附近にして、實に我が日本國の心腹に該る、而してこの心腹に東帶せるものは我が所謂一個の横嶺にして、即ち十字架のハに當り、小笠原群島、伊豆七島を経て伊豆の天城山、相摸の函根山、駿河の愛鷹山、富士山、甲斐の茅ヶ嶽より、信濃の八ヶ嶽、立科山を包括し、越後の妙高山に終る、その延長殆ど緯度二十五度間に亘る、地學者の所謂富士帶(實は裂帶なれども)は即ち是なり。

この富士帶が、日本全國の中央を梯子の横木の如くに横絶するによりて、日本は劃然南北に別たれたり、抑も何物の眉尖刀か、敢てこの無玷の金甌を破りたる、この横帶より銀の如くなる水を南北に迸瀉すること、滾々として幾千歳、今若し三萬尺の高き虚空より下瞰すれば、日本の國土は、恰も無格好にヒヨロ長さ山の芋の胴を、絹絲



にて結びたる如くなるべく、その絹糸の兩端は北に在りて信濃川となり、南に在りては富士川となる、彼山が地貌上に日本を半截したるが如く、此河は水貌上に又日本を兩分す。

富士川は今之を措く、試に我をして信濃川を溯らしめよ、信州長野の東にて二つに岐れ、南東に向ふものは千曲川となり、西南に上らば犀川となる、犀川は所謂善光寺平を紆餘曲折して西に向ひ、新町附近より一頓して南するや、急瀬となりて石を轉ばし、沙を蹴り、松本の北西に至りて又奈良井川と梓川の二に分たる、その東南なるものは木曾の駒ヶ岳に發源せる奈良井川にして、古驛肅として霸氣沈み去んぬること久しく、亦當年の長槍大駕を見る可らざる木曾街道は、この河畔に存す、しかもこの川は烏居峠を踰ゆるに至りて願盼の外に在るを以て、我をして踵を前に旋らして、西南西の方梓川に溯らしめんか。

梓川はその源を何處に發するか、地理書の記するところ之を審にせず、本邦地理書の典據なる『日本地誌提要』には、飛驒信濃の境なる乗鞍嶽に發すと記せるより、近

時坊間に流布せる群地理書皆之を襲ひて、しかく記せりと雖も、土人の唱ふるところに據れば、こは其實に合はず、野麥峠乗鞍嶽、その他の峻山より、百水をこの河に併せたるは、争ふべくもあらずと雖も、更に進みて討ねればこの河の兩岸には、萬仞の危峯亂舞して、春の笋の茁えたる勢ひにて交も天を衝き、水は四山に反響して、洪鐘を敲き鳴らしたる如くなる中を、飛ひ々に縫ひて猶溯り行けば、實に信濃飛驒の間を並行せる二列の大山脈中に白幣の搖がぬ根生ひ、屹々然として雲漢を衝ける常念ヶ嶽鎗ヶ嶽の境なる、神秘の墻壁を破りて奔るものにして、この並行山脈の間を南へ取り、乗鞍ヶ嶽溪壑の間を環流し、蛇行し、鱗鱗を倒しまに立てたる如くなる峽間を、白馬と電光と相駭いて奔馳する如くなることは、我が今回の旅行によりてその實を確かめられぬ。

嗚呼信濃第一の險流なる梓川よ、その梓川を吐き出だせる鎗ヶ嶽よ、彼はいかなるところに高聳せるか。

さてや、是より鎗ヶ嶽の地理的概念を語らむ。



富士帯の本州を横さまに断つや、その東側は山なきにあらずと雖も、兒孫の類首して阿爺を拜跪するに止まる、ただ西邊には急峻なる斜度を成し、富士帯を凌駕して高聳せる大連山あり、今この大連山を南北に別たむか、南なるは一萬尺以上の赤石山を盟主とせる赤石山脈なれど、これは本編に關係薄ければ絮説せず、北なるものを又二分して一を千曲山脈といひ、その西に當りて駢行せるを飛驒山脈といふ、所謂千曲山脈なるものは、千曲川と犀川との間に聳へたる山嶽の總稱にして、かの善光寺もしくは北國街道の衝に當れるをもて知られたる猿ヶ馬場峠、冠着山、姥捨山等はこゝに連鎖せり。(第三章「千曲山脈縦断記」参照)その層向の次第に西するに隨ひて、飛驒山脈と並行す、余が今回の旅行は實にこの千曲山脈と飛驒山脈とを串通跋涉したるものにして、殊に飛驒山脈に至りては、富士帯と犄角して殆んど之を壓倒するばかりの高山深谷にして、我が鎗ヶ嶽はその中樞に處るを以て、尙ほ精説するの要あり。

飛驒山脈は日本無比の最高峯を以て比肩接踵せらる、日本の横切面を三角形なりと

すれば、その尖點に立ち、日本の垂直面を浮城なりとすれば、その屋梁に坐す、四圍皆一萬尺前後の天柱、森々然として雲を截り、空に挿む、殊にその信濃、飛驒、越中、越後國境に至りては、山中又山を包み、山上又山を架して頭を改むるも山ならざるはなく、面を換ふるも又山ならざるはなく、天上より瞰れば綠芽の土を掀ぐる如くなるに過ぎざらむも、下界より之を瞻仰すれば、雲を抉りて列宿の并舞するが如きを見るべし、まことに是れ天の成せる自然の大關門にして、飛禽猶翔けるを難んずる懸境なり。

此山脈は主として花崗岩、安山岩及び玢岩等より成り、南より北に連なる、その短かき鬚なる草木を天風に逆立て、今にも大地を爪に飛動せむとする山勢の、因つて起るところを原ぬるに、かの一方は木曾川、一方は天龍川及び豊川流域の境を成して、南の方伊勢の海に至りて止むなる木曾山脈(最高點は信濃の駒ヶ嶽八千四百尺にして美濃の惠那山七千三百尺之に次ぐ)に接続し、畝りに畝りて北に奔り、一萬尺以上の御嶽となりて、天球に凸突一點を加へたるもの、繼子嶽、長峯峠、朽洞山となりて、



大蛇の半空に懸るが如く、野麥峠に至りて少しく凹みたれども、又乗鞍嶽となり、高峻雄大、八面を睨まへて仁王立ちとなり、山麓はこゝに一旦鑪を合せたる如くなりて又阿彌陀形に開き、東北行するものは霞澤山、鍋冠山、有明山となり、北向するものは阿房山となり、硫黄嶽、焼嶽となりて、穂高山に列なるや、その名の自詮に背かず、一萬尺以上の尖塔を半天に擔入して、淵葉樹の森林は永劫に太古の夢縁なり。

而して穂高山と比肩して、尙ほ一頭地を高く抜くものは、實に我が鎗ヶ嶽にして、列障壁を作る上に、巉々兀々、雪白天に參して、四周の碧嶙峋駭き仆る、即ちその背に足踏みかけて、恰も似たり、我は一切人天の中に於て、最尊最貴の王なるぞや、と宣れるが如し高らかに！

げにさもありぬべし、鎗ヶ嶽の四周を匝ぐりて侍れるは、笠ヶ嶽、蝶ヶ嶽、烏帽子嶽、焼嶽、抜戸嶽、屏風嶽等にして、鎗ヶ嶽はその中に安處すること、皮を堅くして自ら禦げる核子の如く、一劔天に倚りて重い哉、威。かくして合沓重疊の萬山を磨き、北の方針木時は針葉樹の尖れる如く餘波を虚空にのた折ちて、餓鬼ヶ嶽、祖父ヶ

嶽、祖母ヶ嶽、槍ヶ嶽、大里ヶ嶽、不歸ヶ嶽、等揆揀して白馬ヶ嶽に又凸兀空を摩し立山を尻目にかけて、鉢ヶ嶽大蓮華山小蓮華山となり、それより漸く低くして古世紀層の山となり、延ひて絲魚川泊間の急崖懸壁に至り、横断して日本海に泊没し了す。今試に飛驒山脈中の重なる山嶽を、高度の順次を逐ひて左に列記せむか、勿論測量は大握みの概算に止まる。

- 鎗ヶ嶽 一萬一千六百尺
- 穂高山 一萬一千五百尺
- 常念嶽 一萬五百尺
- 大天井嶽 一萬四百尺
- 乗鞍嶽 一萬四百尺
- 御嶽 一萬四百尺
- 祖父ヶ嶽 九千九百尺
- 大蓮華山 九千六百尺



槍ヶ嶽	九千五百尺
蝶ヶ嶽	八千四百尺
針木峠	八千五百尺
雪槍ヶ嶽	八千百尺
笠ヶ嶽	七千九百尺
硫黄ヶ嶽	六千七百尺
朝日嶽	六千尺
平湯峠	五千八百尺
長峰峠	五千五百尺
野麥峠	四千八百尺

等、日本全國を通じて、富士山に次いで、槍ヶ嶽第二、穂高山第三、常念嶽第四、大天井嶽第五、乗鞍嶽御嶽第六第七の首斑を、悉く此一山脈にて領したるなり、之に次いで甲斐の白峰（一に白根とも書す、古今集東歌に所謂、甲斐が根なるものは是なり、

海拔一萬二百尺、信濃の赤石山（一萬百尺）を後勁とすれど、他の九千尺以上なるもの、亦悉く精銳をこの山脈にあつめて、挺拔逸宕、八面に敵なし、世の稱して名山といふ加賀白山以下に至りては、八千尺前後なるに過ぎざるを以ても、之を覺るべし。

かくの如く高山の棲所なるが故に、此脈の東側は姫川谷松本平に急斜し、その西側は農飛高原（美濃の大半、飛驒の全部、之に接する越中、加賀、越前、近江の僅少なる部分を掩有す）に接す、若し人あり、盛夏この飛驒山脈に並行せる地之線に沿ひ、深谿幽谷を南北に串通せむか、凡そ三十里の間兩崖愈よ迫りて、その雄壯峻拔なること二個の屏風を折り繞ぐらしたる如く、水流は雲根に激して千山を揺り倒さんとし、千山は青を紫ひ蒼を練ひて、目睫の間に飛び、時に恠禽悲愴の聲、帽を壓して落ち來るとき、始めて自然の子に歸らむ。

其三 千曲山脈横斷記

八月七日、雨。



八月八日、雨。

八月九日雨——この頃の日記は、同線同割の一字を繰り返へすのみ、起きては天を仰ぎ、寝ねがてらには天を仰ぎ、たゞ彼の一字の用なきに至らむことを祈りたるその夜、同行を約せる友來る、曰く雨止まずして休日は盡きなむとす、休日盡きて山霽るゝも奈何かすると、遂に登山の程に上るに決す。

十日、出立、二人とも洋服、半ズボン、脚絆、洋傘、麥藁帽等、尋常一様の旅装のみ、余は別に登山の旅装としては、準備すべきものなきにあらざりしかど、今回の目的地なる鎗ヶ嶽は、果して信州口より登り得べき見込ありや、よし是ありとするも、この雨又雨にて決行し得べきやと、たとへば足前みて手従はざる遅鈍力士の如く、余等が汽車に搭したるときは、既に土豚の上に立ちほだかりたるに係はらず、自ら詮術を知らず、先づ信濃なる友人秋曉を訪ねて、同行を誘ひ、その諾否によりて決心の臍を固めんとしたるなれば、他の旅装の如きはその上にて隨處整ひ得べきを以て、今は着手せず、只だ腰に拳銃一挺を忍ばせたるは、驚破といふ場合に、田舎にて購ひ得

可らざればなり。

品川にて乗換へ、赤羽にて再びし、こゝより輕井澤に到るまでの中仙道の汽車を、余は平凡なる文章を誦ずると共に、最も倦み易きものゝ一に算へたりき。然れどもこの日、玻璃窓を透して覗はれたる上毛の平野は、平生目睹するところの養蠶、機聲、製絲場、煤煙、髪<sup>の</sup>如く坦らかなる大道の上毛にあらずして、たゞ「雨」の上毛なりき。一日も日記に書することの多からざらむを冀ひたる雨は、いかに新らしく天地を洗ひて、こゝに蘇りたる自然を發見したるか、勿論雨のために荒川や烏川の水はその純碧——ならざるまでも比較的<sup>に</sup>平野の川としては透碧なる——色を汚濁されて、その淺きところは乳色となり、吹草<sup>の</sup>息より荒く、犬蓼<sup>を</sup>引き摺りては狐色に焦げ、川に漲りては、だぶくと榛の樹の梢に、澱みを作り、流るゝや珊瑚色を成して胸悪しからざるにはあらずと雖も、その雨のために青生姜の葉は、木賊にて磨きをかけられたるやうになりて涼しく、村家の背戸に穿たれたる池に、青傘翠蓋珠を躍らしたる蓮の浮葉は、粒々の舍利を吹き、こゝの屋根なる一八や、かしこの池なる澤潟や、河骨



や、その葉は皆生きたる緑となりて輝かんとす。

夫れ葉も緑なり、莖も翠なり、夏は天地皆一青のみ、我ももふに、若し色そのものに重量ありとすれば、青は最も重かるべし、濃ければなり。今見わたす限り、村家の軒を這ふ絲瓜も青く、垣に卷舒する零餘子も青く、たゞその間に雌々點々、鶯色の葉屋根を露はすのみなれど、それすら闇さほどに緑を浴びて、中に棲まへる人は蠢々として芋蟲の如く青からんとす。夏の大地はこの億萬斤の重量に堪へて、能くみじろがざるなり、我は天の崇高を説くものにして、何故に地の壯嚴を讚嘆せざるかを怪しむ。

これ凡てにあらず、秩父は見えず、日光足尾は遠かり、大虛冥濛の中に屹立せる赤城は、後へ後へと逡巡して、早くも榛名山に對す、藍靛の古びたる錆を刷いたる、その鈍圓錐形は根張り悠然と、臺地の緩斜となりて、ナポレオン帽の形にぞ横はりける。こゝに漲る青海波を遡るために、上帝が組み立てたる防浪材はこれなるべし、あらず、西の方淺間山を仰ぐに、榛名の色の紫下濃にして、裾捌きやさしさに反して、これは

肩よりかけて黒茶の荒織を引さかつぎ、その雄たけびは神明の靈火を包んだる烟となりて、一丈二丈と伸び、五丈十丈限りもなく、吹いて吹いて吹き止まず、高く春きては歌峰となりて亂るゝ雲に吞まれ、低く白雨に敲かれては慧政にも似たる連山の瘤に屯ろして、地上夢より淡きもの茲にも一つ見えたり。かしこけれと日本武尊の執着を之ゝに刻み奉つりて、淺間山を「思婦石」とすれば、榛名何ぞ「望夫石」たるに辜負せむや。

骨立ちたる妙義、腸涸れたる碓氷川とを左に視て、汽車は碓氷峠を上る、隧道を潜ること二十有六、風物こゝに一新す。

碓氷峠は夏と秋の間に横はれる門なり、青字と黄字との間に點ぜられたる、なり、汽車が隧道に入りたる間は、暫く「自然」と「人」とを描きたる寫真帖を閉ぢられて、太古の關に入りたる如くなりしが、その二十有六の怖ろしき穴——こは夢の洞窟なるべし——を過ぎ去りての後、披き到りたる自然の態はいかにぞや。知んぬ、峠の以東は濃墨にあらずんば厚色、峠の以西は輕光にあらずんば淡彩なるを、見よ満目は荒涼た



る大野原にして、燦爛せる熔岩より解弛したる土層にも、種子あれば草あり、草あれば花あり、花あれば蝶あり、こゝに熔岩の磊々たる大塊まで、鵝茶色となり、剝げ落ちたる上に生えたる落葉松も、金茶色となり、はては女郎花、男郎花、尾花、車百合、撫子、萩、月見草など、その大部分は黄色、若しくはそれより一層冷たき白色を以て代表せられざるはなく、その間にひよろりと高く挺きたる柞櫨の類のみは、紅を潮すといへども、三分ばかりは梶染の黄葉を簇々として翳したり。かくの如くして這個白練黄摺の大和錦は、十度内外の傾斜を以て、浅間の裾野を延展せり、恨むらくは雨雲に妨げられて浅間を見ず、幾回となく眼鏡の曇りを拭ひたれど、重き大氣を昇る能はざる狭霧の、僅にその八合目以下に屯んで、原上の地平線に微けき半圓形を畫き、その間より葡萄染めの裳褶を延けるあるのみ、しかも我淺間山下に来る毎に、萬有は彼の前に草となりて靡き、人は彼の前に凍蠅となりて蟄するをおぼえて、頭上重き萬斤なるを感ぜざるはあらず。霽れたる日は鮮やかかなりと言ふ勿れ、浅間山はいかなる時、いつこより之を見るも、一個の幻のみ、火げざるときは静かなりと言ふ勿れ、我が冷

灰の心も、之を山上に移せば即ち燃ゆるをや。

立科山も、信飛境上の大岳も見えず、はじめ意へらく、碓氷峠一つ踰えなば、雨の降ること甚だしからすといふ話を聞きて、せめては心を慰むるよすがとせむと、向ひ合ひたる土地の人らしきに話しかけむとしたるに、彼の唇は先づ顫ひて『あなた方は東京で在らつしやいますか』にはじまり、矢次ぎ早に『東京でもこんな雨が降りますか』と、彼は偶々余が訊ねんとしたるところのものを以て余に答へたるなり、休んぬる哉。

千曲川の清瀬——おそらくは濁流なりしならむ——も眼に入らず、屈詔の中に過ごして、上田に下車し、歩むこと里餘にして秋曉を訪ふ、豫ねて約したりとはいひながら、この雨を冒して來りたるは、彼の不意に出でたるところなるべし、しかも養蠶に一家幾ど忙殺せられたる剝那を割いて、我等を離れ舍に延き、酒を置いて驢侍を與へられたる友の厚情は、謝するに堪へたり。主人の机上には山百合の花兩三枝を一瓶に挿めあり、言ふ、信濃附近には赤百合多し、白百合は絶えて見るところなしと、我等關



東常住の人には、むしろ赤百合こそ珍らしかりけれ、されど香氣脈々として高く、風情の秀れたるはげに山百合にこそと頷く、夕刻嚴君も亦席に見えられたまふ、この日全國衆議院議員の總選舉あり、嚴君はその立會人の役を今果たして來たまひつるなりと、是より政治農業の話にて夜闌けぬ、鎗ヶ嶽登山の話出て、主人賛するともなく、賛せざるともなく、果ては三人等しく天候を下しては、去就に迷ふのみ。

翌十一日、又大雨、秋曉曰く、モ一晚泊つて翌朝起つたらどうか、せめて白骨——松本ぐらゐまではお伴をしやうと、しかも明日を待つも晴を必ずべきにあらず、且つ養蠶繁劇の彼を強ひて拉し去るも、本意にあらねばと、遂に斷然午後より出立に決す、彼頑強に抑留して、はては草鞋を押しかくすを忍ぶに至りたれど、二人俱に決心を翻へすに至らざりしは、多くもあらぬ休日を半日たりとも徒費せむことを恐れればなり。去るに臨みて、友は嚴父と細君と、雨中廡下に並び倚りて、我等の行を目送せらる、別離何ぞ忽々、旅に在りて心を傷ましむること多い哉。

上田市中にて林檎幾個を購ひ、上田より篠ノ井線の汽車に乗り換へたる後、四周雨

中の光景徒然なるまゝに、ポケットより一つ二つ把り出て、且つ剣さ且つ味ふ、心こゝにあらずして只窓外の天に在り。所謂篠ノ井線は、更科村篠井にて信越線と分岐し、松本を経て鹽尻に達するもの、稻荷山を過ぐる頃より雨大に到る、軌道は爪先上りとなりて、次第に高く姥捨に向ふや、田は梯田にして段層をなし、林には赤松多く、その中に湛へたる小池の、ちもて白く光りて、をぐらさ林に明鏡を磨きたるに、翼あらば俯して銜まんかとぞれもふ。村家の籬落、往々林檎又は杏を培養す、雨點滴、その葉に傾瀉して銀の顆を垂る、姥捨に至りて土地は一段と高く、觀月の勝を以て名ある姥捨觀月堂の背後に停車場あり、八幡町を歴す、犀川と千曲川三川によりて沖積されたる沃土は、眼下に展べられて、晴れたる日には長野市を眺望するのみならず、坂城、屋代、篠の井、長野、吉田、豊野、稻荷山の七停車場を雙眸に收むと、同車の客の説くものあれども、けふはたゞ千曲川のS字に曲折せると、鏡臺山の聳ゆると、汽車の軌道の圓心形に拗ちられたるを、雨中あざやかに揺られながらに望むに過ぎざりしが、姥捨より進むこと幾何もなくして、冠着山腹を穿てる一本松隧道に入る、地は是れ第



三紀層、鹽尻峠の北方、和田峠鉢伏山の邊より起り、始めは南北に連なりしもの漸く東北に彎曲し、筑摩山保福寺峠よりこゝなる冠着山となれるものにして、山勢雄峻、ものづから千曲山脈のために大段落を作る、その第三の隧道の如きは、延長略ぼ二哩に亘り、既成鐵道中笹子を除いては、匹敵するものなし。

こゝを出て、麻績に到る、馬場峠以南、立峠以北に介在せる山間の一僻村にして、馬場峠を横絶すること三里に及ぶといふ、しかもこの山間は是れ中央政府の在るところにして、高等小學校、警察分署、郵便電信局等を有すとは聞くものから、地は一千米突計なる高臺にして、山地の斜面は概して急に、地貌は久しく水蝕作用を受けたるを以て、谷を刻み、幾多狹長なる山脈にて區分せられたるが如し。その中部の起伏や、少き平原は、この麻績より南の方、西條に通ずる間のみなるべし、こゝは火山の裾野にてあるかの如く、玻璃窓を透して見たる小流は、淡灰色の粘土質を奔りて、赤褐土を沈積し、水色は不透明なる白乳となりて、渦けりといへども、原のおもてには撫子、蕎麥、藤袴、葛、女郎花、萩等取次に亂咲して、その色相の變々化々は、波系の紛

糾交錯する如く、眼前を飛び違ひ、入り亂れて、身は山中の客たるを知りて、汽車中に在るを知らず。

西條驛の中央を、一小川貫通して、ゆるやかに流れ、小禽蟲を啄みながら、飛び翔けりては草を出て、草に入り、その後景を作せる山側は、精くして曲線に缺潰せらる、川の右側には低檐茅宇、不揃ひなる櫛の齒を引くごとく、その籬落には、菊、天竺牡丹、満咲して千斛の露を瀉ぐ、偶々子女三五、傘を掲げ高履を穿きて、かの川に架けたる「へ」の字形の橋を渡るところ、身は汽車中に在るを知りて、山中の客たるを知らざりし。

西條停車場より半里計、工事の困難と長距離とを以て、冠着隧道と比肩するに足るべき白坂隧道を出てたるころより、高臺は次第に下りとなりたれど、これより軌道を夾みて高聳せる絶壁は、懸崖を立てたる如し、路右に屋高く廂長さ紫黒の大頑石あり、刀痕とも紛ふばかりの披麻縦横して寸土を剩さず、その天邊より息をも吐かず放射せられたる雨は、石を爬きて鳥の毛を撈れる如くに飛ぶ、軌道は潤谷を兩斜面にした



る、その三角尖點に布かれたる如く、右も左も赭岩、黒松、白水、黄河なれば、その峻絶なること碓氷の及ぶところにあらず、まじろきもせて雨中の光景に見惚れたる間、偶々熊の子の如き黒毛の小獣あり、截り立てたる崖の上より、トボクと轉げ落ちて、突と溪流に入り、水を爬かんとして麥酒樽の轉顛する如く、二三十反ばかり押し流さる、今にその何物といふことを知らず。

我が日本は狭長なる山嶽國なれば、落機山下、黄穀穰々として畑るが如くなる大原に、夢の千里を辿りゆくことは望むべくもあらねど、平生歐人の紀行を読み、アルプス山中四十幾餘の峠が、入り亂れて出頭没頭する間を、ケールブル、カアにて引き揚げらるゝといふに至り、いかに興味あることならむと思ひを天外遠く馳せたること、當に一にあらざりしが、今この軌道を獲て竊に自ら慰めぬ。

明科に至るや、崖は仄立し、溪流は莽放し、橋は出水のために折斷し、蛇の目傘や破れ目ぢをろしき番傘は簞笠の人と往來に旁午して、一揆や起りつると目を張るばかりなり、梓川ははや溢れて、桑畑を幾反か没しけむ、葉の力なく翻へるが魚躍るか

も見ゆ、この時の雨こそ世に怖しきものなりけれ、やはか地球の中心を、洪水になさては止まじとやうに、トシヤ降りとなりザンザ降りとなり、汽車を目懸けて打つや礫、飛ばすや彈子、汽車は白濤に噛まるゝ孤岩の如く、十字火の目標となれる鋼鐵艦の如くなりて、立往生は有無の問題にあらず、遅速の問題と見えたりき、沿道の工夫や、村民や、皆簞笠に身を固めて、或は軌道の側なる小舎に火を焚くもあれば、長鍵を小脇に搔いこんで、石の顛墜に備ふるもあり、體たらく愈よ穩かならず。

この停車場より、犀川の水勢急峻なるを望む、汪々として動かざる如し、知んぬ、人あまりに怒るときは言語を絶し、川あまりに急なるときは却つて聲を呑むを、大橋長さ二百二十間といふもの、その上に架す、こゝより以南、會田川、湖澤、中川手、上川手等、三里の間霽れたる日には、乗鞍嶽、有明山等碧落に頭を撥入して、巨人の如く屹立するを見るとは聞くものから、雨はさしもの一萬尺を朽葉よりはかなく揉み消しぬ。村家の庭には柿猶青く、木槿の紅花はうす紫を帯びて、雨にえたへじと俯向くが多かり、無残やな七夕の色紙は色褪せて、笹の葉と纏つれながらに逆立ち、風を截つてと



ユツと鳴り、虚空を波形にのたうちて亂れ文字を書しては掻き消しぬるほどに、乙女の願ひや空なるべき、うち見やりたる所、この邊の家作りは、皆白壁にて塗り籠めたるものにて、都にていふ土藏作りなれど、入口の狭くして小さき、光線はいかにして取るならむと危まる。鳥川の穂高川に合して、丁字形に犀川に注ぐところ、犀川の對岸に穂高神社を見る、新に車を入り來れる客の、誰に語るともなく語るを聞けば、水嵩は今朝に比べて既に三倍より高くなりぬと、明科の停車場にて用ゆる所の石材は、皆花崗岩、鳥川より研り出す所の物なるを以て、土人は鳥川石と呼ぶ、同車の人鳥川の風光を説いて言ふ、梓川も鳥川も、花崗岩地を流るゝ急湍なれども、梓川を挾める兩岸は人家多く、炊烟の川づらを甜むるもの絶えねば、水は濁りたり、まことに水晶の如く透き徹りて見ゆるは、この鳥川の水なりと。

田澤の停車場にて待つこと五分、汽車は微搖だになし、雨は益す烈しくして、千樹見る／＼この一刹那に裂けむかともふ、待つこと尙ほ三十分、雨や、衰へたれど汽車は動かざるなり、日は既に昏く、山は曇みて烟の如き小雨に五丈十丈と伸ぶるか

ともへば、忽焉搖すられて落ち去んぬ。千樹は草の靡くが如く小さくなり、大きくなりて、村家の燈火一つ二つ脈を搏ちたりしが、汽笛の聲は聞えざるなり、戸を開く音の次第に荒々しくなりて客の喧噪は、雨と反比例に昂くなりぬ、忽ち靴音のこゝかしこに、不調和なる雨垂拍子に交りて聞ゆるあり、「軌道が毀れましたから、暫く待つて下さい」と、こは口々に驛夫の傳呼するなりけり、何時間待つのかと聞けば、早くとも二三時間ばかりませう、實は今夜中に開通するかどうか、それも受け合はれませぬと、この頼もしからざる答へを聞くと等しく、乗客は言ひ合せたるやうに空腹となりぬ。驛長は三時間を限りて遍ねく解放令を布きぬ、客は先を争ひて構外の鄙びたる「はたごや」に夕餐を喫すべく出て行きたりし、余も泥濘を蹴つてそこを駆け廻はり、とある菓子屋——寧ろ荒物屋を尋ね當て、大さ盆の如くなる麵麩を四五塊購ひ、車中に持ち戻りて友と共に喫ふて饑を癒やすに、紙屑もこれより味あらむと思ふ。待つこと尙ほ一時間、夜全く昏黒にして、路傍の立木は煤竹のやうになりしが、路は開通すべさけはひなく、宿屋に泊るにしても、こゝには一二軒より多からねば、凡へ



ての乗客を充すべしにあらす、多分は又明科まで引き返へすことになるべしといふに、血氣に過る若人等は、松本までこゝより三里許、軌道を一足飛びに行かんのみと構めくに、素より日本無雙の名山なる鎗ヶ嶽を、股にかけむといふ我等なれば、何條これしきの雨に怯むべき、用こそあれと、我は肩にかけたる革囊の中より、旅行用の提灯に蠟燭を點したるに「これは珍らしい」と、満目を提灯に覗ひたるもをかし。我は乗客の總代となりて、驛長を捉へ、軌道横行の公けなる許可を乞ひたるに、彼は尠からず當惑のちも、ちなりしが、この際なればこそは咎めじといふ、さらばこの路をつゞきさふらへと、高らかに呼ばはりながら、提灯振り照らすに、跟随し來るもの七八人はありたらむ、雨幸ひに止みて、犀川の轟々たる音は、萬牛奔放頭を列べて吼ゆるかとはかり凄まじく、この川に裾を浸せる近くの山々を、をりしも聖童の眸の如くに晃めき出てたる星屑の、ねほつかなき明りにそれと透かし視れば、黒駒のさり／＼水を泳ぎ來るやうなり、川邊の蜀黍の穂末は、燈さす障子を撫で、この中に人聲どよめくは、人夫の屯ろするところともぼしく、前じこと半里許、軌道の上には崖頽れ落ちて、

畚の土をフチ蒔きたる如く、小山いくつか作られ、之を踏まば深さと脛を没す、工夫數十人、鶴嘴にて土を搔く、篝火は熾んにして、まともはその光を受けたる電柱は、白樫の杖より白く、川風に吹き扯ぎれたる烟は、更に千裂れて片々飛んで、夕照の水を渉るが如く、かしこに蜿ねり、こゝに畝ねり、高う颯りて一天の秋を焼き盡くさんとする、迭に見合はす我等の顔も、亦赤きこと火の如し。驛夫、人足、機關車、青燈の、狭き軌道の上に雑踏せるところを、右に避け左に回りて、危ふき鐵橋を這ふやうにして渡り、松本停車場に着きたる頃は、夜の十一時、市中は半鐘を敲き鳴らして、月張提灯の戸々に高く、人の往來織るが如きは、女鳥羽川出水のために、非常を警しむるなりといふ。先年宿りたることある淺間温泉に、疲れたる足を暢ばして、快き夢を結ばむと楽しみむるを、或人の勸むるに任せて、市を距ること約一里許なる、山邊温泉といふに、奔流路に汜れて腰のあたりに及べる畦道を、無明の闇に辿りながら、或は稻田に足を踏み込べらし、或は村家を叩き起して岐路を問ひなどして、泥塗みれとなりながら、辛く目指せるところに着きたりしに、意外、失望、忿怒、後悔、いふも愚かや、いづこも戸を



閉して、行燈看板さへ外されたるを、叩いて一宿を乞ふに養蠶にて忙がしければ、斯く々々の家を訊ねて見たまへと、戸も開けずに顔で扱はむばかりの挨拶に、業を熬やして教へられたる家を襲ひたるに、折角なれども養蠶にて客どころにあらず、と木で鼻括る應接に、隣りのその隣りと三四戸計音訪るゝに、何屋へ行きてみよとて、前に断はられたる家の名を指す始末なり。いかに不案内の土地とはいひながら、匹夫の舌頭に載せられて、耻搔くためにこゝまでおびき出されたるこそ不覺千萬と、牙を咬みて男泣きに泣きたりし。湯殿にはいさり立つ烟、霧のごとく燈火を黄にぼかして、村の大哥の鼻唄長閑けさも腹立たし。いつまでかくあるべきにあらねばと、友と迭に相勵まして、田も蒔も處嫌はず跳り超えて、方角も知れぬことゆゑ、松本遊廓の電燈をたゞすがの目當てにして泥土を刎ね上げながら、一と息に駆けつけ、廓内の何とやらいふ蕎麥屋に轉げこみて、温飴を熱くさせ、杉著のソゲを取りも敢へず、フツ／＼吹きながら、啜り込む早業我ながらめざましく、忽ち碗を易ふること三、漸く上田以來の腹を拵へ、重き足を引き摺りながら町外れの木賃宿といはむには少しく増しなる

べき宿屋を、拳の痺るゝばかり叩きたるは、出水騒ぎにて全戸疲勞の眠に入りたればなるべし、やうやく應といらへて、手燭を右手に左手の拇指にて目脂拭き／＼のそりと出て來りたる、汚さくるしき爺に、こなたより頭を低うして頼み入り、草鞋の紐を釋きたるは正に是れ午前一時。

#### 其四 梓川を溯る記

十二日新霽、昧爽松本を發す、極めてよく晴れたる日には常念ヶ嶽の肩を踏まへて、三尖稜の寒劍、分岐して空を削るにも似たる鎗ヶ嶽の絶巔を仰ぐを得べしとなり、時に天半の殘霧茫々、厚きこと鐵壁の如く、西に屯ろしてみじろがす。飛驒街道に入る、低檐板宇簇々として列なるもの、皆旅人を顧客とする商賈、そとろに四十年前の木曾街道を偲ばしむ、この路は鍵の手に屈曲して、狭しといへど猶二車を並ぶべし、奈良井川に架せる奈良井橋を渡るに、橋下の水は澁を流したる如くに濁り、水面より橋桁の底に至る距離、僅に一尺、水楊木植など、いづこの池畔離頭より拉し去られけむ、巴の



如くに渦かれて漂ひ来りたるが、杭に衝き突りてそよとも揺がずなりぬ、我はこの川の上流なる急湍の、今いかばかり浪を疊めるかをおもひぬ。

島立村に入り、畦圃の間の一筋路をゆく、駄馬荷車にて捏ね返へされたる路は、淤泥深けれど、坦平にしてさすがに「松本平」の名に負かず、村家籬邊の浅水、溶々として素練を布くところにて、布襪芒鞋を着たるまゝにて洗ひ濯ぎ、足も軽く氣も軽く、時しも晨烟半ば濕ほひ、近く地に接して迷ふところを放歌して前む。圃間、茅屋點散、林影諸處に參差して、丘陵左右に起伏連亘すれど、我等を距ること甚だ遠し、いかにして是より萬山環峙の中に入るを得むかとおもふばかりなり。

新村附近にて、新聞配達の老人と路連れになる、一軒一箇月の配達賃八錢を受くるものにて、今の受持區域は約百軒ばかりなれば、おのれ一人の生計は辛うじて支ふるに足る、などいふ哀れなる話を聞きて別れぬ。

波多に到るまで、桑圃最も多く、人煙叢林、尋常一様の平原的瞻畫のみ、波多の入口にて駄菓子を買ふ、主婦は養蠶にて忙がしく、客どころにあらずとやうに、上り榎よ

り座敷一杯に蓆を敷きつめ、押し並べたる桑の葉の堆緑墨翠に、足の踏み入るところもなし、しかのみならず、この桑を大團扇にて「タタ」と煽ぎつゝあり、連日の雨にて乾きが遅ければなりといふ、我等都人「熱」きもの、外「冷」ますといふ要を知らざれば、をかきさことに思ひて、暫くうち瞻まもるに、主婦はどこへ往きたまふにやと問ふ、「島々へ」といへば、かしこは賑はしき邑なり、こゝらのやうな汚さ苦しさところにはあらずと艶説す、五百戸以上を有する部落は、田舎人には皆羅馬府なり。

この邊の桑は、皆木桑といふもの、上田附近のそれとは似ても似つかぬ大木にて、往々梯して上るにあらずば、摘み難かるべしと思はるゝほどのものを見受けらる。

村家盡きて路は次第に濶く、小砂利を一杯に敷き詰めて、草鞋の底を噛むこと夥だしきに、松林の間を縫ふほどに、いつしか波多の官林といふに分け入りぬ、意はざりき平野曠く垂れたる中に、この密林の陰翳を成すあらんとは、只だ見る、街道を挟みて松、樺、樅、槭、榆の類、むく／＼として振仰がるほどなるが中にも、松は喬樹長幹戟を抜き隊を立て、稀に横偃(風)に吹き僵されたるならむ(翠蓋を翳せるを見れども、幾ど總



へては矗立し、その蔭に倚れる友の面は、偶々碧落より落ち來れる一線二線の金光と反映して、血も蒼からむと疑はる。されど大樹の力を讃するものは、又小木の徳を賞ゆることを忘る可らず、カアライル、ニョツチエ等の哲人、説くところは異なれども「力」を畏しき天授として、崇むるや則ち一なり、たゞ伊太利の血性兒マツヂニ<sup>マツヂニ</sup>は非力の福音を説いていひけらく、一株の巨柏亭々他の林木の上に孤聳するも、その根は同じき土にて成育せらるゝにあらずや、苟くも無數の朽葉を以て其土を肥沃にすることなくんば、土中の櫛種いかてか巨柏を芽さし得む、大人の出づるや亦斯の如し、前代並びに我が四周を圍繞する當代より、其力を收穫せずんば、必ず能く彼が如くならずと。

凡俗よ、汝は雜木ならん、朽葉ならむ、汝の土中に沈淪するときは、四周に聲なからむ、されど汝を無意義と言ふ勿れ、他日零漢を衝いて天帝に呖尺するもの、誰か汝の掌中より放たれざるといふ、されば宇宙は雜木を無爲に養はずして、大樹を有意に生みつゝあるなり。この猫額大なる林間の天地、弘、大、濶、自ら百態の世相あり。

街道は磊々たる砂利のために、歩むに惱めるの故を以てにや、旅人は誰促すともなく、自然林間を穿ちて禱を十字に綾取れる如き小路を作りたり、榜して林中に入るものは罰すとあれど、依然人道は難を去りて易に就くをいかにせむ。さしもの林道も一里許にして盡き、幾何もなくして梓川の西岸に出づ、白骨温泉道も飛驒街道も、皆暫くこの西岸に築かる、まことに是れ、詩人所謂「官道如髮沿長河」といへるもの、木曾然り、天龍然り、飛驒の全國殆ど皆然り、況んや此梓川は、外客をして日本アルプス間に横はれる畫様の豁谷とまで絶唱せしめたるものなるをや。

倏ち見る、大江の開くが如く、蒼溟の落つるが如く、東岸に方りて屯れる雲は、慘として風に吹き頼され、天外横さまに匍匐する靑色の大塊、かしこに一つ、こゝに又一つ、皺條縦横に波をうつて蜿蜒幾里。

杲々たる日光に反映して、朱を秘むる甕の長さにも似たるかな、指點して傍人に問へば、和田峠蓼科山なりといふ、あまりに偉なる山態に、小心に移歩しては、みかへりがちに岸を行く、對岸の峰巒は、腹よりかけて潤緑を帯び、その裾は幾刀にも截られて層



々段階を成し、稷や蘿蔔を藝う、その下なる激は、雨をしどろに吹いて、川に挿める危石に聲あり。この川のありさまをいかにといふに、亂山入り違ひて仄立し、歩々に蹙まれる峽より水は漲り落つるなり、山は展畫の如く、茸々たる夏草にて十二分に緑を捏したる上に、又杉樅の露緑を刷きたれば、濃漿滴りて水に融和せむかともはるれど、水は連日の雨に濁りて、灰色を成し、石か木か川底に抑へつけられたる隆堆の、何物かに躓いて石灰に獅子の頸毛を彫りたらむさまにて渦まく波は、怖ろしいはむもあろかなり、試に一介の拳石を投じたるに、件の石は鐵線に中りたるかのやうに鳴震して沈みたりしが、あそらくはこの激流にて木の葉の如く流されやしつらむ、四山の水は昨日の雨にて嵩を増し、百道の白氣となりて川に落つるに、或ところは吹雪の風に狂ふが如く、或ところは藍を拖いて濁膠に注ぐに似たり。

沿道、山屈曲、水溯洄、路左に往々藁屋數戸を珠數繋ぎにして、かしこに一團、こゝに一簇、點在す、こゝなる村家の離落には、葵の花、紅白雜揉、その紅なるものは爛として火の如し、木槿の垣にて繞ぐらされたる家多く、絲瓜の架より黄花垂れて行人を

覗ふ、畑の境域を唐黍にて縫ふこと、關東の榛の木に代りて多く、南瓜の土に轉かれ  
るものを見るに、長サ鏡鉢の如し、關東のものに比して確に三倍以上はありぬべし、  
村家の人は農業の旁ら樵夫ともなり、漁人（梓川にて鮎、鱈、鯉等）ともなり、獵士（附  
近の山にて熊、羚羊、猪等）をも兼ねるもの多きが如し、途にて獵士に遇ふ、俗にいふ  
モンヘイ袴を着し、左腰には山刀一本をぶちこみ、怪しげなる根付き胴亂を垂れ、右  
腰には毛の大方は脱け去りたる熊の皮の、方一尺四五寸許なるを一枚帯ぶ、こは數物  
に代用するなり、かくて槍笠を冠ぶり、銃一挺を肩にかく、脚絆は蒲の穂を編みて作  
りたるもの、水に潤ほすとも重くなる患ひ無しとなり、農夫は男女となく皆木曾の雪  
袴に同じきものを穿つ、前年我木曾街道洗馬に入り、初めてこの雪袴といふを見たる  
に、角力の呼び出し奴の穿ける「タテ附け」の如く、膝より下締まりて脚絆の如くな  
りしが、福島邊よりいつとなく膝下もふわりとして、行燈袴の下を括りたる如く格  
好宜しからず、東京の股引のやゝ緩やかなるものとなりき、上松より以西に至れば、  
又形變りて初めの如く、膝より下は締まりたれど、膝下の關節の二三寸許にて盡き、



その下へ尋常の脚絆つけたるものあり、素足なるもあり、地質は多く黒ずみたる縞ものにて、膝より下は横切れを用ひあり、この袴の名、木曾路にても處によりて同じからず、權三袴、又は義經袴ともいへど、方言「かるさん」と呼ぶが、最も普通なるに似たり、この梓川邊にては何と呼ぶにや聞き洩らしたれど、形は（余が見たるどころにては）上濶く下狭く、膝に締め括りなくして、なだらかに細くなること、瓶を倒しまにしたる如くなりき、かちかち山桃太郎などの昔話に、ありげなる風俗ももしろし。山を上下するに當り、「ガマス」を背負ひて行厨衣換へなどを犇々とこの中へ詰め込むこと、いづこの山國にもよく見ることなれど、こゝも又同じ、且つ獵士等は縁起を忌むためにや、燧火を使はず、今猶石火をハッシと敲いて、煙管を吸ふとびふ、宛然是れ一世紀前のもの。

行々背に山を負ふ、岸の崩れて石籬を成せるところ多し、その麓は概ね草原にて、月見草、仙人掌、谷蓼（土稱）などの花、黄、淡黄、茜、紫、楚々燦々として地上に無算の星を鋪く。

上赤淵に至りて一橋を渡り、川を左に視る、初めて東岸に移れるなり、是より山漸く深く、崖の水を挺くこと次第に高く、漲痕縁を帯びて雑木茂鬱、その下、寒流急なること梭より疾くして、河畔に連なれる戸々、晴嵐窓に入りて翠光いづくんか飛び去んぬる。偶々老鶯の聲、帽檐に落ちかゝるに、幾度となく振り仰がれ、雙耳頓に涼を生ず。

安曇に到る、坂を上りて、右の入口に「風穴あり」といふ標札を家の門に立てたるを見る。（風穴とはこの地方にて往々聞くとこのものにて、これは最初漬物類を圃ふために設けたる、若しくは偶然洞穴の出来たるに、漬物を圃ひたるところ好成績なりしゆゑ爾後之を藏し置くこととなれるものにして、近世蠶種の賣れ剩りを、試に圃ひたるところ、夏月に及びても更に異状なきを發見してより、今に追ひて秋蠶原種を貯藏するに必須のものとなり、はては人の依頼に應じて、かくまひ方を引き受くるに至りしなりといふ。風穴とは風の起る洞穴といふ意義なり、風はいかにして起るといふに、件の風穴の周圍は、孔竅多き磊塊にして、背面には必ず一箇の瀑布あるべく、即ち瀑



布の傾瀉せる餘勢にて、壓搾されたる冷たき空氣の、磊塊を潜りて風穴の内部に吹き出づるものならんか、瀑布の有無は未だ見ぬことゆゑ分明ならねど、石の間を滲透して流れ出づる水あることは確かなりといふ、たゞし洵に風穴の名を與ふに足るべき穴は、稻核いねこまに一個あるのみにて、其他は杜撰の摸倣物、形こそ穴なれ、風は出てざる由なり。以上友人秋曉の談に據る。

坂道登りつくして、島々シマシマに入り、又川を西岸へと越す、こゝなる橋は大雨にて墜ちたりけむ、杭七八本を藤蔓に搦けて架く、渡るに弓の如くに反りて、危ふげなれど、土地の人は馱馬をさへ牽きて往來するなり。

余等が最初の計畫は、この島々村を起點として、鎗ヶ嶽に躋らんとするにありたれば、清水屋といふ旅店の前に立ち塞がりたるに、旅商人らしきが三人、崩黄の荷包を片寄せ、草鞋のまゝ上り框に腰うちかけ、茶漬飯したゝめつゝありしが、この珍客の入來に、六ツの眼は一齊に我等の面に向ひて閃きぬ。鎗ヶ嶽へは、こゝより登り得るや、案内する獵士やある、道程みちのりいかばかりと、疊みかけて尋ねるに、亭主とおぼしく

帳場に直れるが烟管を打ち振りて虚空を消し、

鎗ヶ嶽といふとお前さま、この前の川に沿ひて、左へと取つて行くのぢやが、この間からの雨で、崖は崩れる、柴橋は落ちる、地這りて路も解らぬし、それはそれは深い森の中を踰えて、北の鍋冠山、南は霞澤山の間、峠を踰えるのぢやが、こゝまでがはや、今頃から往けるところではない、最も間に藁小舎は無いでもないが、お前さまがたには知れにくい、獵士はカミウチまでは誰も行くが、嶽タケへ登るのは澤山さわはない、生僧も役人のお伴をして、今山へ登つてゐるのがあるてなあ……それが歸るとお伴をさせるでの。

とかくて兩三日逗留せよといふなり、是れ豈一日を吝むこと、萬金猶換へがたき我等の堪へ得るところならんや、ひた呆れに呆れて箸を措きたる商人等を、尻目にかけて去る、去つて猶惆悵す、島々村は唯一の登山道として、あらゆる望み懸りてこの一筋に在りたるものを、今や則ち斯の如し、休んぬる哉とあまたとび息吐きたりしが、又思ひ返へして地圖を案するに、鎗ヶ嶽に向ひて、扇の子骨の如くに肢線を放射するも



の、大野川の溪流あり、霞澤の澗谷あり、我等は未だ俄に悶々絶仆す可らざるなり。不平と失望の中に、島々と橋場二村を繋げる雑食橋を渡る。(或は雑水橋といふものあり、孰れが訛れるを知らず)長サ二十間幅六尺、兩岸より樞を組み合せ、樞上に桁を度して全橋を持す、橋下に一柱を支へず、黒川の鉢盛山より北下して梓川に注ぐところ、大明神山銅冠山溪澗の寒流、幾と一萬尺に近き峻峰の影を漾はして、南下梓川に合するところ、この川に結節して略ぼ十字状を成すや、こゝに四山に反響して、噴沫、迸珠、電撃、雷奔、さすがに今まで經來りたる末流の如く、しかく濁りたらず、川はさながら絶大なる芭蕉葉を幾枚となく展べて、娑婆暗迷の中、こゝなる橋上の欄干に頤を支へて沈吟せる人間を、掩ふが如くに包まひとす、この橋に就きては哀れなる一場の物語あり、昔島々と橋場との間に、一橋をも架けざりしころのことかとよ、橋場に乙女あり、島々なる若人なにかしど、互に戀ひつ戀はれぬる仲とはなりぬ。されど川瀾ひろく、流れ峻しく、逢ふ瀾のまゝならぬをはかなみたりしが、乙女は慧しき性なりければ、戀人としめしあはせ、このれらは平生雑水のみうちたふべ、野

山稼ぎより得たる料を儉ましくして貯へ置きつ、やうやく檜を購ひえて枝を截り、皮を剝き、川と戀の橋渡しにしつるより、この名は起りぬ、乙女の名をお節といふとか、その床しき昔々物語の紀念として、今の頑盤造りの橋は建てられたれど、橋の名を今猶そのまゝに傳へけるとなり、(ウエストン氏の『日本アルプス』に據る)この物語は井出翁がものせる『信濃奇勝録』に、昔こゝに岩と呼ぶ女あり、家貧しくして人に仕へながら、此地に橋を架せむことを願ひ、朝夕粗食して錢を貯へ、此橋を架したるより、雑食の名ありと見えたるとは、趣異なりて詩趣ある口碑なれば、こゝに記しぬ。橋場より稻核まで一里の間、上は尖山、危峰、下は斷崖、絶壁、その下を流るゝ水が描ける奇紋は、自然が最も魂を凝らしたる意匠畫にあらずや、是れ水耶、否。汗耶、否。液耶、否。我た、其色なるを知るのみ、あらず、其董なり昔たるを知るのみ、聞説らく村女この水を汲んで化粧を作るに、膚のさめこまやかにして、色白し、こはここの村の誇りとするところなりと、まことに行々製絲小舎に俚歌をかしく絲を繰る乙女を瞥見するに、銅色なる山姥式にあらずして、微妙の容を見ること、傳へ聞く飛驒の



「白川女」をして、龍を専らにせしめざるに似たり。されば我知んぬ、水は山國至純の靈液なるを、頑石もこゝに入れば水晶の如く透り、黒松もこゝに影を宿すときは、瑠璃の如くに光るにあらずや。

されど登山の蹉躓より、何となく力脱けしたる我は、友と相顧みて無言に崖の上に行み、何事を考ふるともなく頭を低れてゐたりしが、こゝに我等がためには天佑とも謂ひつべき男こそあらはれたれ、年のころ二十を少しは超えたるらしく、色の生白くて、この邊の人とは見えざるが、尻端折りになり、ひよこりと崖の曲り角より立ち出て、我等の顔を穴の明くばかりに見つめ、遽々然として行き過ぐるさまの怪しさに、友は呼び留めて、いづこより來りたるにやと問ひたるに、彼はかなたの山を指さして「あの山から」と答ふ、どうだね鎗ヶ嶽へ登れるかねと、益にも立たぬ問ひを掛け捨てに去らむとしたるに、「實は其の鎗ヶ嶽から下りて來ましたので」と、我等覺えず愕然。

實は手前、人夫に雇はれましたので——人夫は初めてでございますが——お役人が鎗

ヶ嶽の天邊に、杭を打ちに參りますお件をしたんですが、旦那がたもれ仲間の衆かと心得ましたので、ツイその、……それはどうも酷い山でございます。

さてこそ清水屋の亭主が言も思ひ合はされたれ、農商務省より派遣せられたる吏員は、獵士人夫どもあまた引率して、三角測量標を鎗ヶ嶽附近の高山に設くべく、四十餘日前より登山したるなりといふ、かくて連れ立ちて、彼の耳新らしき物語に聞きほれるたるに、我等は不意にあなやと叫びぬ。

梓川の水は、千古冷たき土窟より醸されて、流れながらに碎けては復た凝る氷の如く、荒蕩として左右に夾立する両崖の根を噛むや、堆藍黛黛、一時にサツと揺いて、碧蛇紋の如くなる水の上を蜿蜒す、こゝに架したる一橋は、明治の前後までは、稻核の藤橋とて、藤蔓を幾十筋となく縦に引き渡し、横に細き蔓にて絡げ、中を窄めて兩端を人の腰に達くほどに高くし、底に板二枚を並べ懸くること、笹舟の空を泳ぐごとく、百足蟲の岸より岸をのたくる如く、渡ること半にして震掉烈しく、底なる板はバクリと口を聞きて、歩み慣れざる人は腹這ひにならずば、ぬも渡らじと聞きたるとこ



るなるが、今は粗樸なる板橋を築す、鍋の蔓やうに反りかへりたる構造にして、しかも窅然たる岩端にかゝれる危梁、足の我にもあらでちのづと顛くは則ち一なり。

渡り終りて西岸の絶壁に立つ、山は廻々として轉じ、路は歩々にして高く、脚下よりの水聲は崖を埋めたる、紫陽花虎杖なんどの間を分けて、スル／＼と我を追うて上り来る、行々この新らしき友の語るを聞くに、梓川は源流を鎗ヶ嶽に發す（余は是に於て愈々坊間の地理書に、乗鞍嶽より發源すと記せることの非なるを確かめぬ。）るが故に、梓川に沿うて溯れば必ず到り得べし、その路は島々より發程するを最も可とす、島々より六里許、カミウチ（清水屋の亭主もしかく呼びぬ、地圖には載せず、神河内を約めて土人しかく呼ぶなり、後章に詳なり。）まで峽間を溯るに、崖或は右、或は左、時には崖頼れて翼あらずば踰えがたきことあり、其度毎に役人の指揮により、根を焼いて木を仆し、橋梁に代ふ、是れより約七里にして山頂に登り得べし、山腹には石小舎あり、樹木熊笹は多きに堪へず、往々猪の駭いて奔るを見たれど、熊には遇はざりし、件の役人等は鎗ヶ嶽の外に、燒嶽笠ヶ嶽等へ登攀すべしと、且つ云ふ。

手前も考へましたが、割に合ひませぬから鎗ヶ嶽で御免を蒙つて、下りて來ました、何故と仰しやい、日給がタツタ六十錢でせう、それで旦那、米は自分持ちです、お役人の持たせて上つた米を、分けてもらうので、毎日の食ひぶちを一人前何合といふ割で、幾錢と勘定して差引かれるのです、その上に足袋の切れることは、ソリヤひどいもんでして、ゴリゴリした丈夫なやつが、一日に一足は、扯き裂れちまいます、何だつて剃刀のやうな石の銚を、擦つて歩くのだからどうしてもたまりませぬ。

と、前蹤既に在り、我等無人といへど、登攀に幾分の便は與へられり、鎗ヶ嶽登山成功の確信を抱きたるは、實に天この人の口を藉りて冥助を垂れたまひたるに因らずや。坂路上りつくして稻核村に到る、人家層々、賽の積に積まれたる累石の如く、溪畔、崖頭、拳石を載せたる村舎上下に點存す、是より白骨温泉まで、山路六里にて中には過日來の風雨にて、危ふく頼れたるところありと聞き、且つは前日の創痕未だ癒へざるものを以て、件の男に別れ、川本屋といふに投宿す、時に午後一時、一



日の行程僅に六里許。

晝餐を喫して後、主人湯に往かずやといふに、領けば些やかなる木牌二枚を取り出して與ふ、導かるしまゝ、跋下駄をはき、一町許にして左へ曲がれば湯屋あり、浴槽は可成り濶くして、結構粗陋といへども、清淨なり、浴し畢りて出づるに、赤痢病にて交通遮断されたる家の多さに驚き、選りにえりてこの地を下したるを悔ゆ、宿に還へりて座敷を二た間ほど抜き、椽側の障子をカラリと開け放して、庭の柿の樹に來啼く蟬の聲を聞きながら、日肥を認たむ、庭を圍ひたる板塀に妨げられて溪流を見ること能はざれど、隔たりたる對崖の半腹に、截り拓かれたる桑畑に、姉さま冠りの白點々、眼鏡旁へとかいやりたる我が近視眼には、白鷺の翠田に丁立する如くに見ゆ。安井息軒先生の詩に「前山高百尺、翠色低窺人、柱頭憇鳥机、曾無半點塵」といへるもの、この半日境なり。

日未だ高くして、睡を催ふすこと甚だしく、腕を曲げたれど蠅多くして眠を成さず、起き直りては地圖をひろげ、登山の道を首を鳩めて、あれかこれかと惑ふ。

かくして日は昏れぬ。

### 其五 檜峠を踰ゆる記

十三日朝六時、馬蠅の障子を這ひて、どわくと騒がしさが夢を物語るに似て、睡猶重く、起くるに懶さを、努めて床を蹴る。白骨温泉までは、けふの行程なり、その間人家至つて稀なりと聞き、焼結飯を新聞紙に包み、草鞋三雙の緒に絡げて、傘に結び、發足す。

山地素と是れ段層、一步は一步より級々に高うして、往くこと未だ二三町ならず、元大白川村に僅に板葺屋三戸を認む、路左親しく風穴を觀る、崖側を截りて木門を設け、拳石を積みて屋を防ぐ、門には固く錠を鎖し在り、外より覗ふに、鎌倉にて方言ヤグラといふ土窟のやゝ大なるものに似て沮洳ならず、一木にも歴史ある鎌倉に置かば、何がしを囚へたる土牢と呼ばるべきものならむ。

脚下の崖仄立すること百尺、藤の青葉、零餘子、山葡萄の蔓など、卷舒纏綿して、



相互に牽き合ひ、吊り合ひ、スル／＼と長く垂れ、宙に累なれる堆翠、巒を望みてまつしぐらに類るところ、大白川の一水、白木綿を霧中に翻へして、かしこに展び、こゝにひろがり、杳としてその没するところを知らず、たゞ霧中火を點ずる如くなるものは、皆崖側に根を托せる百合の花、白百合は一も見るところなかりき、又絶えて畑を見ず。

霧は益す密やかにして、面を撲つこと雨より冷やかなり、たゞおぼろ氣に薄墨の松を、虚空に五六本描き出でたるが、紙を剝がしたる隙子骨の如く、疎宕縦横なり、崖愈よ高うして一條の路を、右よりは叢木亂攢、殊に紫陽花の一簇、しど／＼と霧に舐められて、瓣々淡紫、薄紅、露の顆を宿して脚下に俯向くが多く、その上を駢して樅（島々村にては樅を原料として紙を製すといふ）栗、犬樺等甚だ高からずと雖も、霧のために、頭の支ゆるほどに低き天を衝いて立ち、鈴成の栗實は、青鏡を輝々と着けて、漲る無慙の大波に乗り出でながら、我と我が重味に幾んど垂れんとす、左は頭上を壓せむばかりの崖あり、その斜面の空氣に露はれたるところ、皆花崗岩、大サ屋の如き

もの、天井の如く穹窿あるもの、轉頭路に墜つるあり、或は危歎墜ちんとして、行人在りや否やと自ら顧盼するが如きものあり、定めて是れ鎗ヶ嶽、穗高山より、霞澤の山脈を引いて南走せるもの、しかもその花崗石は粗粒にして肉色の長石を含むこと多き、所謂鬼花崗なるものなれば、コミカゲの細粒緻密なる美を缺く、本邦の山中は大氣に濕氣多ければ、花崗岩の如く水氣を吸収せざる性質のものならては、輒ち水に解離し、熱に乾燥して、かくの如く瑰奇なる山景を作ること能はざらむ、山地の富は巨材と大石とに在り、この罅澗に亂抛せられたる花崗岩の、いかに留まりて山のために嬰守、美を成すかを見よ。

霧猶止まず、たゞ罅底の水音、時に憶ひ出したる如く、霧を裂いて大に起るを聞く、松樹扶疎、左の崖より猿臂を延ばして、穹門を作れる下を潜れば、板を並べて危橋を架け、腐繩を以て之を束ねたるあり、拔足して渡る、路傍の野菊玉を瀉ぎ、ウラボは俯し、稀に棊裳、犬山椒を見る、月見草の間に點々として黄花を着く、我等身に藏めたる徳もなく、自然の精舎に詣りて非文字の曼多羅を色讀するの光榮を得、天恵を鑽



嘆せざらんやと徘徊す、偶ま怪鳥あり、竊たきして飛び去り、霧に入りて見えず。

又一橋あり、瀑布幅三尺、高サ約五丈なるもの、飛瀉して雪を吹き、漙の穂を亂る、羊齒科植物、その下に垂々として、一水既に漙して秋を磨き出せるあり、俯みて漱ぐに齒牙寒うして、餘瀝は脾肝に泌み入る、白骨に新舊二道ありと聞きしため、瀑布の左傍なる山路を、舊道にあらざるかと思ひ違ひしかど、後にその樵經なるを知りて、右の濶きを取る、瀑布附近は、樺や、血楮や、その紅なるものは茜色に、黄なるものは鶯色に、前者一分、後者三分、楓葉を摘みて、掌上に秋思を載せ去る。

既にして霧少しく霽る、頭上咫尺、天色清瑩にして水より澄み、谿底の水はその空色より一倍透明、八束の穂より茂くして、且つ小さく見ゆる秋木、疎々密々の間より叫喚するに、崖の屈折に隨ひて、遠きときは隣家の磨臼の如くすがれゆくかと思へば、近きときは雷吼の如し、しかも水の色は霧吹くことの多少によりて、濃淡幾變す、路に當りて鱗の横はる如くに屈れたる朽木を、やをら二人にて引き寄せ、椅子の代りとして腰うちかけつ、焼結飯を取り出して之を嚼ぢりながら、俯して水光に見惚れ、仰い

て山色を讚す、この邊萩の花多く、處によりては百株以上簇がりて、聚落を作り、他卉のその間に生存を許さざるものあり、自ら植物生存競争圖譜を作る、その他の紫蕊紅葩、一々名を記せず、凋れての後は、いかなる色の藻屑とはならむずらむ、既にして霧は藕絲を引くより長く、日の高く昇らぬ間に一刻も早く々々と、私語する如く、水を涉り、嶺を攀ぢ、さし交せる千筋の上枝を繞りて、風に烟の吹き颯げらる、如く、青葉を舐めてはさゝ啼きほどの音を作り、千山の胸より押し出されたる吐息の如く、ひろごるや、須臾にして鞋下皆白し。

これより仄立せる崖を、蜿蜒上下するに、亂流は絲の如く路を没して、之にひたせる草鞋の底冷たきこと頭腦に徹するばかり、崖を少しく下りて、又一瀑あり、瀑を受けるため花崗岩は、赤褐色を帯ぶ、蓋し久しく水に撲たれ、露に晒されたるより、大氣くならんのみ、孔竅縝密、この石の特長を見る、此邊の險道、米穀を駄して上下するに皆半を用ゆるを以て、牛糞狼籍一足を投ず可らざることあり、大白川を十字断して



組橋を架くること一ツ、橋を組める樑材よりは簇々として菌を生じ、橋の中央よりヲンバコ（トナリ）の叢生せるを以て見るも、いかにその人牛（人馬といふ能はず）の蹤跡稀なるかを想ふべし、橋下の水は深紫の葡萄色、奇紋は氷と碎けて雪と凝る、白樺一株亭々として峡中に立つ、水の音楽を流動さする魔杖（マジック・スティック）の如し。

阪を登る、山と山と當面に擦破せざるばかりになり、盛まりてU字形を成すや、兩鬮を排してその底を流る、一犇水を夾みて、亂峰攢竦、崖も又凸兀斗出して、半ば霧に入る、一屋を望んで、之に就けば、薪を貯ふる小舎にして、人影なし、たゞ鞍の縦横に入りて、今にも龜裂しなむかと思はる、花崗岩、累累堆積、その或ものは山腹に露はれて岩磐又岩磐に倚り、或ものは岩塊の表を琢かれて、燦たる白光を放ち、人面を壓せんとす、阪を上りつくして入山村に至る、人戸七八、こゝに稻核以來初めて枝豆、蕎麥畑を見る、水車懶げに春きて、残水を脚底遙かなる溪流に落すこと、驟雨の俄に到る如し、山娘の子守唄を聞く、涼味銀鈴を振るに似たり、去らむとするを呼び留めて、いま一曲と所望したるに、初めて聴く人ありと心注さけむ、羞を含み顔を赧

らめて走り去る。

猶山路を往くに、白骨温泉への新舊二道は、こゝにて岐る、新道は近くして行々梓川の別派なる寒流に沿うて溯り、風色人寰にあらずとは聞くものから、過日來の風雨にて悉く敗壞したれば、努近（つと）きに迷はされて、涉りたまふな、半に到りて引返へす悔るあらむと、路に行脚僧に訊ねて諄々と誠しめられ、更に村媪に質してその確かなるを知りぬ、果して新道に入るところに、薔薇を根こぎにして路を塞ぎあり、禿ひ筆に榜書して曰く、此道入る可らずと、蓋し稻核より白骨温泉に至るには、新道五里、舊道は高くして迂廻したれば、遠きこと尙ほ三里を加ふといふ。止むなく舊道に隨ふ。

路愈々高うして、峰は左右に回轉し、水は淙々として板屋にたばしる霰の如く、或は一齊に速射砲を發つに似たり、半にして一樵夫の教へに従ひ、路を右に奪ひて、石徑水なく、急峻なる傾斜を成すところを、後に僵るとも前に迂る勿れと相誠しめ、反り身になりて下る、富士の沙走りの如く、淺間山の熔岩流の如くなれども、路至つて



短きのみ。

下り終りて早くも松田の寒村に入る、この村は奈川の溪畔に墾り、板屋離々として水禽の巢を泛ぶる如くなり、橋ありて川に架す、橋畔の荒物屋に就きて、焼酎を購はむとしたるに、赤痢にて交通遮断の張紙あるに駭きて走る、その次もその次も、皆又然り、聞くに一村十戸の中、遮断の厄を免かれたるものは僅に一戸のみなりといふ、橋を渡ること半にして、老漁夫あり、網を負ひて来る、爺さん何が取れると聞くに、今は岩魚いわいしよ、鱒も取れやすが、鮎は水が急でこけえらまで溯つて来ぬのすといふ、こゝなる追分路に標石あり、右松本、左しらふねと、右は所謂新道を謂ふならむ、しらふねは蓋し白骨温泉の舊名、今は訛りて地誌地圖皆白骨と書す。

これより左折するに、峠は急峻となりて土肉淺やく落ち、水は磊々たる石の間を雪を噴き、藍を溶かして狂ひゆく、時に日は高くして、霧は疾く收まり、八月の日光慙るが如く山を炎にして、一日に緑髪を髡せむかと疑はれ、娑婆たる萬葉の舌皆爛を吐くかとはかり暑ければ、荷を持ち扱かひて、喘き々々山道を蟻歩するに、汗を拭ふ手

拭を措きたることなかりしが、峠半ばにして一溪水の傍、山毛櫛の巨木あり、緑葉の陰翳片々、菩薩の掌となりて鮮やかに地に印す、憩ひて水を掬ひ、結飯の剩餘を食ふ、蠅の多きに困殺せらる、又登りて峠の絶頂に出づ、喉渴きて堪へがたかりければ、木莓と桑の實の混合兒の如き、赤玄き木の實を採りて噛みたりしが、さすがに氣味悪しかりければ、直に吐き出しぬ、行々霞澤山を當面に見る、草鞋を穿き代へて阪を下りかけたるに、大野川村は落々として眼下に在り。

路右に些やかなる板屋を見る、鹿垣を結べるにやとれもふ間もなく、巨眼隆肉の荒くれ男の猿袴を穿きたるが、儼然と控へたり、余輩を見るや煙管を啣みながら、一揖腰を屈め来る、その状「火を借して」と乞ふものに似たり、たゞ彼が啣める煙管は、ブリキ製の大なるものにて、支那人が隠用する阿片の吸器に類するを以て、訝しくその爲んやうを傍觀せんとする暇もあらせず、彼頬をふくらませてフツと吹くや、石炭酸は霧を吹いて二人の腰より下は悉く潤ひぬ、赤痢病流行地なる前村を經過し來れるものに備へむがために、村人こゝに關を設けて、遞番に出張せるなりといふ、こゝに憫



れをとどめたるは友人岡野氏にて、彼は聞ゆる汗ツカキなれば手拭ひを一刻も離したることなく、今も腰に垂れてありけるを、無情なる這個檢疫吏のために、唯一本の手拭は石炭酸だらけになりて、手に取るさへ臭氣鼻を穿つより、彼の閉口一方ならず、是より汗は豆の如く、鼻孔眼孔の嫌ひなく流れ入る毎に、彼の顔は頑なる啼兒の如く、涙痕縦横たり。

阪を下れば則ち大野川村、同名の川は崖と崖との間を、白蛇の如く蛇ねりゆく、水峻しくして石に激するさざ波、皆尖りて爪立つ、正に是れ『西域記』中の急河なり、水に磨せられたる楕圓の石は、草鞋の底なる踵を噛むて、いたきほどのところを、村娘は素足に冷飯草履を穿きて鮭を釣るべく、或は河畔に踞み、或は水中に立ち、竿は上下交叉して刎吊瓶の如く俯仰す、橋墜ちて材木二本を荒縄にて束ね、川中の岩に架けたり、さなきだに瘦せたる我には、重さに過ぎたる荷を擔ひたれば、中心を取るに苦しむこと大方ならず、竟に匍匐して渡り、村娘等の指笑するところとなりぬ。

大野川は稻核に比すれば、土地も一段と高く、川に臨みて新に建てたるらしき清酒

なる宿舍あり、昨夜こゝに泊らざりしを悔むたれど、もはや目的地なる白骨に程遠からねばと、椽に座してシメジ茸を炙らせ、午飯して悠々二時間餘を費やす、偶ま一村戸の檐頭に熊の黒皮を乾したるを見るに、長さ七八尺、四肢の爪をも剝がて、そのまゝに垂れたり、山中の氣味悚然として人に迫る、この村にて見たる路標に曰く、白骨温泉まで二里二十丁と。

この村は阪の上下に別る、上には人家至つて稀に、宿屋も、村家の多くも、阪下に在り、大野川溪流はそれより猶底に方りて流る、凡そ島々橋立より西北の方、幾ど一村を擧げて坦地なるを見ず、多くは河畔の洪涵地に、人家を築きあれど、それすら掌大の地なるを以て、山上、崖腹、林中、處として擇ばれたるはあらず。殊にこの大野川以西以北に至りては、周圍は信飛境上の山脈、屏風の如く之を繞ぐらし、その央を深谿の環流するあるを以て、人は摺鉢形の窪底に起臥するなり、眼を舉ぐれば四顧皆山、山は概ね一萬尺を出入して、尖波虚空に凹凸し、一線一筋重さ千萬鈞の筆力を以て搬ばる『青山無數逐人來』は詩にあらずして繪畫なり、繪畫にあらずして字々皆活



きたる山となりて、一書に石百枚を載せ、樹千本を抱くを覺ゆ、その摺鉢側の傾斜に當る山嶽の上に、ひと際挺んでたるは乗鞍嶽にして、初め大野川溪谷より北に方りて見ゆ、半肩雪に氷りて白幣の搖がぬ根生ひ、屹々然として雲漢を摩す、雲の峰はこの一萬尺餘の高嶺に跨がりて、更に高さこと一萬尺、白金の日の光、一線二線この中を翳くひて、鎖の如く長く垂れ、鶯色の矮屋にその鎖の一端を投げ懸くるや、仙家より一道の白氣天を衝いて立ち昇る如し、村家の點散するところを出離れて、阪上の小夷地を行くに、乗鞍の麓に方ればにや、風事は宛然として火山的地相、狭しといへど野もせは秋草にうづみ、蝦夷錦を寸々斷に施らかして、千筋の色糸を捌きたる如く、その間奇醜なる輝石安山岩の大塊、鏽くさりたるやうに赭黒くなりて人立す、磊塊として疎宕傲兀ならざるはなし、又下りとなりて溪澗に架したる千代橋といふを渡り、手拭を水に浸し、之を啣みて渴を慰す、溪畔の戸一二、人去つて幾年ぞ、これも又荒村行中に一品題を寄附する零落の俛歎。

間もなく檜峠にかゝる、老媪の寂びしげに留守せる麓の一軒茶屋に就きて、鶏卵を

徴す、僅に一個を獲たり、しかも今産みたるばかりの物なり、蜂蜜ありと聞きて求めたるに、小さき茶碗一杯毎に二錢を課す、各四杯を傾く、山中の甘漿之に過ぎたるはある可らず、偶々駄菓子箱上に蝮蛇を焼酎に漬けたるものを四瓶ばかり見る、何にするやと問へば、眼を圓くして何にだつて利かなくてあるもんかと、その状痴けたることを訊く人かなと嘲けるに似たり、いかにして貯ふるやと聞くに、焼酎に浸たして三年ばかり経てば、効驗著るし、益す古くなるほど、愈よ價は高さにて（恰もホルドゥの葡萄酒の如く！）あながちに蝮蛇の大小に據るにあらずといふ、こゝ山中落葉の孤屋、醫師の宅に遠きこと、豈管に酒屋へ三里、豆腐屋へ二里の比ならんや、しかもかれらは蝮蛇酒あれば、萬病の救藥則ち足れるなり、吁嗟山中の木は焼かれて炭となり、石は磨臼に截られ、種子は風媒に飛びていづこに落つるを知らず、水は清狂の子となりて巷に離騒を誦するなるに、彼等はかくして生れ、かくして朽ち、かくして葬られ、山中に始終して世と遷らざるなり、百歳の長壽も、かくてはあまりに簡短なる一生涯にあらずや、されど我等は隱花植物なるが故に花なしと言はざるのみ。



又上るに前の峠ほどは急ならざれど、愈よ高し、頂上には休み茶屋ありて、乗鞍嶽湯の花卸賣所の看板を懸けたり、この峠の絶頂ほど、殊に山景に富みたるはあらざるべし、中央大山脈は鋸齒狀に聳えて、四塞のために鐵より堅牢なる縋を匝ぐらしたるもの、曰く鍋冠山、曰く霞澤山、曰く燒嶽、或ものは緑の茨を破りて長く、或ものは紫の穂に出て高さが中に、殊に燒嶽（この山の頂には硫氣孔ありて、熾に烟を噴ぐといふ）は、常春藤の纒纏せる三角塔の如く、黄昏は、はや寂滅を伴ひて、見る影薄さ中に屹立し、照り添ふ夕日に、鮮やかにその破斷口の銳角を成せるところを琥珀色に染め、山腹以下に屯む積層雲に、沈まむとしては昂々然として又半肩を擡ぐ、初めは燒嶽を指して乗鞍と誤認したるほどなりき、乗鞍に至りては、久しき離別の後に會合したる山なり、今日大野川に見て、今こゝに仰ぐ、帽を振りて、久瀾を叫びしが、峰飛びて踏躓まる今も、山の峻峭依然として「余の往くところ巨人在り焉」（My giant goes wherever I go）ととゞろに人意を強うせしめぬ、幸ひに縦まなる食禁を許せ、余は乗鞍の懐つかしき山容を觀する毎に、自己の山なるが如き感遏め能はざること

猶深夜を獨行する人が、天地を自己の領と思ふがごとく然るなり。

是より路愈よ高くして狭く、縋愈よ細くして急に、熊笹は叢生して、ざわ／＼と膝を撫づ、脚下の縋を埋めたる秋木は、樺、黄、褐、梔、と色々相摩擦して、火を發せんとするなり、しかもこの深山の中、溪畔、岨頭、稀に二三反の麻畑を見る、木の間より老鷲頻に啼いて、氣候は三四月の頃にも似たらむ、汗收まりて涼氣夕とはいへ、水の如く透る、山鳩にやあらむ、人聲におどろきて翳さけたまじう飛び立つを、振仰げる足許に、トカゲのカサ／＼と遁ぐるに、蛇かとはかりにおどろかれぬ。

路崩れて禿山となり、路か崖か、區別あやしくなれるところを倚仄して行く、余等假にこゝを大崩と命名す、檜峠ははや下りとなれるなれど、路は綠穹門を潜りて迷宮に入る如く、堆翠翳せる間を迂して前山後峰、仄せる間を往く、足の遲速、路の遠近の如きは、恍として夢中の問題を稽ふるが如くなるのみ、たゞ處々赤百合の花に目を慰むるに、何となく畦畔の曼珠沙華を連想して止まず。

全く山を下る、澗水縦横、路に透迤す、不意に硫黄の臭氣鼻を穿つにて、白骨温泉



の近きたるを知る、はや湯川の水音の、驟に耳につき纏ふやうになりぬ、一二丁にして爪先上りとなり、温泉宿一二戸を左に見たるまゝ、突き當りての大厦湯元宿、渡邊氏に投ず。

### 其六 白骨温泉の記

上

白骨温泉に滞留すること、十三日の夕より、十五日の朝に及びぬ。

物の本に據れば、この温泉戸數三十餘ありといへど、余が見たる限りにては、温泉宿四軒、蕎麥屋一軒と、荒物屋らしきが一軒（湯の花賣捌所の看板を掲げあれど、今は戸を閉ぢたり）その他に藥師堂あるのみ、温泉宿は元湯といひ、新宅といひ、柳屋といひ、大石屋といふ、この中大石屋を除いて、他は皆縁家なりとか聞きぬ、元湯と新宅とは、左右に並びて幾と一家の如く、元湯より廊下傳ひに、緩やかなる傾斜を下りて、柳屋に入るを得べく、柳屋と大石屋との間、亦椽つゞきなり、湯には各名稱あ

り、大石屋は疝氣湯、柳屋は綿湯と稱すとかや、元湯は同じく元湯にして、家構へ最も宏大、儼に二百四五十人の客を一時に收むるに足るべく、新宅は二百人、柳屋は百三十人、大石屋稍や尠しといふ、各家悉く二階建てなるが中にも、元湯は崖の上に二階を築きたれば、外よりは三層とも見ゆ、初めて到着したるとき、銀はたとひ室内に置くとも、總べて硫化して黒色となるを以て、時計等は帳場に預け置くを可とすといふ注意ありたれば、その如く頼みぬ、綿に包みて十襲するなりと、入口に突い立ちて足を滌きながら、見廻はすに熊の皮の敷物を二三枚壁に吊るしあり、戸は杉戸にて全體の家作りは頑墨なり。

かくて二階の、いの一號ともいふへき隅の室に請ぜらる、床には惡詩をのたくらしたる懸幅の前、花瓶に赤百合の花と、紫菀とを投げ挿しにしたり、六疊敷ながら、小締んまりとして居心いとよし、早速浴衣を借り、階子段を二三度下りて、浴槽に入るに、浴槽はこの家の入口の右左に並び建てられたるにて、その間を相互に往來し得るやうに、一片の板を通ず、湯元の名を負へる湯は、此宿の前より白烟蒸々として湧き出づ



るにて、椽の下となく溝板となく、そこら一面に溢れたるほどなれば、浴槽は見るも  
氣味よく、湛々としてたぎり、之を吹けば微波を立てむかどぞおもふ、湯は箱根熱海  
なんどの如くに清澄ならず、石灰、硫黄、明礬等を含みて、臭氣を帯ぶれど、草津の  
湯ほどには不快ならず、湯と水と二本の樋を引いて、温度を加減する仕組となす、浴  
槽の底は無論板なるべけれど、湯の花や石灰沈澱したれば、尻障りザラザラとして、  
漆喰にて塗りたる登きの如く感ぜらる、可なり潤きものにて、中央に當り丸太を一本浴  
客腰掛けの用として貫きたること、角に一ツ引の柵状を成す。

四軒とも別々に内湯の設けあれど、いづれも共通にて、例へば元湯の客が、柳屋の  
内湯に入るも、柳屋のが大石屋へ押し懸くるも、自由自在の共和制度なるは、いづこ  
の温泉にも見られぬところなり、それすら浴客混踏のときは、いづこも人を以て噴咽  
し、芋の子を洗ふがごとき騒ぎなれば、空しく手拭を啣へたるまゝ立往生せねばなら  
ぬことあり、その頃は余等が室さへ、十人ほどを館詰めにする景氣なりといふ。

余等が投宿中は、人のけはひ至つて稀なり、空山料峭の中、兀坐して嵐氣を浴ぶる

仙客の如く、神澄み骨冷えて、我ながら四肢玉の如きを覺ゆ、戻りて先づ何よりも新  
聞をと借りて遣りたるに、小婢齡十六ばかり、色白くして慧しげなるが、今日のなり  
とて持ち來りたるを、二三行読みかけて不思議にもひ、日附を調べたるに五日とあ  
りたれば、呼び戻して日附の在るところを教へ、新らしきを持ち來るやうに注意して  
やりたるに、今度は九日のを、今日のなりとて齎らし來る、まことや人生字を識るは  
患ひの初め、小女は患を解せざりけりと、重ねては煩はさず、聞けば此地に入り込む  
新聞は、大方松本發行のもののみ、東京のは偶々來客中にて取り寄するものあるに過  
ぎず、松本は二日遅れ、東京のは三日遅れに來るなりといふ。

十三日の夕餐は、鹽鯖を膳に着けたり、上田以來の海魚なれば、珍らしきことに思  
ひて、箸を下すに舌を刺すこと酷だしきに、顔をしかめられてえも味はれず、外の魚  
はなきやと給仕に侍れる例の小をんなに聞くに、岩魚は前の川にて漁するなれど、肉  
窄くして旨美ならず、鯉鮒鱒は稀に在りといふ、然らば信州名物の蕎麥をと注文したる  
に傍に一軒の蕎麥屋あれば、そこへ眺へなされと云ふ、宿にても打てど、只一軒の蕎



麥屋の生管なまわさを妨ぐるを氣の毒がりて、何れも客へは、そこのを注文とするなりといふ  
愈よ一種の共產制度なりと領かれてもしろし。

膳を引かせたる後、散歩がてらに件の蕎麥屋に入る、大黒屋といふ行燈看板を掲げ  
あり、就いて蕎麥を命じたるに、この頃はち客さまが稀で打ちませむ、打てなら打ち  
もしませうが、十より以下では御免を蒙りますと、臆面もなき若女房の挨拶に、いつ  
かな健啖家も飯を済ましたばかりにて、蒸籠十個は退治られずと、これも沙汰止とな  
りたるが、この儘指を唾へて引き返へすも剛腹こころなりと、偶々行燈の側面に「しるこ」と  
禿び筆にしるしあるを見つけ出して、これはいかにといひたるに、ありませぬと膠な  
く刎ねつけられてけり、聞けば客の混み合ふときは、蕎麥のみにて一日平均十圓の商  
ひあれど、平生は蓋にて忙はしといふ、せめて貰ひ水でもして引き揚げやうかと、我  
ながら情なげなくなりて、懇請一番、上り口に二つ引きある筈の手近なるに就かんとした  
るに、袂を控へて「そつちやの方が湯が交つてる水ぢやて、蕎麥には使ひませんがな、  
此方が清純きよじゆんですよつて、それにしなされ」といふ、全體に山家の人は、無愛想にし

て押れ易からざるに似たれど、人懐つかしければにや、敲けば存外に懇切なる音を出  
すものなり。

宿屋一體、屋根は平たくして大に、雪國通有の尖りて勾配急なるところなし、板葺  
なれど他の山村にて見る如く、石を亂措せざるは、此地三方山に圍まれて、甌こしの一方  
缺けたるやうなるところとて、風烈しからざればならむ、その屋根板も飾り昆布のや  
うに大にして粗きはなく、細きことは都會のそれに異ならず、只屋根の脊梁に當ると  
ころに、棕櫚の皮を敷き、「一」文字狀に小さからぬ石を駢べて、板の交叉點の抑へと  
したるのみ、棟頂より二三尺下りたるところに、枕木やうのもの一本を縦に表裏へ長  
く貫通して、その端の突き出たるは、藤蔓の類にて棟を纏ひたる力木なり、又適ま  
千木の如きもの見えたるもあり。

この地の温泉は、八十八夜よりかけて、秋末までは浴客を容るといへど、まことに  
客の雜踏するほどに入り込むは、舊曆八月秋蟹濟みたる後なりといふ、信州の農民多  
きは言ふまでもなきことながら、その中にて諏訪の人最も多しといふ、諏訪には立派



なる温泉あれど、かしこのは病に利かねばとて十八里の險道を態々此地まで、米味噌持参にて押し掛くるなり、中には脚氣を押しして山阪を牛歩し來るもありといふに至りては、愈よちどろくべし、この湯の效能は寒胃、胃病に最も宜しく、腦病、リウマチス、脚氣等にも又可なりと稱せらる。

この地は梓川の支流なる湯川に沿ひ、後に絶壁を匝ぐらし、前には豁谷を控へ、西南には霧漢を凌げる乗鞍嶽を仰ぐ、冬は寒氣凜烈と聞けど、雪の分量は阿房峠一つを隔て、四里計相距れる飛驒の平湯より、寧ろ少く、最も深きときにも四尺以上には出でたることなしといふ、されど、とにかく寒きところにて、稻核邊には猶蠶イナゴのまゝなるを、こゝにては既に繭となりをれり、蠶は多けれど蚊は至つて少く、蠅を吊りたることなし、交通は至つて不便にして、飛驒へ往くも、松本へ通ふも、いづれも箭を射るごとき奔湍に沿ひて、厚嶺重障前後に蜿ねれるをもて、雪に塞がれて通ぜざるに至る、されば住人は十一月下旬を以て、擧つて松本或はその他に移轉し、三月上旬に歸り來るなり、元湯の主人は本家を大野川に有するを以て、かしこへ移り、こゝに

は番人一名を置くのみ、故に冬は彼等のためには安息日、所謂遊んで暮らすものなりといふ。

乗鞍嶽の裾を繞りて、飛驒の平湯は北に、これは東に、共に遠く人寰を絶し、玉の如く玻璃の如き天泉を湧かすところとして、並び稱せらるれど、彼には内湯なくして、外湯の一浴槽あるのみ、これは到るところに内湯裕かなれば、外湯の要なし、彼の宿屋の平家のみなるに反して、是は悉く二階建てにして、且つその廣狹大小は同日の談にあらず、全躰に彼に比して是の贅澤なるは、地勢氣候等の關係もあるべけれど、他の一面に於て、飛州人と信州人と富の程度を下するに足るべく、「信州の百姓は贅澤なり」とは、往々聞くところなれど、今更に思ひ當るなり、此宿にて名物萬の菓子といふを出したるを見るに、落雁やうのものにて、明らかに白骨といふ二字を型にて打ち出しあるなど、山中僻陬の温泉としては、いたく洒落たり、土地は乗鞍山麓のこととして、礪礪不毛なれど、平湯の辛うして稗と仙臺芋(馬鈴薯)とを作り得るに比ぶれば、こゝの蕎麥、小豆、麻、馬鈴薯、葱、芍薬等を穫るは未だしもなりといふべし。こ



の中、蕎麥は最も地味に適す、他の作物は他村より發生遅々なれど、蕎麥のみは最も早く、一年に數回の收穫ありと、畑には芍藥最も多し、こは薬用として輸するなりといふ、麻は溪畔到るところ、一撮の空地あれば之を植う、既に穿り了して乾しあるものをすら見受けらる、手織衣の材料にやあらむ、葱は春は根を掘ることあれど、今頃の根は堅くして、味悪しとて葉をのみ截り取りて、そのまゝにさし措く、一概に葱の白根を珍重せぬなり、馬鈴薯は發育最も悪くして石の如し、當地にては白芋と呼ぶ、その他常食を補ふ用としては、獨活、蕪冬、蕨、紫蕨、薺菜、萹蓄菜、芹等其他猶あるべし。

午後三時頃に『お茶受け』と稱して、餅その他の間食物を客に供す、ために無聊を慰めらるゝもの、あながちに頑兒のみともおぼえず、その中にて我等下戸黨の最も食指を動かしたるは、蕨餅に蜂蜜一皿を添へたるものなり、その製法を聞くに、白骨より大野川村に出づる峠などにて採りたる蕨の根を搗き、木舟に沈めて水に洗ひ、數次を経たる後、之を澱粉に製し、件の澱粉の少量を水に溶きながら捏ね上げ、更に多量の氷を加へ、棒にて攪きながら煮ること、糊を製する法と同じくす、たゞ此時攪和す

る手鈍ければ、半熟半製のものとなり、その熟せるもの、既に炭化するほどに至るとも、生なるところは猶熟することなし、かくて充分煮熟して、薄褐色半透明のものとなるに及び、鍋より取り出し、饅頭ほどの大サに丸くす、さればその名こそ餅なれ、實は糊の固まりたるものなり、その容積を膨大すること、おそらく五十倍大に至るべし、旅行家のためには倔強の糧となすべく、味も道明寺粉などに優りたり、因にいふ此糊は工藝家に賞用せらるゝものにて、虫蝕せず、又水濕に剝げずといふ。左に白骨温泉滞在中の、食物日記を掲ぐ、括弧内に特字を記したるは、特に注文したるものなり。

十三日夕

鹽鱈(焼)

葱の味噌汁

麩(大サ切餅の如し)湯婆、欸冬の椀盛

瓜の奈良漬(香ノ物)



鶏卵三個(特)

十四日朝

山鮭一尾(養)

葱の味噌汁

麩(大サ同前)トロ、昆布、乾章魚の椀盛

夏大根の葉の鹽漬(香ノ物)

鶏卵二個(特)

十四日晝

馬鈴薯、麩、椎茸、乾海老のお平

茨のまゝの隠元を茹で、白胡麻を塗りたるもの、俗に「ゴマアヒ」

瓜ノ奈良漬(香ノ物)

十四日夕

卵焼の切味、麩、木茸、干瓢ノポック切(お平)

「白ス乾し」に大根おろしを混じたるもの

山芋のトロ、汁

瓜の奈良漬

鶏卵二個(特)

十五日朝

麩、トロ、昆布、鱈魚のだし入れ(椀)

葱の味噌汁

キサミするめ

鶏卵二個(特)

下

十三日夜、小をんなして亭主を呼ばせたるに、主人は松本に赴きて不在なりとて、新宅の主人来る、鎗ヶ嶽登山の導者周旋を頼みたる所、大石屋の主人といふが、かゝることには物馴れたる男なればとて、頓てその人を伴ひ来る、齡は三十五六顔色



黎黒にして、唇厚く眼細く、頤に剛き髯を尖らす、切口上にて「ヒエツ」と忝やしく挨拶するなど、一癖ありげにて氣味よからぬ男なり、彼曰く、鎗ヶ嶽の麓なるカミウチまでは路を知りたれど、鎗ヶ嶽へは未だ登りたることなし、併しともかくもカミウチまで往きて、あの邊の獵師を語らひ、圖を引いてもらへば、登れぬことはあるまじとおもふ、別に野宿の用具や行糧の準備もあれば、負擔に堪ゆる人を他に猶一人備ひくれよと、即ち之を諾す、彼は件の同伴者を大野川より拉し來るなれば、翌十四日をこゝに逗留りて待つこととなりたるなり。この夜弦月一片、燐色に燦ぶりたる雲に吞まれむとして、偶々我等が面に當れる「穂ナシ平」にひよろりと立てる一本杉に懸り、軒と平行に缺壁を垂る、血ぬりたる寶藏院の鎌鎗をしごひて、碯いしづかた牢かたく突き立てたる如し、二人相顧て、雲行きの常ならざるを悪むを惡む。

湯治場にて親しみ易きは、同宿の客にこそあれ、我等の着きたる日には、隣室に官吏らしき洋服男あり、交語一二回、彼いふ、友人八人と乗鞍登山の約をなし、十一日を以て高山たかやまを發せしが、當日雨のために旗鉢より登山の企を變じて平湯へ一泊し、翌

日登山を試みたるに、風雨のために又半途より引き返へしぬ、今日美露、しかも同伴の衆元氣沮喪して、皆高山たかやまに旋かへる、余は明日松本へ赴かんとすと、その人去つて後、その室を占めたるは母を奉じて湯治に來れりといふ、信州上田某あの教授、この人は尤も親善となり、妥協の約を訂して、筑蕎麥十個を例の大黒屋に命じ、一家の如く團欒して頰食す、生粹きつ混ませ物なしの蕎麥とて、風味絶佳、汁の悪しきは咎めずもあるべし。

夜この人へ郵送し來れる「東京朝日」を借りて讀む、山中の快焉より大なるは莫し。

十四日味爽、乗鞍嶺上の雲は、朝暎を覆ふ、紗にして火を褻むが如く、倏ちにして大嶺皆焼けむかとぞおもふ、火は雲の一枚々々を剝ぐが如く、かしこの心より燃ゆ、この孔を破りて出づ、瞠目して仰ぐほどに、一味の黄色と混淆して、空に沁むや、たとへば蠟心焼け盡くして、水色の涙落つるが如し、相慶して今日の酷熱を下す、されどこの土地にて朝焼けは雨の前兆なりと、里人より聞くに迫んで、竊に怯む。



書翰一通を認め、切手を買はむとして「切手賣捌所」の看板を目あてに、新宅をどろかす、主人傾首一番、徐ろに口を呟いて曰く「あれば宜しいがのう」と、暫くそこの抽斗をひつくりかへしたりしが、竟に無しと定まる、吁、山村事無し。

午後、友と余と隣室の教授氏を麾いて、宿を出づ、間もなく左折すること三町餘にして、畑中に榜して鬼ヶ城へ百四十四間といふ、灌木鬱密叢生せる中を、岩石と段々して下り行く、鈴蘭、ギボシ、最も多く花咲く、木の根石銛のさらひなく、急峻の下り道となり、路を失して谿流に下る、喬木日を洩らさじと、柯を交へて茂れる下に、大磐石あり、鹽原箒川の野立石に似たり、踞して憩ふ、水は深碧を凝らし、垂々の樹葉と形影相拍り、互に緑蓋を傾けて吻を接す、石は稜層あるもの、苔蒸して緑潤なる者、罅隙より草樹を亂生せるもの、孤劍空を削るがごときもの、堆壘起伏す、水その間を呐喊して、寒玉を跳らし、大月を碎き、天雪を三尺ばかり高く刎ね飛ばす、腹這ひになりて、水色に見惚れたる間に、我が草帽失墜して水に入り、冷やし瓜の如く泛びて回轉し、急湍のおもてにZ字を亂書して奔る、石より傳はりて追ふこと二間、

漸く兩大石の間に夾まりたるところを捉ふ、仰げば岸の半腹より、絲の如き瀑あり、傾斜より蔦地に跳れる緑木の大濤と、先を争ひてこの川に落つるを見る、碧落を搾りてはじめて生ずる水にあらずば、いかでこの色あらむ、今若し夫れこゝなる緑樹の頂を基點として、水平線を劃せば、その上は夏、その下は則ち冬の領。

前の路に溯ること、一町許、路とも解らぬところを押し分けて、鬼ヶ城に入る、簇々として、潤緑を繰ひたるこの邊の崖一面は、蝕びみたる午勞の葉の如く、穴だらけにて、その穴は則ち石灰岩の流水に浸されて、或は隧道をなし、石柱となり、石筍となり、石洞となれるもの、その最大なるをこの鬼ヶ城となす、入口は廣く左に偏して一の石柱あり、高さ四尺、潜りて入るに初めの段の最も濶きに似ず、次に上りて稍狭く、又一段上るに最も狭く、こゝにて往き止まりとなる、入口の幅は一問餘、奥まで長さ三問餘あり、石灰洞の特質として、外窄く内寛きものなるに、この洞の之に反せるは奇らしく、石乳未だ垂るゝに及ばざるを以て、之を秩父や日原の鐘乳洞に比すべくもあらねども、白蠟溶くること半にして凝り、石吻相噛む、惡筆にて姓名を題す



るもの多く、その上を滑らかに迂る水音、琳玲として骨猶寒し。

元の來路を登り、白骨温泉の本道とV字形を成せるところの右を取り、溪谷に入りて湯瀑を見る、甚だ熱からざるを以て就いて浴すべし、鐘乳石一二枚を拾ふ、猶下ること一二間、岩鼻に踞して石門を觀る、龍穴の名あり、土人は「突い通し」といふ、一水北より來るもの、石灰岩の隙壁を穿ちて、蒲鉾形の門を作り、その下を叫喚怒吼しつゝ、南より來る一水を併せ、前の鬼ヶ城の下なる溪流となりて東崖へ出づるや、溪潤くして山舒ぶ、人もしこの石門内に俛し入りて、北端に至れば、淺くして流水と共に僣僂して出づべしと、今日雨後の水滿漲して、石門の穹窿を距ること甚だ短きを以て能はず、この間二町ばかり、内闢くして兩崖より漏る、微明、曉天の如く、水上に晃めくや、綠葉娑婆、空翠は碧玉を雨らし、銀の盃は之を享けて、山魚の浮游するごとし。この谷を猶溯ること十七八町なれば、崑下に「木の葉」石「苔の花」石等多量に層を成して存在すとひへど、我等は一枚も獲ざりき。

戻りて又穗ナシ平に上る、我等の室より額越しに眺むる山間の平野、や、廣潤なり、

東に燒嶽の側面を睨み、西に乗鞍を仰ぐ、乗鞍の絶巔はこゝより四里許にして達すべしといふ、一面の草原を井字に劃りて、蕎麥の花雪濤を繖へし、その間より漂流人が無人島に結びたる假屋の如く孤立するは、板挽の小舎、阿房山附近より檜を伐り出すに、險湍轟流にして材木のまゝに流すこと能はざるを以て、皆この邊にて製品にして出たす、多くはフルヒの繩なり、製法最も簡略なる故ならんか、それを搬ひて山坂を上下するものは皆牛、牛の蛇を伴ふこと最も多し。

原頭の草を藉いて、三人夕陽中に音なく仆る、荒城の如くなる、乗鞍の山影を浴びながら、何とは知らず憮然として語なし、偶々大サ蚋の如くなる惡蟲に膺を螫され、痛み甚だしさに駭き友を促して去る。

この日も半陰半晴にして昏れぬ、夜は教授氏より『日本氣候療養論』を借讀し、思ひ當りたることどもを手帖中に抄す。

明日は愈よ登山の第一日なり。



## 其七 霞澤の急湍を渉る記

待ちに待ちたる朝とはなりぬ。

導者二人、一は大石屋の主人、一は筒木市三郎と呼べる、齡二十三四ばかりなる獵師、二人共に山稼ぎ用の筒袖甲斐々々しく、腕より手首へかけては盲縞の手甲を蒙ふり、股引と袴とを折衷したるげなる、例の猿袴を穿ち、この邊の山地に常用せらるゝ蒲にて編みたる脚絆を着け、楓の皮を剝いて手際よく綴ぎ合せたる長方形の袋に、行厨箱、草鞋、鐘詰その他の食糧品を詰めこみ、鍋をその口に冠せて、其上を又麻繩にて十文字に括りたるを、緊と背負ひ、腰には山刀（鉈の細きもの）に半鞘をあてがひたるを横たへたるが、しとくと露を宿せる秋草を踏みしだき、咳に狹霧を破りて先立つ。

白骨温泉より北行すること二丁許にして、歩々爪先上りとなり、谷底よりすくくと涌き來る霧を、屯ろさせたる樅の枝の、翠雨滴らんとしてX形に入れ違ひたる間を、

右に左に掻い潜りて、蜀魂の頻りに悲叫するを聴きながら、仰いで上れば北の方霞澤山は、霧の裂け目にピラミッドを据ゑ、燒岳は突兀として之と高峻を競ひ、一段高くして帝冠を戴ける如き奇瘤を尖起す、この山の筋肉凸隆して、うち見るからに目も醒むるばかりに雄々しく、附近の山は風を望みて靡き撓みけむ如く、藍靛色の大小塊は、氷壺より淡々平たる霧空によどみ、その大なるものに至りては沈める曉霧の平波に、長鯨の背を出没するが如し。

急坂登りつくせば、傾斜は約二十度を以てだら／＼下りとなる、木は暫く絶え、野もせ一面秋草にて足の踏みどころもなく、桔梗や、女郎花や、月見草や、或は紫唇を綻ばして姉妹相抱いて接吻する如く、或は原頭に大月を落したる如く、或は瑠璃の眼に珠の涙を湛へたるあり、春の魂を追ひあくがれたる黄蝶の、木楡に翅を懸けて秋早く到るに迷ふがごとくなるも、いと哀れなり。

地獄谷を眼下に瞰るところにて、阿房峠や平湯道と分岐す、このわたりにて人の手に成りたるは、是のみならむとおもはるゝ芍薬畑四五反ばかりを斜視して、末は梓川



に合流すといふなる湯川の瀬音、急雨石に激するごとく、狹霧の濛々たる中より遠く  
聞ゆ、足許には焼け残りたる杭の如く黠々たる紅の櫛にぞ、頬白の來て囁るなる。  
路に遇へるは草刈に往く村女のみ、訝かしげに我等を目送しては囁き合ふもをか  
し、坂を下りつくせば山の裾と蹠と蹴合はんとして、盛促せる峽となり、澗水上下に  
亂流して草澤を作る、この沮洳の中を横行すること少時にして、又林に入る。しかも  
クヌキ、コナラの如き薪炭林にはあらで、栂、柏、朴等、その葉濶大にして且つ葉量に  
富む、中にサルノヲガセの懸垂するを見るに、その灰白にしてや、蒼味を帯び、絲の  
如く網の如くフツサリとして、そよ吹く風にも搖蕩し、空中に浮游するところ、あま  
りに繊細にして、却つて深山豪宕の景象に適ふをばほゆ。

洶湧せる梓川一支の谿谷には、柴の粗橋を架けたり、水中より羅漢面の如く突起せ  
る巨石、ひく／＼としてその橋の底に三角の頭を突きかけ、自ら支柱を成す、渡るこ  
と半にして、川畔遙に萬葉の娑婆たる緑の大波小波、畝ねれる奥に、白水股雷の吼ゆ  
ることく、水烟を蹴立て、直下するを見るに、名を知らねど甲斐身仙峽の仙娥瀑より

大なるべしとおもはる、たゞ潭碧さ中に起伏する石、磊々としてその間に山鯨の群、  
と首の如く游行するを覗ふのみ、渡り了れば細徑を挟んで紫陽花最も多く、露顆は涼、  
瑠璃の如く、冷、星の如く、その間より危岩出沒、赭身、裸身、河馬の伏して人を覗  
ふの状を作す。

山を繞ぐれば又前の如く沮洳なる澤となりて、蒲の茂れるもの多し、その澤の間を  
拾うて石を飛び、草に迄べりて、四山屹たる底に一團の伏兵、白鎧に身を固め、銀の  
鎗を閃めかして人を迎ふるにも似たる尾花の中を、さら／＼と分け入りたるに、腰を  
摩り、肩に觸れ、頬を撫でられて、四人亂軍の中を出沒先後したりしが、こゝを過ぎ  
て二分したる路の右に隨ひ、又二分したるに遭ひてこのたびは左に沿うて行く、人戸  
二軒、さゝやかなる稻田を前に控へて、並びたるが珍らしかりけり。

猶行くと一里許、霞澤の深谿漸く近うして、農家らしき孤屋に衝き當りぬ。枝折戸  
の傍には桐一本、曆日なき山中に歲月の「みをつくし」の如く高く標立し、この枝の小  
俣より垣へと斜にかけわたしたる棹には、樹の皮を細長く剥きたるを、幾十筋とな



く乾しあるが、初めは蛇ののたくるかとおどろかれぬ、一庭の畑には紫苜の葉油ぎりたるやうに濃く、桑麻その隅に錯はりて簇生す、潤くもあらぬこれらの畑を前に控へて、椽側長く、老媪一人跪くまりて針仕事をしてありき、導者等は茶碗を宿より齎らすことを忘れたりとて、此家にて四個を借り受け、荷を拵へ直しつゝある間に、余は背戸せとの後なる竈かまどに唇をあて息をも吐かず、冷水を飲むこと凡そ三升、準備もはや整ひたり、溢茶なりとも押し止むる媪を辭して立ち出づるに「しんびやう(神妙)に、ためらうて、ようち出てなされ」と別れを惜しみて、目送すること、十年の知己の如し、山中の人、風俗愿慤にして親しむべきかな。

『これからは、もう人ッ兒、ひとりに遇ふてねえ』

と我等を顧みてにやりと氣味悪しく笑ひたるは、大石屋の主人なりき。

これより間もなく溪流の側に出づ、柴の組橋亭々として高く洲上に架し、自然石の柱はその兩端に尖り出て、その上を豎に横にヤマモミヂは、鶯色に焦れたる樅の木蔭より水を覗ふて、こゝなる水の一分は茜色に流れ、早秋の劫火、川を焼いて「自然」に肅殺

の涙あり。

橋を渡り積の間に拓かれたる路を拾うて、愈よ霞澤に下る、奔湍雪を噴きて、石を走らし、その中に全澗を壓するばかりなる一枚岩は、大魚の人立する如く躍り出づ、無色の水も層を成すに随ひて、はじめ透明水晶の如かりしもの、紫乳を搾りたる如くになりて、かしこに渦まき、こゝにどよむ、積に沿ふこと四五丁計にして、石は叫び水楊は顫き、潤緑滴らんとする四壁に反響し、濛影しどろに亂れて、寒流の上を白馬と紫騮と、相噛み、相吼へて奔る。

一同こゝにて新らしく草鞋を換へ、水を渉る便宜のために、水楊の皮を剥きて早速の繩を作り、擔荷を緊しさが上に厳しく括り合せ、やをら水中に踏み入りたるに、流迅くして危石も轉ばすばかりなれば、兩脚抗す可らず、重量を着けむがために石を抱へたれど、却つてそのためによりめきて水中に頓踏せんとし、辛くも導者に扶けられて吻くちと息を吐きたりしが、かくして水を横断すること數次、時には深くして膝より臍へしに及べるを以て、紫蟹の如く畦に這ひ上り、僵れたるヤマハンノキを踏みだりに、枝



ポッキと折れて余は崖より三尺許之べり落ち、鉛筆は飛んで旋へらず、ポッキットに土沙入ること約五合なるに苦笑したることありき。

かくの如き險流奔湍を、徒渉するの使法は、一本の長棒を把り、臂力強き導者等をして、その両端を持せしめ、余等二人その中央を握り、「目指し」的に一文字に列なり歩調を揃へながら横ざるを以て最も安全となす、若し人々個々に涉らば、體量輕きを以て脚を浚はれ、或は踏みかけたる石の轉ぶと共に、前に俯める患ひあるなり、余從來高山に登れること多しと雖も、溪流の險絶惡絶を極めたるは、實にこゝなる霞澤を以て無上となす。

凡そ梓川七里の長さ、東より流れて又西に旋ぐる、霞澤より神河内カミカワチ（土俗略してカミウチと呼ぶ）まで三里半の間、此急流亂山相仄する間を跋渉するなり、水愈よ深く、斷崖凡そ百米突、鐵鏝褐色を成して水を夾むや、水は蛇紋の碧に加ふるに、黝色の薄皮を以てし、膏の如くとろりと澄む、こゝに至りて一步も前む能はず、再び崖に攀ぢ登り、懸崖の腰を繞りて大木の雲を衝く中を潜りゆくに、崖と磐との間に樹枝を組み

218943

合せたる屋狀のものあり、鹿垣にもあらねば熊の栗垣ともおもはれず、聞くにこゝは「ネヅミ落し」と呼び、冬に入りて山頂より斫り落す材木を受け留むるところなりといふ、崖の半腹を繚繞すること三十町餘、危峰交も天を衝いて回轉し、急湍怒吼して人語を亂るところ、偶々大屏風の急斜面より珠を噴くごとく、蒲の穂の狂ふごとく、瀑水の高さ十丈許なるもの、鮮綠を洗ひて直下するに行き遇ひぬ、その二段に折れたる間に突き出でたる巖を、しぶきに濡れながら危ふく踏みて、向ひの巖へと跳りたりしが、瀑布を横斷したる旅行も之をもてはじめとす。

又斗折して磧に下る、導者絶叫して曰く、人あり々々と、オーイと呼べば彼の同語を酬ゆる、げに山彦にはあらざりけり、突とばかり水を亂りてその聲する方に辿りつく、大石磊々たる間に小舎あり、こゝに髯むしやにして面は銅色に燦け、アイヌ人の如き風采ある岩魚釣一人棲めり、この小舎の建てざまは、大木の枝あるものを柱とし、枝より枝へと桷たざきやらの細き生木を懸けわたすこと横に六本、縦に八本、樹皮の繩にて結び（藁繩の如く腐り易からざればならむ）更に一二尺許の木を何本となく天椽よ



り吊るし、その尖の枝を鉤形にして「自在」竹に代ふ、又柱より柱へと薄板の棚を針付けに釣り、茶碗鍋などを並べ、毛皮にて作りたる胴着や袴を隅に押し丸めあり、床もなく葦簾二枚、その間に焚火するだけの空地を剩せるのみ、入口のみは開け放したれど、四周には逆茂木的の丸木塀を圍ひたり、殊におもしろきは手作りの下駄にて、杉板を豆腐形に鋸り、焼火箸にて三ツ穴を無造作に明け、繩をすげて鼻緒となす、この小舎を借りて晝餐することに決し、市三郎は山刀を揮つて粗朶を削り、瞬めく間に四人分の箸を作り終りしが、やがてかの槻の皮袋より、乾魚を三四枚取り出し、豫じめちざり置きたる蕨冬の葉に盛りて、饌に備ふ、「旅にしあれば椎の葉に盛り」の古歌人を欺かず、この間に大石屋の主人は、小舎の裏を搜索して木茸キノコを探り來り、火に炙りて我にも勧めたれど、これのみは氣味悪しかりければ肯はず、茶の如き餐澤品はなき代りに、鍋を提げて前の溪流より、水を一杯溢るゝばかりに汲み來り、茶碗にてすくひ飲み飲ひ、光景眞に原人時代のもの、この小舎は狹隘なれど一木一繩皆純潔にして、「いぶせき」といひ、或は「賤の伏屋」といふたぐひの威は起らず、岩魚釣の主人は獵

を以て本業となす、聞く、この山には蜂蜜多きためにや、熊も亦多く「野猿ヤマノイヌボ」などは平常かなに來ると、かゝる深山に獨居して怖ろしきことはなきやと問ひたるに、彼は友公の恠談を物語りぬ。

友公はこのわたりの山村に生れたる壯俊にして、岩茸採りを以て生業となす、岩茸のものたる、見あぐるばかりなる斷崖絶壁に生ずるをもて、之を採るものは繩を腰に結び、その一端を岩石又は立木に括りて、猿の如く下りゆくなり、時には仲間を語らひ、モッコに座して虚空に吊されながら、庖丁にて搔き取ることあり、彼はこれに妙を得て、人にも推され自らも許したりしが、或日例のごとく岩茸採りにと出てゆきたるまゝ、歸らざること一週日にも及びたれば、はじめは疑はざりし村人も、こはたゞごととならじと、手を分けて百方搜索したるに、無残やな、この谿にて屍となりたる彼を發見しぬ、僕もそのをり頼まれたる一人なりしが、今もなほ夕になりて水音の澄みわたるをりは、彼が人を喚ぶ聲、しんしんたる木魂に響いて、このときのみ毛穴の立つあもひぞするといふ、我は結飯を嚙ぢりながら、この話に耳傾けるたりしが、山中の



氣味漸く人に迫るを覺えぬ。前の溪流は涇々として花崗の白礫活きて走り、簞聲の如く、杼機の咿啞たる如く、村女の私語の如く、荒涼なる山村を琳々として驛鈴の渡るが如し。

飯し了りて立ち出づ、是より溪澗の石燕を追ひ、流水をZ字形に横斜斷し、灌木叢莽の間に出没して、絶壁の下、紫蔭、山葵の世をすねたる冷嘲者オウソウの如く、眼前咫尺の天地を領して、晏如たるを見ては無性にもしるがりぬ。

猶登る、導者は叫んで曰く熊の足痕々々々々。

と就いて之を見る、杭を抜き去りたる跡の柔土の如く、堀り上げられたる恐ろしさに思はず足を停めたりしが、しかも余竊に信ぜず、猶行くこと七八町許、獨活の六尺以上なるもの、人身を没するばかりに滿山に簇生したるが、こはいかに、野分に吹き撓められたらむ様に、右に左に振り伏せられて、襪にて爬き去られたる後の蒼海原オウソウに、皺の痕を止めたる如くなるさへあるに、その獨活の或ものは莖の半よりポツリと噛み截りたる痕あざやかなるにおどろかさされ、獨活は最も熊が嗜むものなりと聞くに及び

悚然として氣色ばむ、熊出てたらいかにすると問ひたるに、市三郎は呵々豪笑して曰く『出れば占めたもんだ』と、その状、頑童が土龍を狙ふより無造作なり。

このをりより水盡きて河原——寧ろ石原となり、大石小石起伏重疊したる上を踏んで、石壁を登りゆくに、伏流の琳琅たるを聴く外には、峰より峰をわたる老鶯の聲のみ。

石壁半にして願れば、我が徒涉し來りたる霞澤は、山流の特徴なるS字形に曲折して、銀鎖を繋ぎ合せたる如くに畝ねり、兩山倚仄したる間を悠々として蛇行す、はじめ谷の底より仰ぎたるときは、聳ゆる大嶺は細皺波の如く、窪曲には翠蓋藍光を宿して、萬緑雲の如くなるを覺えたりしが、今こゝまで登りてみれば、遠近の山は雲の如くよどみ、その雲の上に立つまことの雲は、西側に沿ひて段々上層に向ひ、山上更に尖山奇峯を亂立元立、その低きものは二重三重にして御供へ餅の如く、高さものに至りては龍卷の天を衝いて騰る如く、或ものは澗ひの中に火色を啣みて、まことの山を焼かんとす、その狀觀世音菩薩が逆さに建てたる五本の指柱の如く、凡そ三千米突より



七千米突ばかりはあらむとおもはる、高さに在り、望むべくして翼ありといへども飛行すべきにあらず、葉にあらずして鬱葱たるものは、夫れ雲耶、しかも這裡自ら大熱情を藏す。

愈よ霞澤山の頂に近づくまで、路ならぬ路——羊腸といふは猶路あるなり、是は則ち然らず——を草分にして上る、前人の足は後人の額と相踵ぎ、石身劈裂圭角稜々、草鞋を噛み、峻嶮三十度にも及ぶところを、汗みづくになり、喘ぐ息と悶ゆる聲と相交はりて上る、羅漢柏翠綠滴らんとし、山毛櫨の木亭々、石松その下に舖き、赭岩は鶯色の秋の日光を浴びて素衫を纏ひたる如く、密枝は横斜直上して鍵を掛け合せたる如くこんぐらかり、萬葉は海の如く、水の如く、空氣の如く、我等は葉に埋もれて、この中に呼吸する二手二足の玄微なる蟲の如く、かしこに這ひ、こゝに懸り、時には昏憊にへたばり伏して石長生ヘコネササに頬を擦りつけ、心臓の早鐘を衝くばかりなる鼓動を抑へて又上り、蔓には巻いて攀ぢ、枝には擁いて僵れ、人は互に呼べども面を見ず、只だ振かへれば白檜の枝を揺り動かして、綠葉の波に黒鍋の底を上にして浮沈するを見

て、導者の跟き到りたるを知るのみ。

漸く霞澤山の絶頂に這ひつきたるは午後一時、山頂は白檜帯の諸樹蒼鬱として白日を穿透せしめざるを期したりしが、さすがに、山高ければにや、木も漸く稀疎となり白雲裂けて自ら文を成すところ、堆藍の尖山奇峰——かれこそは穂高山よ、その肩に頤を載せて尖れる額を突き出せるは、我が鎗ヶ嶽にあらずや——隅々を縫ひて、その縫ひ目の鮮やかに輝を成せるところより、天日は光の脚を十方に注ぐ、手を額に加へて瞰下するに、嚮の天壁の如く、雪山の如くなりし雲の峯は、或は歪み、或は頽れかゝり、或は五分十分と見る間に飛び去んぬるあり、吁、時斯の如く侵掠す、「千年」「萬年」是れ何物を充たすべき、あだし名なるぞや。

膝を投げ出せる我等の上を覆ふものは、白檜の短木にして、その枝より枝へと蜘蛛の巢の如く禽の網をかけ放しにしたるは、何年前のものなりや知らねど、その上に高低出沒せる信濃の高山、その中にひと際雄なるは穂高山、其下に銀を敷きつめたる如き狭長き平原を串通して、一文字に流るゝは、問はても知るき梓川、導者指點していふ、



かしの白澤を過ぐれば、神河内カミノウチにして、則ち今夜我等の野宿するところなりと。どつかと尻を据ゑて辨當を開く、實に第二回目の晝餐なり、日高けれど木蔭なれば露未だ乾かず、手の觸るゝところ、露顆凝つて瑠璃の如きもの、大粒小粒墜ちて聲あり、清らかな爾「自然」の涙、何を恨みて人間の掌へはふりかゝりけるぞ。この時この處、日光三分、蔭七分。

### 其八 梓河畔に立ちて穗高山を觀ずる記

是より霞澤山を北西へ下るに決す、下り終るところは即ち穗高山の麓なる神河内にして、穗高山と肩を駢べて吾鎗ヶ嶽在焉。

下るといふもいづこより拔足すべきか、山の頂より七合目ほどのところ迄、白檜や樅や梅の針葉樹は、鎗嶽を作りたらしむが如く、森々と圍める中を空拳に闘ひ、木々を揺り動かしたつゝ空翠を十里の外に勿ね飛ばして、四人先を争ひ喧嘩して下る、一里許下れば喬樹蒼鬱、灌木掩翳、互に柯を交へて解れず、枝と枝と相觸れ、葉と葉と擦れ

合ひて緑の大濤たみ類れをうつ中を、立泳ぎして緑冷の氣骨に入るをふぼえぬ。森漸く開けて石となり、石漸く多くして水の奔るもの次第に急激、崖壁高く懸りて突兀空を摩する下、碧潭の小なるもの、往々藍を湛ふるに至る、石は磊々落々たる花崗の大岩、半ば水に沈んで徑尺の斷氷の如きもの、苔衣破れて石膚に心臟形の稜角を突起するもの、壘十ひらは優に敷き得べしと思はるゝほどに濶くして、厦屋状を成すもの、水中に頭を潜め、肱を曲げて安閑綠蔭を貪ぼるもの、神斧に割られて巖の尖りを波立てたるもの、百態にしてしかも自ら大小高低、不規律なる石の段階を作る、下るに水深ければ石を繞りて避け、避けては又石に乗らんとして手を石に、腰を石に、足を石に凭せかけ、石と石と重疊する間に介まり、或は攢木の下、純水の中に裸身の人の浴を濡れる如く、羸馬の横はり偃すが如き石群の間を爪立して飛び飛びに越ゆ、石漸く少く、崖となりて路絶ゆるや、友の足は水濕の蘚苔に迄べりて、谷蓼を尻の下に根こそぎにしたる儘、三四間引き摺られ、崖の下に反斗筋したるときは、我等手を額に加へたるまゝ、爲ひ術を知らず、幸ひに潭淺くして友の這ひ出でたるに安堵して、互に顧みた



るとき、導者の顔色土の如く蒼かりしは、椎の葉の装婆たる木蔭に佇みたる故にはあらじかし。

斯の如くして我等は高山より谷底に入り、谷底の窪口より水と俱に吐き出されたるなり。

川漸く濶くして分解されたる花崗の白沙は、水晶の屑を堆積したる如く、一萬尺餘の高山環峙の中、かくの如き沖積土を見むとはおもひもかけざりし、しかもその間を黒松落々として峻直に齊列し、林道濶うして砥の如し、導者は逸早く岩魚釣りの足痕を認め得たりと叫びたれど、我等には物色せられず。足許漸く昏くして黒松の枝を臥床にしたる恠禽は、はたはたと翫きして人を喰ふかや、悽愴の聲帽廂に落ちかゝる下を、梓川の畔なる神河内の孤屋へと辿り着く。

小舎の軒には古く煤びたる板札を釘付けにしたり、黄昏の微明に透かし視るに「一人一泊五錢」とぞ記されたる、戸を開ければ吹き入る山嵐に、圍爐裏の烟は横になぐれたるに、あなやと組みたる胡坐をくづし、うしろ手を着きながら我等が方を吃と睨

まへたるは、この舎の主人かあらぬか、右の眼よりかけて頬の半面は皮剝の刑に遇ひたる罪囚が、舊癩の蔽ひも隠されざる如く、その方面の前額より頭にかけては禿く禿げ、三四毛をそよがせたるのみ、かゝる夕、かゝる深山の孤屋に、かゝる奇醜の容貌を睹たるもの、宮本武藏にあらずして、誰か悚然二の足を踏まざらむ、我も呆れて躊躇したるが、導者の心安げに挨拶するに、聊か安堵して内に入れば、彼はこの舎の主人といふにはあらず、獵の片手間、岩魚や山鮭を釣るために、こゝを假りの宿としたるにて、平生は留守居とてなく、只だかゝる深山の中にて、ともかくも人家らしきはここ一軒のみなれば、いはゞ『お助け小舎』の如くに保存せられつゝあるものにて、かの板札に記されたる如き宿料は、何年前よりの定めなるかを知らずといふ、狭き小舎ながら室と言はば言ふべかりけるもの、三間に割りて在り、床板の上に、古蓆一枚敷きたるのみにて、よろづの體たらく物置小舎より無造作にして汚さ苦し、我等はその一室に草鞋を釋きたりしが、隣りての室には洋服を着けたる山林巡廻の吏二人、導者一人と俱に在り。「今夜はえら賑ふこつたぞ」とあたり構はず大笑したるは、かの



累かさねを男にして見まほしき老獵士なりき、我等が導者は荷を解くや否逸早く、手分量にて米を何合か、齋らせる鍋へ量り入れ、磨ぐべく急瀬濑々たる梓川邊へ立ち出でたるあと、我も脚絆の紺の滲にじみに汚れたる足を洗ふべく、つづきて立ち出でたるが、軒を歴してむくくと天に參せる大華表の如き靈山こそ、衝き立ちたれ、川の兩岸よりは縦梅の木立黝色になりて、大男の大股踏みしめ、臂を張りたるが、今にも歩み寄らんとする如く、森嚴凄慘の氣は、この北の方中俣岳、北俣岳、烏帽子岳、拔戸岳、南の方、硫黄岳、燒岳等、一萬尺を出入する、山の頂の錐の如く尖りて、波線狀の鐵壁を容くれる内に深沈として、をりから天父の唇より洩れたる噫氣に肌いと寒かりしが、無聲を破れる咳一つ、かの萬山中の孤屋よりぞ聞えける。

今にも軒に落ちかゝらむずる此巨人は、海拔一萬一千五百餘尺と測られて、鎗ヶ嶽と臂を把つて中州に傲睨せる、穗高山、夕の空は霽れて水の如く、しかも蒼色より水色に、猫眼石の如く次第に變化するや、夕の色は冷色なれば、何物も目より退く如く見ゆ、それかあらぬか、蒼海原より澄みわたりたる虚空に涵れる這箇の大瑠璃山は

一秒毎に二三寸づつ我より遠ざかりて、しかも猶森嚴なる尖銳點は、半空暮靄の水平線を突破したり。

黄昏の眼には確に見解けられざりしが、山の全體心臟形なる五個以上の大塊より成り、その頭は孰れも鋸齒狀に尖りて、錯出すれども、互層して半腹一に合するを以て、肩胛はいと濶く、鎗ヶ嶽の頂上の如く切截鉛錐形に孤聳することなし、千山の冷たき土窟に醸されたる新しぼりの八千溪水は、石に叫び木魂に響いて、山の麓なる梓川に落ち合ふなり。靜かなる夕を歌はんがために、威力ある大君の前に舞はんがために。

この夕、我れ河畔に立ち、瞬まじろきもせて偉大なる穗高山を觀ず。

我が脚を立つるの地は、接續より成れること、年代又年代を追へる歴史のそれの如くにして、歴史が巨人の紀念碑なる如く、地の最高最後の場は山なりき。

げに山なりき、爾は兀々たる自然の大書籍なり、人に在りての書籍は聖書、地に在りての書籍は爾にあらずや、我は假に爾をこゝに「山」と呼ぶ、しかも爾の山なるはその外皮のみ、爾が挟める一木は王笏よりも尊く、爾が秘める一瓣の花は、天爵の榮あり



爾は高し、然れども爾の高さを測り得べきものは三角術にあらずして、大なる聖靈ならずんばならず、何となればパイロンも言ひけむ如く、高山は我に取りて絶大なる感情なるをや。

噫この夕、日は没して現界より他界に移るとき、こゝに立てる一個の人影は、かしこに屹立せる一個巨人の影に壓せられ、屏風倒しに折り累なりて、大地に落つるときこゝに渾然融和して、我は天地の一部なる如く、山は我の一部なるが如し。

夜昏し、山は玻璃函中に秘められたる桔梗の大瓣の如くなりぬ。その玻璃愈よ厚さを加へぬ、吁混沌。

今や爾は垂死の聖徒の如く失せなむとす、猶且つ爾の前に頭を掻ぐるものやある、俯伏せざる何物か存在する、我今斯の如く絶叫す、爾いかなれば寂として聲なきや、しかも黙して爾を諦視するるとき、我只た、蒼茫萬古の意を覺ゆ、吁、爾は永劫に活く。

恍惚は天授なる哉。

日全く没して星一つ二つ晃めくにつれて、遠近の山は脈拍し、全溪谷は鼓臈し、木

立は瞬睡す、而して禽語はず、熊歩まず、栗鼠躍らず、一葉囁かず、吁森嚴！穂高山麓縦七里の非人寰は、宛如として日本のヨセミテ溪谷なり。

飯既に熟したりと、導師の來り促すに心駭かされて、小舎にかへりぬ、串刺にされたる岩魚は、かの容貌の醜さと反比例に、心さまのしほらしき老獵士の手に炙られて膳に上りぬ、珍羞なりき、彼は、やをら立ち上りて「お茶を御馳走しべいか」と、この舎にはふさはしからぬブリキ罐を隅より持ち來りぬ、一撮の茶、山氣の爽絶なるに適ふ。

夜寒うして白樺の枝を燈の代りに、灶爐にさし燻へながら、我等八人車座になりて能狩の冒險談より岩魚釣の話に移りぬ、かの獵師は壯年の折、岩魚を釣らんとして、險流を涉るとき、過まちて足を這べらし、押し流されて水中の岩石に半面を擦破せられ、彼が如き大傷を蒙りたるなりといふ。

夜更けて圍爐裏の傍に雜魚寝したれど、一味の高寒紫府より迫り來りて、外套にて包まれたる身も、夢を包むまで、山林吏が纏ひたる毛布の端を、をり／＼我に着せら



れたる情のほどぞ、世にありがたかりける、夜もすがら戶外の山流の音研えたるに引き入れられて幻となりしが、醒めて山姫がうたふ催眠歌にあらざりしかと惑ひぬ。

我は終生、この萬山環峙中、南北二十里間の、趣ある唯一孤屋を忘れざるべし。

### 其九 鎗ヶ嶽二回登山の記

#### (上) 第一回の登山

午前三時醒む、老獵師は主人顔に豆火の猶消えやらぬ爐を吹き起して柵をさし燵べ、大石屋や山林吏の導者等が、車座になりて一つの爐を取り圍み、飯を炊き乾魚を炙るに忙はしき間、本日登山の急先鋒を承はりたる市三郎は、これより生路のこととして、少しも油断なく老獵師に山中の繪圖を引きてむやと乞ひたるに、彼は乃公掌上の蝶蚊といはんばかり得意満面に快く諾ひ、我が與へたる改良判紙をためつ透かしつ視て脆つこいなあと嘲りつゝ、昨宵山銃の腹を屠れるときにや用ひたる、血痕したゝかなる組板を裏返へしにして、その上に展べ、同じく我の貸したる鉛筆にて幼兒のいなづ

ら書きのごとき枯枝やうのもの五六本を無造作に引き、この筋は一の谷の俣、かまへて踏み入りと語氣荒らゝかなれど懇ろに教ふるを、大石屋も向き直り額を鳩めて聽いてゐたり。老獵師はいふ、我等の仲間が三日前の雨に下山したるとき、荷になるが邪魔なりとて米三升許、赤岩の小舎に置き去りにしたと聞きたれば、猶あるべし、萬一糲足らずばそを借るも可からむと。山林吏の案内者も、このときは已に相談仲間に加はりて、五六日以来梓川の水量嵩まりたれば、この衆たちにやむづかしからむといふにぞ、我等は竊に胸を痛め、先途を氣遣へる大石屋の主人も率然として色を變じける。市三郎獨り頑然として肯はず『水が多きやあ、多いやうにして越す法があるによ』と運用の妙は一心に存すの意氣を示す、蓋し爐邊の團欒に、市三郎等が鎗ヶ嶽不知案内なる旨を白して、教へを乞ひたるに、山林吏の案内者、我がために弔して『大野川の乗でも伴れて來れば宜かつたになあ』といひたるに、利かぬ氣の市三郎が敵愾心を挑發したりとまぼし。大石屋は市三郎を眷屬視して、我威を張れど、我等の信任は却つて繋がりてこの壯伎に在り、彼を待つこと嶋越の鷲尾三郎も管ならず。



顔洗はひとて山嵐に胴震ひを堪へながら、戸外に立ち出てたるに、何物とも知れず背後よりのさりくと覗ひ寄るものこそあれ、駭いて振り向けば小山の如き巨獣の搖き出てたるなり、悸として我にもあらず二三歩避けたる時は、既に遅し、吾兩腋を挟んで舌舐めずるもの鼻を齧めかすもの四五頭に及ぶ、熟視するに牛なり、少しは胸うちつきたれど、さすがに氣味宜からねば、踵を旋らしたるに、又一頭二頭と、小舎より弓杖ばかり隔たりて結び繞ぐらしたる粗朶の埒を越ゆるもあり、潜るもありて、我が小舎に入りたる後を追ひ來り、角にて戸を突き破らむばかりなるに、老獵師は戸を啓けざまに櫓を抛ち、次ぐに大叱を以てして之を走らしぬ、聞くところに據れば横一里縱七里のこの神河内の牧野に、約百五十頭の牛を放飼せりといふ。

朝餉は濟みたり、登山準備ははや整ひたり、上りて今夜は山中に一泊し、明日又こゝに下り一宿する計畫なれば、我等は各外套一領と食糧品の必須なる分量をのみ、導者等に負はせて、擔荷の十の七を小舎の老獵師に托しつ、山林吏等に二揖して立ち出でぬ。

時に聖き山の蘇りたる誕生を欣賞する如く、空は瑠璃色に霽れわたり、溼氣は殘る隈なく充ち満ちて、天心より大地まで垂直に洗ふが如く透りたり。日もはや昇りたるならむ、大岳崇嶺の屏風にて、四圍を繞ぐらしたる谿底なれば、茜さす空はあらざりけり、たゞ爛星のみ瑠璃に篋めたる金剛石の如くに見めきたりしが、空は微白より明白に明けゆくにつれて、光芒次第にすがれゆき、樅林の中に噪げる鳥の翳さを聴く。黒松の峻直なる間、灌木の掩翳せるところを行くに、屍の臭ひの如きもの紛として鼻を撲つにおどろき、回避して去りしが、今にその何といふことを知らず、路に往々野牛の音立つるばかりに笹の葉を噛めるを觀る、灌木盡くるところ是れ梓河の畔。川の濶さ約二百間、その水とろりとして膏を凝らし、一萬尺の山肩を擁してその重さに流れを停めたる如くなるに、試に一脚を投じたるに、かの淙々として石を噛み雪を噴く淺瀬よりも、おもて靜にして、しかも水底は却つて石を動かし沙を走らし、我等の脚は根の搖ぎたる杭の如く、靡いて僵れむとす、駭いて互に棒と棒とを繋ぎ合せ、手長猿の水を渉るが如くして辛うじて向岸に達したるが、その間中央にて水の深さ膝より



股に及び、寒剣を以て歩々に斬る如く、冷味を過ぎて痛味となり、殆ど泣かんとし

向岸といふは根曲り竹の丈、七八尺なるもの。こんぐらがりて人を没し、その間に  
疲せよるぼいて、骨と皮ばかりになりて立てる黒松、それに並べる山毛櫨は、楕圓の  
大葉を傾けて銀の天漿を傾元に翻ぼすこと、驟雨より豪なり、幾んど足を地に着けざ  
る根曲り竹の中を泳ぐが如くして、右に迷ひ左に惑ひ、再び岸頭に出づれば、寒流梭  
より迅く、その底自ら花崗の大石を登して礫を作り、玻璃の中に太古の雪を秘めたる  
如し、河幅狭きを以て躍り越ゆるに決し、力任せに地を蹴ると同時に、向ふへ六尺ば  
かり飛ぶ、余の手際頗る鮮やかならずして、渚に尻突き、溪水を跳り損ねたる麋鹿の  
如くに、腰より下を濕ほしたりしかば、一同手を拍つて大笑す、しんくたる木下閣、  
木魅石鬼亦和してどよめき、翠雨紛として飛ぶ。

この時紅玉の日は高く躍出して、穗高山の左肩に掩へる血の如き濃雲は、千年萬年  
這個の名山を望んで、大聖の膝下に敬虔の念を馳せたる山村幾萬の生靈が心血の漂へ

るが如く、山は観るうちに微妙な情火の全身に沁み渡る如く明るくなり、衣の皺の  
百千條を一時に熨するや、東の方、大靈の在ませるあり、山色水光を一時に揺がす、  
見よ、清醒は現世に來れり。

奔洶せる山流を夾んで、穗高山一脈の崇嶽、天に攪し雲を截れるところ、その瓶の  
如くなる底を、蠢々乎として溯りゆくものは我等四人、しかも水は上下に亂流して往  
々分解したる花崗の白礫を堆積し、菱形に洲を作りて、水楊翠髪をぞよがし、黄蝶羽  
々然として山吹の花の繚亂する如く飛ぶ、月明の夜は化現して山姫の了儺となり、村  
家の少女が夢に入りなむか。

川を束ねて環峙せる危峰は、半腹に鳩の斑の如き白を被ふる、はじめは雪とおもひ  
るたりしが、後に皆花崗の白礫なるを知り得たり、水愈よ深くして渉る可らず、昨日  
の霞澤に比して流峻しく底深く、河幅又潤けれど、幸ひに崖は彼が如く挺拔せざるを  
以て、多くは崖の態笹を押し分けて路を作りたりしが、笹の物たる、由來山國自由の  
健兒、到底人の脚下に伏するを肯んぜざるもの、たとひ力を極めて之れを壓倒すると



も、一たび足を舉ぐれば悍然として猛力に反撥し、觸るゝものをして仰き仆れしむ、我等ために困憊して幾んど起たず、辛うじて導者等の肩に負はるゝが如く、身を恁せかけ、彼等が披靡して行く蹤に跟随す、この間の二里、實に我をして北海道の深山に入りたるかを想はしめぬ。

横尾といふところにて川は左右に岐る、我等はその右に沿ひて涉り、一の俣二の俣と追分を作るところにて、河原に石を敷いて踞し、吼雷の如き水聲を聽きながら、結飯を噛み、笹を折りて箸を作り、杏の鏝詰をつゞきて舌を鼓す、偶々小木を削りて作りたる迷途の標を、河原に挿めるものあるを見る、禿び筆に認めて曰く「右やりがたけ、是より絶頂まで四時間」と、蓋し一週日前、參謀本部の吏、人夫を引率して三角測量標を山嶺に搬ぶべく、登山したる時に樹てたるものならむといふ。

是より左に折れて又崖に登る、市三郎は猪の穴を發見したりとて大悦措かず、余の疾く々と促すを、恨めしげにうち見やりて去らず、蛇の道は蛇なりと笑ふ、又熊笹の部落となりて箭襖の中に入るや、一行その尖に多少の傷を負はざるはなし、昨夜爐

邊の閑談に、老獵師等が動もすれば熊笹々々と、氣にかくるを、熊ならば怖れもせぬ、熊笹何かあらんと腹の中にて嘲りたりしが、今に追ひて初めてその河漢言にあらざりしを知りぬ、鎗ヶ嶽登山中、急湍の險と熊笹の惡とに至りては、到底富士、御嶽、立山、白山等の能く拓けたる高山にては、見るを得ざるところなり。

笹道を押し分け、石道三十五度の傾斜を以て登ゆるところを攀づるに、石磊々として足を舉ぐる毎に、石と石と相觸れ、相撲ち、喧噪して谷底に下る、後人の頭を敲きはせずやと顔色變ずること幾回。樺の立木を目標として、横ざまに路を覗ひ、灌木叢に切れ々み、こゝにて一つの小舎を見出しぬ、小舎といへど一枚巖の崖より廂の如くさし出でたるを、そのまゝに屋となし、藤蔓を樺の木に結びて、壁を作り、藁を入口に懸垂したるものにして、この方より呼べば應とこたへて、骨格逞ましく、鬚髮鬚々たる獵士一人出て来る、導かれて内に入り、少憩す。

初めの豫定はこゝにて一泊するに在りしが、時漸く午なるを以て、余等は登山説を主張し、大石屋はこゝに一泊して新銳の氣を養ひ、明朝を以て絶嶺を窮めむといふ、



嚮に急湍を渉るとき、彼は少壯より「川飛び」「山駆け」の名人なりしを負ひて、屈曲斗折せる山流を先驅し、毎に我等を十八間後に捨て去りて、はては影をも見せざることあり、幾ど自己のために登山するものに似たり、ひとり市三郎の我等を懇ろに扶掖するものありて、幸ひに全きを獲たるなり、而して今俄に沮むものは、行を緩うして日備錢を多く食らんがためのみ、余が性氣急短は彼がもしろからぬ舉措によりて、一倍の熱を加へたれば、今日これより絶巔に登り、蒲田の谿谷を亂りて、飛彈に入るに何の手間暇あらむといさまく、大石屋はひた呆れに呆れて圓らなる團栗眼を張り「おめへッち、途方もねえことを、どうして往かつしやるだ」と冷笑す、余又怒る、刀あらば應さに按したるなるべし、市三郎間に介まりて交も救解し、一個の折衷案を提出して曰く、ともかくも日猶高ければ今日これより絶巔へ登ることすべし、然れども蒲田越えは到底むづかしければ、こゝまで引き返へし、今夜はこゝにて一泊するにとすべしと、衆議即ち之に一決し、鍋や米やを擧げて、この巖屋に托し、結飯のみ腰に括りて直に發す。

深林の間の細徑——おそらくは巖屋の主人が拓きたるものならむ——に踏み入り、「タケ茶莢」といひて、山葡萄めきたる黒紫の實を結べるものを採りて、行々之を茹ふ、はじめは氣味悪しくちもひて毒なきやと問へるに、市三郎は「嶽たけに生るものに、毒のあるもあな、ねえだよ」と、その口吻殆ど我等の無知を憫れむごとし、林ははや白檜帯に入りて、朽ちたる僵木路に横はりて交叉し、スギゴケの潤苔を衣て進るに足を這べらず、頻に啼くものは閑古鳥かあらぬか、冥途よりの使者に似たり。

深林を突破して又川となる、山頂の雪は日に溶けて、魔女の紡げる白髪しらげの如く、取次に亂流して歩々量を増し、石を盪かして風雨の聲をなす、しかも大石壁礫として下に突兀し、砲を抛ち艦を倒しまにして水を逆ふるを以て、前の川の如く足を濡らすに及ばず、石より石を傳ひてはや七合目ほどのところに到れば、水涸れて雪は瑠璃洞を作る、その上を渉るに固きこと冷鐵の如く、歩々杖にて二三寸を掘り、足場を作りては又上る。

時に大霧海の如くして音なく大荒を瀾り、鎗ヶ嶽の最高點なる奇瘦の尖峰は、霧を



呵し雲に駕して半天を渡る。その頂上なる三角測量標の尖端は、難破船の墻の如く聳えて、見る／＼無慙の大波に没し、亂山荒水は路と共に回轉して、霧の裂け目の上下に繼ぎ合されては又裂くるところより、山容水聲をうちあげ、うち下され、山より谷底を目がけて驀地に駆け下りる霧は雨の如く、谷は之を容れじと逆しまに追ひ戻すや、霧又騰りて杖を啣める白馬の如く、疾驅して前後皆一白。

八合目ほどのところに到る、大石は鮪の切味をぶちまけたる如くに亂堆し、人より高さもの十を以て算ふべく、偃松その間に點々し、石楠の白花交はり咲き、雷鳥人に駭きてチヨコ／＼と小走りに走り去んぬ、人を咀ふにあらずやと疑はる。

絶巔に達したるときは、午後三時半、上下左右たゞ濛々として白霧のみ、山高さか豁深さか、我たゞ卵の白味の如きもの混沌として大虚を涵せるを知るのみ、時に余は頻に齒痛をおぼえ、加ふるに空氣稀薄にして且氣壓の力低さを以て、心臓は促鼓し、呼吸は逼迫す、願れば家郷を出て、よりに十日、身は天漢に入りて雲を吮ひ霧を吸ひ、木魅石鬼に圍繞せられたる仙となり、火食の人なるをおぼえず、しかも只た泣

然として涙下る。齧ふるところの蠟燭に火を點じ、幾度か消えなんとするを、壊敗したる石祠のさゝやかなる断片に圍ふて立て、瞑目天を仰いでしばらくは默禱す、ヴォルテール猶且崇拜す、我今に追ひて初めて人間の弱さを知んぬ。

かくの如くして下山に決し、後向きになりて雪道を迂べりつゝ下る、石、偃松、石楠花、倏ち盡きて前の急流、亂石の間を涉り、巖屋に歸りぬ。

主人は自在木(山中熊笹根曲り竹等の外に竹なし)の鍵にかけたる大鍋に、熊の肉汁シロを煮ながら、杓子にてドロ／＼と掻き廻はしるたり、爐邊には熊の肉のポツ／＼切を串刺にして列ねありしを、晚餐の肴に乞ひ得て、數樹を喫す、昨日は山鮭を味ひ、今は熊肉に飽く、山中の珍珠之に過ぎたるはなし。爐邊には剝きたるばかりなる熊の皮を木骨に張りて、爪ある四肢の伸びて鋭さが、火氣強さにつれて、パチ／＼と音すること、麥稈を焼く如し。大石屋は彼と耳語したりしが、やがて伴の熊の皮をあの荷に巻きをさめて、獨り會心の笑ひを洩らしぬ、蓋し温泉の旅舎を生業とせる彼は、獵人何日の湯治料と交換するの約を訂したるならむか。獵人の語るところによれば、こ



の熊は「タナカラオツテ」死しぬたるを發見して、皮と肉とにしてこゝまで搬び來りたるなりといふ。「タナ」は崖の方言、「オツタ」は「落ちた」の意義なることを後に知りぬ。彼の語るところに據るに、彼は曾て乗鞍嶽なる硫黄谷にて、大熊と小熊と累なり合ひて死しぬたるを發見したることありしが、親子狎戯して絶壁より足を踏み外したるならむといふ。要するに余が今まで屢ば見たるこの邊の熊の皮は、北海道産のものとは違ひ、毛薄くして黒澤美ならねば、革としては知らねど、敷物としては妙ならざるべし。

前に霧澤の小舎を原始的なりともひたる余は、この巖屋に至つて更に一千年を溯りたる心地しぬ、獵人は大野川村の人、赤痢の猖獗なるを避けて、この夏をこゝに閑居するなりといふ。さるにても我少年にして教へを受けたるとき、知命の者は巖牆の下に立たずとこそ聞きたりしに、と微笑をとゞめあへざりき。

夜に入りて主人白樺の皮を附木代りに點火するに、青炎白晝の如く、光暉石油に勝る、愈よ山中の風流をたへながら寢に就く、蓆僅に二枚にして五人を覆ふに足らねぬ。

ば、或は山毛櫨の葉を採り來りて地に敷き、或は擔荷を枕代りにして横になる、主人は木枕に手拭あてて、仰向けになりしが、やがて四傍かまはぬ大軒となりぬ、我等のみ寒うして睡を交へられねば、焚火を掻き起してのみゐたりける、蓆の戸の隙間より沁み入る大山深谷の噫氣、神骨を冷殺するとき、千樹萬禽、片睡を吞んで靜まりかへりぬ。

されど、疲勞は竟に寒氣を征服しぬ。

### (下) 第二回の登山

さらぬだに露の零つるにさへ、心を置く山中の旅客なり、高寒に蟄蛇の夢を破られて起き上れば、一天霽れて織雲なく澄みたること水に似たり、何物の惟禽ぞ、頻にけたしましく爛星に叫び、一木慘として微顛せず、ほがらなる曉や、深沈たる白檜黒檜の聖なる天杖を、轟々と隙間なく駢べて、高く霄漢に入り、その梢に支へられたる天外の攢峰列岳は、堆盤水に溶けやらす、崑崙東を望んで屹たり、領巾を振つて立つて井



舞す、曉車の出づるを迎ふにやあらむずらむ。

我等は又是より昨日の來路を取りて、神河内へ下らんとする身なり、おもへば今の今まで、亂山荒水の間を風に梳り雨に沐して、さすらひたるも實にこの高嶽の絶嶺に立ち、天風に長嘯して浩氣を養はむとするにありたるものを、登山といふ名はありながら、霧のために一切茫々、何物をも覩ず、悄乎として下らば、少しは髭を立てたる男一疋、いかで口惜しからざるべき、況いて爽空一碧、瀟氣脾肝に泌み入りて、天地一片眉間に落つるこの朝ぼらけに下るをや。いで、いで、今より第二回の登山を試みてくれんずるはと、勇み立ちたれど、又こゝまで下らむはあもしろからず、鎗ヶ嶽の裏山なる千丈の絶壁を、逆毛吹かる、野猪の如く、蕤地に下りて深谿窮谷を亂り、飛驒の國は吉城郡蒲田の温泉に出てむはいかにと、市三郎を麾いて咨るに、さしも膽氣を負へる彼も、頗る難色あり、沈吟やや久しうして、巖屋の主人を顧み、「どうだ往けるだらうかの」と促すに、彼は馬子張の烟管を一服吹いて焼木に丁と叩き、「造作もねえこつた、おれツちや、毎日のやうに往んだり來たりしてますさ」と、そのさま日和下

駄を穿ツかけて、隣家へ通ふより容易げなり。すはやと血氣に憚る胸を押し鎮め、併し谷の中で野宿をするやうになつても困るが、一日程で往けるかねと、念を押すに、大丈夫だよ、その方が神河内へ下りて往くのより、どのくれえ近いか知れねえと、余等雀躍して曰くしめた!

然れども荷の大部分は神河内の小舎に寄托しあるを以て、ひと先づ之を齎らし來らざる可らず、是に於て導者二人を二手に分ち、一は余等を嚮導して鎗ヶ嶽の絶頂より裏山を躑躅え谿谷傳ひに蒲田温泉へ出づる任に膺り、他の一人は是より昨日の來路を神河内まで下り、荷を取り戻して燒嶽の天嶮を躑躅え、中尾の荒村に下り、今夕を以て兩軍蒲田温泉に邂逅するに決し、しかも後者は稀に猪熊を追ふ獵師の、踏み入ることもありといふところなれど、前者に至りては懸崖圍繞の間なる急湍激流を步驟せざる可らず、導者の大役こゝに至りて極まる、しかも市三郎は自ら奨めて曰く、奴乞ふ敢へて當らむと、即ち急に殘飯を嚙み、結束して起つ、主人は固く市三郎を誠しめていふ、ゴテンへ上つたら左へと下りるだよ、右へ下りたら野口谷だて、取り返へしがつ



かねることになるをよと、山民は峻嶽峻峰の頂上をゴテン又はランデョウといふ、蓋し「御天」「天上」の意義にして、山嶽崇拜の風を見るべし。この山の脈つゞきに大天上嶽といふあり、海拔又一萬有餘尺氣象自ら雄なるをおぼゆるに、さすがに其名を羞かじめず。

かくて大石屋とは南北に別れ、日猶低ければ足許のをぐらき深林を掻き分け行く、惟鳥一文字に飛び立ち、盤旋して又下る、暫くして赤兒の啼くがごとき聲あり、一山の寂ひを破りて尖り鋭く耳に入る。

森の脇腹を破りて氷流に出づ、日本に氷河こそなければ、この峻絶なる高山の氷雪は、融けて急河を成し、迷石を運びて驚盪奮躍、峽を劈く聲は吼雷の如く、石は苔を被ふるに違あらずして、兀立、亂立、屹立、悍流に逆らひて巨石は怒り小石は跳躍し、水は激射して雪を繭へし珠を吹く、その激迅なる水を下瞰して、石上に踞し、冷々白石の奔泉を汲み、飲んで脾肝を爽やかにす、時に紅嘴翠頭にして、白翎の小禽あり、石上に點じて、殷雷に雹の落ちたるかと疑はる。

暫くは鎗ヶ嶽の中腹を縦に、長袷緩帯の懸かるが如くなるこの犇湍に沿うて往く、峽漸く低く、石次第に多く、崖には深刻なる無數の皺を折り、風雨萬年、精苦なりし閱歴の黙示を刻めるを觀る。

上ること二里、水涸れて水源なる雪洞となる、雪は氷原の如く山の裾と共に蜿蜒す、しかもその破罅の危岩には、ギバナノコマノツメ、タカチヌミレ、クルマユリなどの簇がり咲くを觀る、七分の冷血質と三分の多血質。

左右皆絶壁、交も裾を、蹴合はむばかりに入れ違ひたる間を、石を拾ひ雪に這へりて、之字に攀つ。

七合目ほどのところとなれば、北西に乗鞍の大嶽、赤裸臂を延べて霄漢を摩し、穂高山は又その北に斜伸して、肩を半天に聳やす、而して額越しに鎗ヶ嶽の絶頂、石筈五六本を駢べ立て、その右のもの最も高うして、尖先鋭く磨ぎ立てたる寒劍の、半天に瀾りて空を削るを仰ぐ。

これよりは偃松帯となり、起伏狼藉せる石よりは、皆吹息するかの如く、厦屋亂堆



せる、状を成し、ボムベイ市の廢墟もかくやとばかり、石は高寒の氣を宿して、冷いやりと人の膚に迫る。この石の巨大なるものを組み合せて、獵師の野營に充つるコヤ（山間にてコヤといふは、必ずしも家屋をのみ指していふにあらず）を作りたるものあるを發見し。いかにしてここに起臥し得るかを恠しむのみ。

假松帶盡き、峰頭の隆起を作るもの、敢へて四五といはず、その鋸齒狀に虚空を亂斫せる間の窪口に達したるところは、最高點にはあらねど、ともかくも絶頂にして、幅薄くして狭長なるプラットフォームを作れり。

我はいつしか鞍上に立つ人の如く、長鬚風なくして左右に披靡するは皆鎗ヶ嶽の支峰傍岳にして、眼下に懸垂せる絶壁の下なる溪谷は、信濃越後と飛驒越中との分水點となる、右の方に向つて放射するものは荒蕩たる野口の大谷、無人の境を涉ること二日にして、信越環山中の寒村に出づべく、左の方は飛驒に向つて亂山圍繞の中を悍流する蒲田の深谿、一步を右すると左するとは、則ち吳に之くか越に之くかの境なり、さすがの市三郎も舌を捲いて駭嘆していへらく『山路を一分八間とはよく言つた

なあ』と、腕を組むて動かさること石人の如し。

しかも見よ。

天地間何物かこの絶大觀あらむ。

中央大山系に一萬尺を出入して腕蜒起伏する大山、崇嶺、巒峰、列岳は、虚空を涵せる曉霧の汀線を突破して、萬浪前に翻へり、千波後に立つ如し、その曉霧はきはめて濃くして厚く、宇宙を半截して上は碧天、下は銀霧、混沌として綿の如く、氷の如く、湖の如く、海の如く、山肩以下に屯ろして、凝滯動かず、試に拳石を投じたるに、白濤澎湃として冰山見るく兀立す。

時に天風冷やかに頬桁をなぐつて、霧に浸れる萬山は、各氷山と俱に一體となり、互に顧盼して頷き、肅として沈黙す。

おののく足を踏みしめつ、三角測量標を建てたる一皴峰に蝸附して上る、絶巔より突兀たる約二百尺、膽沮みて幾回か落ちむとしてはしがみつき、瞑目して漸く攀ぢりたりと、我が鎗ヶ嶽の最高點にして、海拔實に一萬二千六百五十二尺、山は遠く遠



く塵圈を隔てて、高く高く秋旻に入り八月炎帝の威、今果して幾何ぞとばかり……見よ。

西の方蒲田谿谷を控へて、大屏風を截りて立てたるは笠ヶ嶽にして、直徑僅に何十町、臂を伸ぶれば彼の齊なげなる兀頭を撫するを得むのみ、その一帯の蜿蜒する上に、菌の簇生する如く、向背相望んで立てるは、横嶽高辻山薬師嶽等にして、その北肩より搖り落されたる露蕪は數十里の外に飛び、尖端茫として烟らんとし、富山平原に至りては、はや水平線下のものたり。有耶無耶。

正東には一萬尺餘の常念ヶ嶽あり、我去年松本平原より鎗ヶ嶽と、この山とを仰觀して、その壯嚴に打れたることありしが、今は霧のためにかの橙黄色を以て代表せられたる繪畫的平原を、波底に没却されたるを憾むのみ。

さはれ遙に遠く、淺間山はこの銀に閃く霧の海より烟を吐ける——或は雲なりしやも知る可らず——小島嶼の如くして、はてはれのが吐ける雲か烟の中にすがれゆく。其附近の群山は紫の穂を立つるもあり、藍の銚を露はすもあり、南の方我と隣りて比肩せ

る穂高山と、大に隔たりて仁王立ちなる御嶽とは、乗鞍嶽を兩腋に夾みて、三巨人相笑みて、我を招くが如し、南東に方りては甲斐の駒ヶ嶽を初めとして、之に列なれる鳳凰山、地藏嶽等は、別派の聚落を作りて、その多角形なる大塊は、波を踏むて、今にも眉宇の間に迫り来る如く、そゞろに手を額に加へしむ、若し夫れ赤石山、白峯の礪礪を先鋒として、水か空かを辨へざるスカイ、ラインに一朶の藍靛色を潛める甲斐以南の山に至りては、層々として是れ宛如たる雲級圖。

頭を回らせば正北には越中群山の霸王たる立山は、當面搶目に屹立し、雲底を撫て、意氣頗る雄なり、恨むらくは西境の大君たる加賀の白山を瞰るを得ざりしことや、しかも萬山の中、幾何的圓錐形を整へて、端嚴微妙、我をして拜跪せしめたるものをあれ、誰かは讚せざらむ、吁、大慈大悲の不二の山……

この間、欲辯已忘言。

おもへらく、自然は地に在りて絶大至高なる絶念碑を建てぬ、美なるかな蜻蛉洲、その嵩高美は一に萃めてこゝなる中央大山系に存ず、しかもその大觀を、一目に縦ま



にせしむるため中央にいや高さ聖壇を築くにあらざりせば、そはあまりに統一を缺きたらずや。

故に鎗ヶ嶽は、一片孤聳的に臨座すべき運命を負ひ、生れてこゝに特立しぬ。

### 其十 鎗ヶ嶽裏山越えの記

時に午前九時を過ぐるごと、四分の一時。

霧の澎湃として脚下にひたうつ鎗ヶ嶽の絶巔を、南へと傳ひて迎るに、心地愴然として蒼洋の渚に沿ひて歩むごとく、是れ平地か、是れ高嶽かのけじめを忘る、頭上は是れ第一の無限、脚下は是れ第二の無限、彼は水の如く是は鏡の如く、相磨し相反映して、現世の深淵と未來世の静潭と、一髪の汀線に割せらるゝところ、生命の光は澱み死の色は沈む。

我初め山の高さに登りて、他の低きもの小なるものに、王者の威を挿んで臨まむことをおもひぬ、底事ぞ、鎗ヶ嶽彼自身は、自己のいかに高きかを知らざるが際

に、我もいつしかその高さを忘れぬ、山に入りて山を知らざるは猶凡境、山に登りて猶且山を知らざるに至りて、我や無何有の帝郷に逍遙遊をなしぬ。

よしや天の才は徴されて天上の修文郎ともなれ、我等は到底永くこの高御座を領するの人のあらず、かくて遠謫の命運今や我に迫りぬ。

山巔より飛驒方面に向ひて捌ける山の裾は、うち見たるところ二十五度ほどの傾斜にして、満山は何といふ名か知らねど、麥の穂波を漲らすやうなる青草にて、光澤ある天鵝絨をヶバ立て、下山いと易げに見えなれば、市三郎を先頭として次第に下りかくるに、草と草との間には窪穴あるかともへば、又石の凸出せるもありて、その上を草にて覆ひたれば、柔綿にて石を包みたる上を歩む如く、躓くこと幾回といふを知らず、友人岡野氏の如きは、ために右脚の拇指を擦破し血滲み出てなれば、手巾を裂いて早速の繃帯を作り、之を緊縛したるが、草鞋の紐喰ひ入りて痛むこと甚たしといふに、下山遅々として大に惱む。

崖を下り終ればその下は石道、大石机の如きもの、厦屋の如きもの、床の如きもの、



亂堆して自然の危磴を作り、路窄くして見上ぐれば鎗ヶ嶽の絶壁は、今にも眉睫を蹴らんとす、石道迂回するに随ひて益す濶く、傾斜も漸く緩やかとなり、飛ぶが如く石より石を傳はりて、全く水の氣なき谿谷の底を行くに、之を前日の登山道に比すれば、大道砥の如きれもひあり、我はじめ飛驒蒲田の谿谷より、鎗ヶ嶽登山の不可能なるを聽きて、思をこの方面に断ちたりしに、是に至りてあまりに與みし易きに呆れ、竊に飛驒人士の爲す無さを嘲りぬ。

往けども往けども石は櫓を突起し、城砦を左右に築き、人の奔ると共に轉輾して、低きもの隠れ、高きもの現はれ、その上の天壁一萬尺、蜿蜒として雲を呑み、無邊際空に出没して、飛禽もたゆたふ長城ぞや。

時既に午に近し、石間水の湛ふるものあり、天雪の融けたるものか、淨きこと水晶の如く、塵子なく、之を吹けば漣々如として瑠璃の波を立てむかどぞおもふ、水の石を繞りて上下亂流するもの、聲漸く厲し、こゝにて晝餐を喫することに決し、市三郎は擔荷を石上に卸し、鍋に米を容れて且つ洗ひ且つ磨き、手頃の石を三方に圍みて

早速の竈を作り、このわたりには、はや部落を作れるタケ樅の林を背に負ひて、自然の大殿を食堂厨室となしぬ。我等はこの林間より、去年の枯木を拾ひ來り、草鞋に燧火を點して、杉の葉代りに燃やしたる上加へて之を扇ぐや、バチ／＼と音して烟は直上し、樅の梢より梢を傳ふよと見る間に、罅隙を索めて林の奥深くへと分け入りつ白衣の物の怪、緑雨を浴ひて、いづくんか消えぬ。唯飯の炊ける間に、市三郎が石に敲く煙管の音のみ、コチコチとして無住の大伽藍に、鼠の何物をか嚙むらむ寂びしさを味ひぬ。

我等はこの林間に踞くまれる大石の上に這ひ上り、『いま暖けえ飯よ喰はせるてや』といひながら鈍にて箸を作れる彼の甲斐々々しさに引き替へて、頤を支へて腹匍ひつゝ心地よき日暖りに眠たくなりぬ、一昨夜も昨夜も、碌々睡を交へざりければなり。飯成ると告げられて、まことは空腹に蟲唾を呑みこみぬる我等なれば、俄破と居直り、瞬く間に四五碗を代へ、牛の罐詰一個、奈良漬二本、乾魚六枚を退治したるこそめさましかりけれ。



仰げば大空藍玉を溶きて、こゝなる谷の壑底を望みて流れ入るらむ如く、崖の突き出でたるに一尺二尺と天領を感められて、熱情の氣樽として磐に滿つるや、我は恍としてオルツアルスの『眞美は豁谷に住む』 True beauty dwells in deep retreats を想ひ出てぬ。

いつまでかくてあるべきにあらねば、相促して出立す、導者はこゝにて兎の死骸を發見し、杖にて敲くに木伊乃の如く乾固まりて在りき、單に是のみにはあらず、その後も往々兎の足痕のあざやかに、沙に印するを杖にて指され、始めてそれと知りたるもをかし。

路愈よ潤くして二又に別れたるに、潤き方を取りて次第に下れば、水の出つるもの漸く多く、濘々潺々として崖より走り、木の間の葉の茂みを潜りて、ちよろ／＼と落ち、行く途に當つて門を横へたるが如く、向ひの崖よりこなたへと僵れたる檜の、ちのづと洞を成せるを筧にして下る、始めはひたひたと草鞋の底を浸すほどなりしが、後には踵より「くろぶし」に及び、加ふるに崖剝して削るが如くなるどころより瀑とな

りて雲を吹くに及びてや、水愈よ深くして膝の皿に及ぶ。

こゝに至りて一同路を崖上に取らざる可らざるに至り、晝猶暗き夏木立に分け入りたりしが、たとへば嵐に遭ひたる舟の、渚へ々々とおもひながら、沖の方へ吹きつけらるゝ如く素より路もなき木下闇を、方角も解らて右へ左へと木々を揺りながら、廻旋するなれば、しんしんたる樅や、梅や、殊に唐松唐檜の如きは、本州に在りても東は磐城岩代を限りて奥羽以北になく、西は信飛の境上を界として立山以西南になき者なれば、こゝこそは我が主領なれといはぬばかりに密生して、其間木會に多きチヅコを交へ、薨々として山男の髻の如きサルノヲカゼを垂れたるもあれば、朽ちて年久しき僵木の交叉したる間に、榻に倚りたる如くなりて足を踏み入れ、抜かむとして傍の大木に蜿ねれる蔓に縋れば、苔ぬらりとして大蛇の鱗の逆立けむ腥さに、冷いやりとしたることあり、或時は梅の針多き枝に襟を縫はれて、鐵楯を擔ひたる如く、いかに悶けとも動かざるに呆れ、枝をばさりと折りて思はずも前に俯めれば、葉はさつと揺れて光を翳ぼすこと一斗、空間冴えて三尺の亂れ焼刃、晃りと閃きたるかとねも



ふに、又閉ぢて葉は光を夢み、人は夢を追ふて、両ながら恍として相知らざるに似たり、木漸く疎らになりて、輻輳たる水音に谿近きかとおもはるゝところは、熊笹葎々として、その間に『熊の糞があるぞ』と導者の指すに膽を冷やしたることありしがそれも暫時、獨活や鬼薊の、洋服の上より脛を噛むところを、力任せに敲き伏せ、縦横に荒れて、早く日光を見るところへ出てたしと、面も振らず縁濤翠波の中に跳り入り磁石を便りて崖へ近く近くと下り、檜の梢を猿の如く傳はりて、再ひ谿谷の河原へ飛び下りたりしが、半時間ばかりかゝりて、溪流の直徑四五丁ばかりの所を、超えたるに過ぎざりしと知りて、呆れはてぬ。

かくて又水深ければ、崖に上り、密樹を掻き分け隔たること七八歩なれば、互に人の在るところを失はむばかり、喘き、苦しみ、悶へて「熊飛び」といふところに到れば、兩崖聳へて額を合はさむばかり、嶮然水を夾んで莢を縦に割りたる如く屹立し、その下巨石は天秘を藏する函の如く挿みて、流水溯洄二道の白氣騰上して木葉に白雨を彈く、熊の、こなたの崖よりかなたへと飛びゆくを以て、この名ありと

こゝに至りて一行大に沮み、進む能はず、退くに術なし、時計を検すれば午後二時夏の日長しと雖、壘の底の如き谿谷なればにや、黄昏に近きたるかとおもはるゝまで光弱く、霧ははや谿を涉りて白く、渾沌としてたゞ急瀬雷吼の如くどろ／＼と鳴りはためくを聴くのみ、然れとも蒲田の荒村は未だ何里の先にあるかを知らず、日愈よ昏れてこゝなる谿澗に夜營を張ることゝもならば、米の残り猶あれば饑こそ凌ぎ得べけれ、外套も毛布も、今朝大石屋に持たせて別路を先發せしめれば、いかてか高寒を防ぐことを得むと、氣遣ふこと甚だし、市三郎は悠然迫らず、いつも先頭に立ちて崖下りに、瀬踏みに、はた熊笹に、路を拓くこと頗る努む、余は森道の抄取らざるに業を熬やし、寧ろ一氣に荒水を亂りて、魚と運命を伴にせむといさまけど、友は余よりも軀軀短くして、水の余が胸部に来るときは、彼の喉に及ぶ比例なるを以て、従はず、余又大に啞うて止む、しかも谿流かくの如く深くして迅かに、仄崖かくの如く高くして急ならんか、余等おそらくは是に死處を知らざらむなり、是に至て始めて飛驒方面より登山の到底不可能なるを知り、曩の廣舌を悔ひぬ。



既にして導者は漸く材木小舎を發見しぬ、余等雀躍疾驅して是に就けば、枋の木を井桁に高く組みたるものにして、人の隻影を見ざるに聊か失望したれど、既に材木の在るところ蒲田と相距る遠からざるや知るべきのみと、狂喜拊舞す。

しかも悦びはあだなりき、水は益す深く、崖は益す峻しく、森は益す密やかに、迷ひに迷ひて或は瀑布を亂り、或は栗の梢に懸りて悶へつ、地を離るゝこと三尺許の空を逍遙ひ、彷徨一二時間、各人ともに多少の手傷を負はざるなく、余の洋服の如きは鍵裂きにて胸に口を吐き、岡野氏の半袴は干瓢の如く白條となりて叩頭す、互に見交はすとき、人々の唇は蒼うして血の通ふともおもはれざりき。

されど人里の近きたる嬉しさには、林もや、路らしき細徑を有するに至り、路の盡くるところには故らに枝を折りて迷途の標を作る、荒寥無人の山中に「枝折り」を作れるなどと、太古の遺風を見るべし、是のみならず谿澗に下りて、往々洲を幾處に作れるところに到れば、何人のすさびにや、土饅頭形に圓石を積み重ねて「この方面へ」と導くに似たり、余かつて乗鞍嶽に登れるとき、同じ石の積みさまを見て、指南車の便

を獲たりしが、山國無人の境を跋渉するものは、これらの些細事を看過す可らず。

この時、草鞋は扯れて踵は穴を生じたれども、他の準備したるものは燃料に、もしくは穿き換へに用ひつくしたれば、今如何ともしがたし、漸く林盡くるに及びて、山中隔絶の一孤屋に行き當り、視へば荒くれ男三四人、篩（材木のまゝにては險流を撒ぶこと能はざるを以て、製品として牛に積み、人里に出たすなり）を作りゐたり、市三郎抵掌して草鞋を售らむことを乞ひたるに生憎持ち合せなしといふ、しかもこの先に又小舎あればそこに尋ねられよと、至つて懸るなり。

日も昏れたれば、急げや急げと、疾驅して下るに、だらだら下りの阪道にして、路も埋まるばかりにオンパコ叢生したれば、悦ぶこと限りなし、凡そその畔たると堤たるを問はず、オンパコは必ず人に踏まれたる土ならでは、生えぬものなれば、路に迷ひたる人は、オンパコを道知るべの草として、その在るが方へ迎れば、人里に出てずといふことなし、漸く一軒屋を見つけ、強ひて剩れる草鞋を一雙乞ひ受け、二人各片方づゝ穿さかへ、提灯に火をもらひて又下る。



時に夕霧はしつとりと峽に沈みて、帛を裂く谿流の聲は人語を亂り、瑠璃玉くす玉の湧きかへりて仄立する四壁中に物言ふ如くなるに、山頂より崖を傳ひて、音もなく下り來れる夕闇は、いつしか天領を蝕みつくしつ、我等が背を望んで壓し伏せる如く追いつかんとす、我等は愈よ走れり。

林徑にて、はたと行き違ひたるは獵士と覺しきもの連れ立ちて三四人、先づ人を獲たるに安堵して、蒲田温泉まで猶何里ありやと問へば、直くにそこなりといふ、皆我等の服裝を怪しみて『お前へッちどこから來さッした』と口々に訝かる、鎗ヶ嶽をこえて來れりと答ふれば、吃驚して『そりやお前ッち、どえらいこと、出來さッしたなあよ』ひえい、劔ヶ峯まで、上<sup>の</sup>なすつたかよ(鎗ヶ嶽の最高點三角測量標の在るところを、劔ヶ峯といふことを、是に至りて初めて知りぬ)など口々に賞めそやしぬ。

これらの人々に導かれて蒲田に入れば、はや夜目ながら黍や稗の火田水田を見るやうになり、路左溪流に沿ひたるところより、白烟蒸々すさまじき音させて衝つ立ち昇るは湯涌谷と知られて、硫黄の氣紛として鼻を撲つに、立山の地獄谷より小に、箱根

の大地獄よりは大ならむと思はる、山の裾開けて二溪流△形に合し、一本の尖りを作りて石は天に叫び、水はどよみの聲を作るところ、板橋ゆらり渡れば、提灯を振り翳して遠くより呼ぶものあり、近けば大石屋の主人なり、互に無事を祝し合ひつゝ、導かれて、とある宿へ草鞋を釋き、重さ萬鈞の双脚を曳きつゝ、二三年前許離れたる浴泉小舎に入る、湯は二槽に別れて溢る、しかも熱くして堪ふ可らず、往々湯殿に引きある笕の水を酌み入れて加減を作るに、四肢暢ひて我膚ながら玉の如し、村人亦仰向けになりて湯に浮ひ、悠々村歌を謠ふ、立ち出づるとき一群の村童七夕と書きたる提灯を手にしながら、板の上に蠟燭を點火したるを、寒笕の流水に浮べ、どよめいて去る。

一同座敷に通り、圍爐裏を圍みて飯したゝむ、鹽豆、鹽菜、大根の古漬と、いづれも鹽づくめにて醬油を用ひざるが中に、別けて嬉しかりしは胡瓜の大き、白瓜の如きものを生のまゝ、鹽にて揉みたるにて、數日來肉も菜も、鏝詰に飽きはて、青物を見るを得ざりし、我等なれば、何よりの珍味と、胡瓜のみ三椀を所望したり、茶は何



の葉とも知らねど、屠蘇の如く衣に包みて湯にひたすなれば、只麥酒の如く精く濁りたるばかりにて香はなく、味によりて察するにちそらくは半年前の出し殻ならむ。

大石屋は語りて言ふやう、僕昨日赤岩の小舎にて、公等に別れ、神河内なる例の小舎に着きて、托したる荷を受け戻したるに、獵人性しみて、伴れのお客さまはいかにしたると問ふ、されば云々なりと答へたるに、彼は圓らなる眼を睜りて、そりや大變だ、蒲田の谿がどうしてあの衆の足で、一日で越えられやう、今夜は必定野宿ならむといへるに駭いて、こりやかうしてゐるところでなしと、一服吸ふ間もなく、荷を擔いて燒嶽の峠へかゝりたるが、僕もはじめての路なり、半里許損して又引き返へし、絶頂にて硫黄臭き噴烟に咽せかへるばかりになり、地獄を抜き足するおもひにて、僕の健脚を以てして唯今こゝにて荷を卸したるばかりなり、明日は盂蘭盆といふことにて、どの宿にても客はいたしませぬと断はられたれど、宿屋は宿屋同士、強ひて頼みてこゝに草鞋を脱きたるなりと、我等には顔しかめらるゝ飛驒酒を仰ふりながら、今となりては流石に元氣よくちもしろをかしく笑ひさゞめくに、媼も來り、若主人とい

ふも來り、その子息なるべし、五歳許の小兒まで怖る々々祝ひ寄りて、爐邊の團樂に入りぬ、件の小兒に菓子を與へたれど肯はず、却つて白い飯が欲しいとせがみ、叱られて啼く、平生の粗糲おもひやられて、鄙ひたること信濃の白骨、飛驒の平湯に比して又一層なり。

されど夜具の清潔にして膚さはりのよき、この夜の夢の圓らかなるは、綠葉を床にし、彼の蒼を穹窿としたる昨夜のうつゝなりしに似ず。

翌朝早く覺め、下駄を借りて又湯小舎に赴く、村人の甲乙も未だ起き出ぬとおぼしく人のけはひもなければ我等のみにて悠々閑々と四ツの大字を泳がしぬ、かくて裸體のまゝ湯を拭きつゝ立ち出づれば、篋を巻舒して牽牛花の夢の色に咲き出てたるをちもふにつけ、昨夜は夕月その夢よりも淡く、鎗ヶ嶽の肩に休らひゐたりしに、今朝ははや水のごとき空の色と一つに融け去りにけむ、月は落ちて水に入り、水は流れて鍋に入り、我等に月の雫を飲ませけむよと、仙藥を服したらむが如く心地清々しくなりて高く仰げば、げにちもひもかけざりし、土地が「無限」に向けたる鉾の一つよ鎗ヶ嶽、



神秘の四壁を踏まへて、天の逆錘の如く凍として青冥に立ちたりける。

吁太初以來、萬岳を率ゆる高御座の、いかに偉なるかを見よ、雲の入束穂を垂る、夕、先づ聖き眠に就くものはいまし鎗ヶ嶽、朝日の金鷲滾々として、かのダイバア河の水をも乾さむずといふ羅馬の巷火のごとく天を焼くとき、先づ額を照らされて醒むるものはいまし鎗ヶ嶽、今や曉星落ちむとしてかの寒劍の尖先ヒツコにかゝれるときや、永劫の精舎、承塵なげしに光を放ちて見えたりける、たふとしともたふとし。

蒲田一村戸八九戸、昔ながらの共和制度ありて、宿は互に定まりたる客を襪はねば、睦み合ふこと一家の如く、家屋の建てざま二階はなく、戸々牛小舎を入口に控ゆるを以て、一種の臭氣あり、牛は馬に代りて運搬交通の具となるものなれば、人々その肉を嚼はず乳を飲むことなし、行儀作法鄙ひたる中にも太古の俗あり、夜臥床に入らむとしたるとき雪洞を以て導かれたるもうれしく、朝愈よ出立といふときに、結飯を焼かせたるに、木の葉を一枚宛てがひて、炙りたるは焦がすまじとの作法にや、一家の勞を犒ひてさゝやかなる錢取らせたるに『御大風たいふうさまに』と恭やしく挨拶された。

るに慙ぢ入りぬ。着きたる夜、宿帳を認むるとき、免倒なれば余と友と同番地にして退けたるに、同じ番地に家が二軒ありますかと念を押して、不思議さうに首を傾けたる、意外の質問に呆れたれど、荒山亂水の中、一里に二三戸の炊煙を認むるに過ぎざるこの邊なれば、さる疑ひも起らずといひがたし。

しかも亂山環峙の中、荒水を涉りて蒲田谿谷、突如として前に展開するに遇ひてはたとひ笠ヶ嶽つゞきの大山崇嶺、天を衝いて十二曲の屏風を峭立するにもせよ、山を出てたる水はこれより海に向ひて流れ、人はこれより平原に向ひて奔るかとおもへば幾んど『出門一笑大江横』の感あり。

この日蒲田を發してより十町許、高原川の上流に沿ひ、神崎といふところにて、我等は大石屋及び市三郎の二人と手を別ちぬ、大石屋とは一たび顔を報らめ合ひて、荒らかに物言ひもしたれ、今となりてはさすがに名残の惜しからぬにもあらず、殊に市三郎の介抱懇篤なる、登山成就の功、大半を彼に歸すとして肝に刻すべし、彼は路々余の鎗ヶ嶽行を、新聞へでも書くなら送つて下され、私には讀めないが、村のものに讀



んで聞かせてもらひ、大事に保存つて置きますほどにといひ、又横濱へ出て山葵でも商ひたしと熱心にいふに、我その出山の不心得なるを諭したるに、聞いて一々「さういふ譯だ」と領けるなど、二十六歳猶頑兒のみ、鉢巻を外して腰を屈めながら、柴の組橋の上に佇みては幾回か振りかへる、げに可愛らしき男なりけり。さらば善人よ、健在なれ。(明治三十五年作)

拾遺

◎鎗ヶ嶽の「ヤリ」は、前には七八本許ありたりといへど、風雨に頽れ去りて、今剩すところは纔に二三本あるのみ、余この山の地貌を按ふるに、剃刀の刃の如き長壁が、萬年の風霽日爛に凹凸を生じて、M字をいくつか列ねたる如くになり、その突起が則ち謂ふところの「ヤリ」なるものにして、是れすら次第々々に頽れ、今八合目以上に屋堆床疊せる亂石となりたるものにて、現存せる「ヤリ」の鉞も、おそらく餘命幾何も無かるべきか、現に吏員が三角測量標を建つるとき、この一本鎗を鉋削斧劈したるにあ

らざるかと思はるゝ痕跡歴然たり、而してこの一本鎗が崩壊したる後は、鎗ヶ嶽の高度は、減して穂高山の下に在ることとなるべし。その他は頂鈍き烏帽子形、若しくは筈形にひしやげて、現存の「ヤリ」の如く尖銳錐體を成さず。

◎余かつて飛驒平湯に遊び、土人より聴取したることあり。曰く、土人鎗ヶ嶽に石神を祀る、偶まその年旱魃にして且つ悪疫流行せるを以て、悪神の祟りとなし、その石神を破毀したんぬと、今破損して纔に原形を認むべき石神は、即ち是悪神なるなからんや。

◎鎗ヶ嶽は、信濃南安曇郡と、飛驒吉城郡に跨がる、安曇は今アヅミと訓じ、アヅミは綿積ワタツミの約也、即ち海也、今北安曇郡に在る三湖、大を青木湖といひ、次を中綱湖といひ、次を木崎湖といふ、この山下を通じて往古一大湖なりしにあらざりしか、土人今穂高山に祀りたる神を以て、この地草創の水を治めたる神となす、據る處在るに似たり、鎗ヶ嶽絶巔より俯瞰したる、綿の如き曉霧の神秘的光景は敢へてこの山に於てのみ望まれ得べきものにはあらざれど、地形上亦自らこの山にあらざれば、起る可ら



ざる水蒸氣の作用あるが如し、所謂綿積<sup>ウエツキ</sup>の太古的光景は、この山の絶巔に在りて、始めて威嚴あるを覺ゆ。

◎富士山の絶巔に生息する動物は、内院燕と鼠なり、鼠は夜は凍りて幾んど死し、晝に至りて始めて活動す、淺間山にも岩燕多し、鎗ヶ嶽は火山にあらず、随つて彼等が如く坎口を有せざるが故に、岩燕の生存に便ならざるためか、この動物を認めず、鼠に至りては人なく、屋舎なきところ故、全く亡し、在るところの動物は、雷鳥と蛇と黄蝶となり、佛國の某碩儒は一萬六千尺餘のアルプス山巔に、蝶を認め、風のために下界より吹颺せられたるものと斷じぬ、然れども鎗ヶ嶽の蝶は、常住の物、高山の草花に栩々然として飛び、香を吮ひ宿を借る、自ら一種の神話を人に語るに似たり。

◎鎗ヶ嶽表裏の登降中、功一級に値ひするものは足袋（念を入れて能ふだけ、丈夫に刺繡したりしといへども）なり、始終足を保護して凱旋を獲るに至らしめたるもの、たとひ僅にこの一山の上下にて、破れて再び用を爲さざるに至りたりと雖ども、身を殺して仁を成す、殊勳として特筆すべし、而して最も罪を論ずべきものは麥程帽子な

り、風に落ち、枝葉に觸れて落ち、絶壁を下れば落ち、拾へば落ち、紐して肩に擔へば喉を捉ふ、嚴に黜陟を加ふべし。若し夫れ近視眼鏡に至りては、是がために森林の綠闇を物色するを得たれども、亦屢ば熊笹や灌木に刎ね飛ばされて、搜索に時を耗やしたること尠きにあらず、故に曰く、功罪相半す、互に償ふて止むべし。

◎凡そ鎗ヶ嶽、穂高山附近、瀧大の葉に富める樹木甚だ多し、即ちトチ、カシハ、ナラの類是なり、蓋し斧斤入らざること久しく、秋季以後は、落葉厚く滿地を掩ひ、能く、地濕の蒸散を防ぎ、地味を豊饒ならしむる故ならむ、この間に生を托する萬蟲の夢の安らげさは、いかばかりならむ。

◎鎗ヶ嶽は、ウエストン氏一たび其著『日本アルプス』に紹介してより、却つて外人の間に多く知られ、年々隊伍を組み登山する外客頗る多し、明治三十六年には新來の英人三名、同氏の紹介を以て獵師を備ひ、信州口より登山を試み、赤岩の小舎まで達したれど、豪雨のため、こゝに二泊して素志を遂げず、下山したりと、三十七年にも登りたる英米人あり、余が英人、トソン氏より親しく聽くところによれば、今三十八年に



登山したる外客の一隊は、雨のため山中に三晝夜を費やし、天色清瑩の朝を待ちて、絶巔をさはめ、寫眞數葉を獲、下山に方り、大雨のため路を誤まり、谿澗を彷徨して困憊をさはめ、漸く救はれたりと、邦人の登山は、三十七年に、松本なる新聞社の發企に係れる鎗ヶ嶽登山會ありしと記憶す、爾後博物學者の同山にて、講習會を開けるものもあり、登山者漸く多からんとするの傾向あるは悦ぶべし、登山道は、信濃南安墨郡島々村よりするを、最も便利とすること、本文に述べたる如し、この道、近來大に拓け、山麓梓河畔に湧ける温泉の傍には、宿舍さへ建ちて、客を容るに至りしと聞く、これらのものは、余が登山の時には、全く無かりしものなり、されば島々村より鎗ヶ嶽を上下するに、おそらく探險なる文字を情ふ用なからむ、余が白骨温泉を發足の起點として、霞澤を徒涉し、霞澤山を上下し、更に梓川に入り、鎗ヶ嶽を上下して蒲田谿谷を魚行するに至りたる歪線は、これらの巖かめしき三角塔及びその臺礎なる谿谷を、縦面的に踏斷したるものにして、日本山嶽の跋渉としては、自ら探險と稱するとも、舞文誇張を以て目せらるゝ虞れなきを得むか、我は單に鎗ヶ嶽の表山を片面的

に上下したるのみにあらざればなり、この附近の山嶽と谿谷とを熟知するものは、余が言に首肯すべきを信ず。

### 淺間山の煙

富士の女神と神集ひ  
 火雨ふらして醜國を  
 八百日八百夜と淨めけん  
 若き姿の淺間山

佐久の廣野に眠りたる  
 千曲乙女のおもかげは  
 猛き炎を夢みつゝ  
 今も清やかに流れたり (伊良子清白)

十月十一日の朝まだき、横濱の停車場へ駆けつく、雲扯れて星屑落つるやうなる空



合に、けふの晴をトし得ていさみ立つ。我元來衣物を買ふ錢は爪を剝がすより惜しけれど、書を購ふとき旅行に遣ひ乗つるときは、垢を洗ふほどにもなし、母上に諫められ、妹にも真心こめて諫められたれど、熱あるものは賊を苦しとなす、默兒解せず邊幅を修むるの術を、汗と共に儲けたるものは深く水に流すべしといふは吾主義なり。さらば蕎麥切長さ木曾の山里より、美濃にさまよひ、飛驒に出て、越路の果に鼓弓に似たるさゞ波の聲を聞かばや。

横濱より沃野十里、露萬斛の朝風冷たけれど心地よし。八時半上野發の汽車を捉へむとして乗りおくる、次の發車には、猶早ければ、上野の白馬會を覽る、自然を愛する人には、天地は畫堂にして、繪畫を好むものに、畫堂は猶天地のごとし、川一筋も、横に這ふ瀑布の如く大地を裂き、草幾莖も、太平洋の海岸に潑々尖立する白濤の如くなるを見るに、奇しき力、天地の間に充ち満ちたるなり、我は病苦の人なり、一たび畫堂に入るるときよ、豪雨の如き光線を浴ひて甦る、天地に第一の自然あり、畫堂は則ち第二の自然、彼に之かざんば是か。

十時汽車に乗る、荒川溢れたり、菴碌頭巾の爺悠々と烟草燻らしながら、稻の穂の少し露はれて水を舐めたるにて、底は稻田ならむと推せられたる中に繪を垂れたるなど、急はしき汽車の窓より瞰下す。半ば水に浸されたる掌ほどの畔に、榛の樹の葉は搖落して癖ある枝、傘の子骨のやうに擴がりたる下より、秩父の山かや、うす藍染めたる眉黛、長刀をわたる若衆のやうに半天横まに躍如として聳つ、空牙えたれば心ゆくばかり色麗はし、白玉の富士はあらぬかと窓より延び上りたれど、織塵片羽なき長空に、白きものは泡もあらざりけり、傷い哉、秋の心。

熊谷には東京の俳優岩井松之助一座興行中にて大入なりと、そこより乗りたる人珍らしさうに語る、小春日和の暖く、女子の足袋のいと白き。

高崎にて小憩、汽車やがて横川に着く、妙義山を仰げば怪巖嶙峋、一鶚秋に横はりて扶搖を搏たんとするけはひあり、日は射抜の穴の背に落ちかゝりて、壯嚴無比なる金色は劫火となりて雲に燃えつき、この片々はじめは翻れ梅ほどの形なりしが、一丈二丈三丈と繋がりて塔のやうに長く、日瞬く間に消えて滿天灰色となり了んぬ。



横川よりは例のアプト式にて碓氷峠を上ることにて、十分許汽車を停めたれば、我は身に沁む風に外套の襟をすぼめ、暫く線路に沿うてそぞろありさす、前の汽車を失したるため、徒歩にての碓氷踏えをとおもひ止まりぬ。この地、碓氷峠は頭を壓し、妙義山は肩に通り、名も知らぬ連山は遙に高聳して脊髄骨を踢らんとす、三面皆山、他の一方は穗末波寄る平野に連りて上毛の村落眼下に偃す、峠は上野と信濃の界なり。停車場内に清水を噴く井あり、夏ならましかばとおもふのみ。

再び車に乗る、紺の風呂敷包を頸に結ひつけて懐手したる商人風の男、どちらへお越してすといふ、明朝浅間へ上るなりといへば、鑛物でもお調べになるのですかと都合點して、山の嶮惡なること、噴火坑のおそろしさことなど問はず語りを聴くうち汽車は動き初めぬ。

東京より坂本までは平地なれど、こゝより峠まで三里の間は急峻の上り道なり、日全く没して遠くの山、近くの山、十重二十重に圍みたる鐵桶の中を、線路はゆつたり長き爪の絲の二條並びたるやうに、谿に臨み懸に沿うて敷かれたるを、汽車徐ろに

上り始む、笛は喉に穴の明くほど鳴りはためきて、隧道に入りたりしが、赤き燈青き燈は尾上をわたる明星のごとく軌道を並び、煤煙に交る火の粉は石壁に狼藉して、鳥羽玉の闇より閃き落つる糠星のごとし、生温き風に面を舐められて快からねば窓を閉づ、隧道又隧道、その數凡そ二十六、停車場はなけれど熊の平といふところにて汽車少憩す、峠の半腹にてこれより猶上りなり。

寒氣をも怖れず窓明けて右を望めば、浅間山は劈空落し來れる大塊土か、この夕松井田にて仰ぎたりしときは、屹然高く白雲の外に抜き、烟は香爐より立昇るごとく曳々然として浮動し、兒のごとく孫のごとくなる群山その裾に趨りたりしが、今信濃一國にて最高の碓氷峠を足下に踏まへて視れば、土地高ければにや浅間の高さはそれほどにもなきこと、乙女峠より富士を望むにも劣れり、それとこれとは距離の遠近、山の高低に區別ありて、一口には評しがたけれど、乙女峠は淺くして低く、碓氷峠は深くして高し、乙女は茶を飲むによろし、碓氷は山骨稜として霜の劔の何をか斫らざらむ、殊に浅間は混世魔王の狂ひ吼るがごとく、一野は空くして一菜を見ず、川は濁りて



一鱗を留めず、火を抛ち、石を轉ばし、天が下をば常闇の國となさずば止まじとぞもふ、富士に南山の壽めてたく、淺間に金剛不壞の力量をそろし。何人が測りけむ古へより追分驛の人家の軒と、富士の峰と高低なしと言ひ傳へ、淺間を富士に亞げる高山とたゞへたりしは、いさゝか二價あれど、これらの山は活火山と死火山とを代表する本州の二名山にして、『信濃なる淺間の嶽も燃ゆるなれば不二の烟のかひやなからむ』と後選に詠じたるは、知らずしてなるべけれど、中部日本火山の同脈に屬する二山を配したるも奇なりと、感じて、このたびは淺間を背に、素より空席自在の室内とて、苦もなく左の窓へ向き直れば、名も知らぬ山々連亘して無極の天を聳げ、筈の皮の剝げどもく同じ形の累り合ふばかり、星はあれども明るしとはあらねば、谿の隈々、只混沌としてよどみたり。汽車は靜に輕井澤に下る、冷氣肌に徹す、善光寺詣らしき婆さま、噓して東京では職人衆が、晝は單衣で働いてゐますと呆れ顔なり、連の爺は空耳潰して念佛三昧、我も爲うことなしの懷手に一座白けわたりて見えし。御代田にて汽車を下る、追分の油屋といへるを志したるなれど猶一里ありと聞き、

路は開し、方角は分らず、閉口のをりから、同車したる土地の人來合せ、その周旋にて停車場より程遠からぬ旅店に行李を釋さぬ。

奥の一間へ降り上りて早速爐の前に直り、結句は灰の種にとて搔きあつめある消炭を吹きて、僅に一縷の火脈を絶えなんとするに繋ぎたれど、窓より洩り來る冷峭の秋氣に膝を抱きぬ。風呂に召しませといふに、心得たりと有合せの手燭を翳して躍り出でたるはよけれど、便所と背合せの空地に、夜目ながら露滋き一面の枯野原見透しといふ風流の正念場を選びて、据風呂をしつらへたり、上の齒と下の齒と氷りつくやうになりて浴了りたれど、何處へ脱ぎ捨てしか下駄も見えず、跣足のまゝ室内へ遁げこみて、スッポリ蒲團を被りぬ。十三四ばかりの童、塗の剝けたる食膳を捧げ來る、成程空腹なりしと箸を取り、皿の中を覗みてやゝためらひしが、これでは修業が足らぬと、飯を泳がすばかりに熱湯を濺ぎて嘸み下す、この童盆を持ちて側に持りたるところは、神妙なりしか、一杯目に欠伸、二杯目に眼を擦り、三杯目にはア、ア、アと伸びをやるなど、山家にも禮式はありけり。女房を呼びて明朝淺間への案内を頼み、



床に就きたれど、宿の隠居が一杯機嫌に怒鳴る聲耳障りにて寝られず、枕を圍ふ二枚折の屏風に煤塗れの石版書を無造作に貼り交ぜたるが中にも、田子の浦の景とおぼしきが目につきぬ、寝ながらにして富士と背比べは新らし。

天の戸に朝寝はなきぞとよ、さるほどに曉の嵐に連れて聞きも馴れざる汽笛の聲にちどろかさされ、空模様いかにと裏の雨戸一枚引き明くれば、昨夜は知らざりし、癖に怪我ある白菊二三本ちよろりと垣に倚りかゝれる庭を隔て崖あり、蔦紅葉や、色づき、遠山低く星淡し、一掃きの箒に消えぬべし。

洗水を持ち来よと命ずれば、前の川へち出てなされと済ましたものなり、往還を隔て、小流あり、近隣の人は嗽ぎも洗濯もこの川にてすなり、楊枝障り殊によし、昨夜の隠居挨拶に來り、悴を嚮導させむといふ、私も取る年ぢやて、れ山の見收めにお伴を願ひますといふに、驚きて年齢を問へば五十七なりといふ、危みて止めたれど強てと乞ふ、この界限にて一番古いのは私の顔と、私の家なり、御代田に停車場の設けられざりし前は、この邊は追分ヶ原つゞきにて、至て淋びしかりしと、それより老の自慢

話、いつ果つべしとも見えざりしが、悴といふ廿五六の男に促されて立出づ、所持品は三人分の草鞋十二雙、提げ重の外に一瓢は爺の嗜みなり。

一本の筥を金剛杖に代へて蕎麥畑の間を行く、千曲川はかしこの山隈より流るゝを、と、爺のいふに杖の頭に胸を壓し、足を爪立て延び上る、十四度の眼鏡を透して只だ香茫たる無邊際空より、陽炎のごとく吐出されて光を翻へすものあり、絹ほどは白からず、煙ほどは淡からず、それにもやと領きたれど、神経作用の幻視なりしかも知れず、ちぼつかな。

北越街道は、小諸驛へ丁字に通ずる往還を、斜に横ぎりて雑木林に分け入る、林中に馬の秣の豆殻を蓆に圍ひたる小舎あり、何事にも念の入りたる田舎人の丹精をおもふ。路は數條に岐れて松林に入り、草隠れの沮洳を涉り、草鞋の踵に塵埃颯る馬道を過ぎり、いと曠やかなる原に出づ。すはや淺間は近きぞ、突兀たる坊主山、天を礙げて吾眉毛に逼り、裾の方は朝露踏分るわが萩原に疊みこまれぬ、淺間々と雀躍すれば、爺あれは淺間ではござらない、前掛山といふて、富士でいへば寶永山といふやう



なものぢやといふ、半里もあるかといへば、眼を丸くして猶二里半もありますと笑ふ、疾く行かずやと二人を急立つれど、爺は酔醒めの喉乾きて堪へがたしとて、窪溜りの水に、白髪頸突さこみて舌鼓鳴らす。ために一行の足の運び、きはめて遅々たり。

このわたり、富士の裾野に似たれど、桔梗刈萱など媚めきたるは見えず、霜枯れたる秋の景色淋びしさ一倍なり。おもしろきかな行樂の旅人、わが心は雨絲に動き、風片に動く、動きたるとき試に薪を割れば斧の輕さをおぼえ、動かさるとき徒に文を作れば筆の挽きがれきに困しむ、萌え出づる若草の希望を孕むは今の我なり、焼る、雉子の悲鳴を擧ぐるは後日のおのれか、そは知らず。血に叫びたるバイロン、われ時鳥の帛を裂く聲に若かざるを念ふ、血を吸りたるナポレオン、われ隼鷹はやとの小雀を搏つ伎倆に下れるを嘲る、よし我は秋の色の繪絹よりあざやかなるを東海の富士にあづけ、秋の心の錐より痛かるを東山の淺間に試みむ。

この原に狐萱といふ草多し、土人採掘すること一日に三四貫目に及ぶとぞ、一人一日に一貫目を獲るは造作もなきことにて、この價凡そ四十錢、磨きたるは、一圓の上

に出づることありと、軍用のタハシを作る料なりと聞きぬ。蕎麥の花白き畑の傍に、芝居の道具立めきたる竹藪をしつらへて、軒に手の達くほどなる藁小舎をその蔭に建つ、こゝは獵師の泊るところにて、晝は草鞋を縛ひ、夕暮よりは猪などの畑荒しに來るを狙ひ撃つなりといふ、冬日われらが嗜む山鯨はかくして箸に上るなりけり。

追分、沓掛、輕井澤三宿の間なる曠野は、具原先生の『岐蘇路記』に『三宿の間、南北半里許、東西二三里程平なる曠野あり、寒甚しくて五穀生ぜず、たゞ稗蕎麥のみ生ず故畠少し、又菓の樹なし、民屋にも植木なし、不毛の地といひつべし』と書かれたるところなり、曠野涉りつくして又林に入れば、さゝやかなる神やしろ立せたまふ石の玉垣に添うて出たる一本杉あり、小徑を隔て右は御料林とぞいふなる。見わたすきはみ唐松生ひ茂れり。前掛山の皴あざやかに見えければ、はや近かるべしと私語ひそごとに、いかなこと、一木生えぬ山の半腹まで猶一里ありといふ、草の中に仆れたる石標を擡げ起して苔を削り、うち見やるに淺間山禪定道三十六町とあり、もどかし。爪先上りの岨道となりてよりは、壯健に見えても年齢なれや、木曾の麻衣皴だらけ



の顔をしかめて、爺の鼻息荒くなり、こらて一寸休みませうと強からぬ音を吹く、さらばと腰を据ゑて親子は辨當退治にかゝり、我は埒もなき鉛筆沙汰、一山たゞ黄葉紅葉にをり／＼鵲の聲、秋風の林を吹きぬけて何處が果やら。

とかくに尻重き二人を促して細徑を辿る、この朝氣遣ひしにも似ず、日は照りわたりて鼻に汗あり、上衣を脱ぎ、チヨツキを外し、果は白襯衣一枚となりて上るに、山漆、木榆茶菓など黄みたる今は、氷の庭に落葉する末をおもはなくに。

われらの足音に小笹俄に浪立ち、栗鼠ならむ黄き小獸一疋松の梢に駆け上ること迅し、爺唐突に唐詩選にむさ／＼びといふのがありますが、栗鼠のこととせうといふ、不意を討たれて返辭に差悶えたるに、疊みかけてねえ旦那、キョリといふのは何のこととせうと愈よ妙なり、われ柴刈の鉈の投げ出されたるを指して、その鉈のぬしッ、爺何のこととも解せず、へエーと頷て挨拶す、愈よ面白し。

雑木林斑らになりぬ、石炭槽コークスのやうなる焦石をこらに轉がりて、小さき寸草を前やし、大なるは櫛の稚樹さへ生じたるにて、年古りたること知りぬべし。この邊より下

淺間へかけての焦石は、天明の大破裂以來のに多く、追分邊の野中や畠の傍に轉がれるは天明より五百三十年前のに多しと、その當時噴火の方角より推して、詳しく調査したる古老あり。このわたりより膝を折る峻坂となりて歩むに艱む、かつては薪積む駄馬や通ひけむ、馬糞の乾固まりて小石のごとくなるが、土を孕みて蹴けば鏗々然たり。山桃とて蔓に生えたる馬鈴薯ほどの實、初めは珍らしく拾ひて嚼むに酸味あり、酒を製すといふ、又甘露梅とて葉は黄揚のごとく、實は赤くしてドゥメほどの大きなるがあり、砂糖漬にして市に鬻ぐといふ。これらの植物は淺間山の特産物にして、他山にはなしと爺語りたれど、後に井出翁の「信濃奇勝録」を閲したるに、立科山（蓼科とも書く、八ヶ嶽につゞきて諏訪、小縣、佐久の三郡に跨れる山にて、淺間よりはいさ／＼か高し。）にも同じ甘露梅のこと見えたり、さればこは火山特産の植物にて、淺間に限られたるにあらざるべし。（今、おもふにコケモ、の事なり）

猶上るほどに草斑らになりて丈短く、それすら大方うら枯れたれば、焼石草鞋を嚙むこと甚だし、熊笹をかつきて峙てる巖はあれども多からず、爺息迫しげに語りてい



ふ、ね山には大焼と小焼とあり、大焼は五年に一回ぐらゐありて、夥しく熱灰を降らし、五里七里が間鳴りはためき皿小鉢を割ることあれど、人畜を害するほどにはなし、明治十七年なりしか、家俄に震動したりとれもふ間もなく、表の障子にパツと光さすけはひの、二三軒先にて火を失したるごとくなりしかば、急ぎて障子を開けたるに、お山は大焼にて火炷熾に立ちゐたり、そのとき吾家の椽に腰うちかけて蕎麥を喰ひゐたる馬士ありしが、それと見るより箸を持ちたるまゝ、韋駄天に駈け出けるこそ道理なれ、かの男の家は麓の野中なりければといふ。坂峻しうして路紆折す、爺休みては歩み、歩みては休む、待ちては勞はり、勞はりては上る路の抄取らぬこと、九十九折の山路にゐざり車を挽くにも劣らず、三人の路は足の遅速と隔たりぬ、先に立ちたるは我にて、爺最も晩れたり、我暫く歩を停めて顧みていふ、今の話の男の家はいかゞなりしか、爺噎れたる聲にて、妻子も留守してゐたれど、幸に別條なかりきと。右に屏風岩峙ち、左に劔ヶ峰を仰ぐ、路に當りて消炭のやうなる糞あり、狼のなるべしといふ、山馴れぬ我の心細さ一倍なり。

これよりは満目荒皆茫なる石原となり、偃松とて、葉は姫小松に似て、高さ一尺に満たぬ短木なるが、瑟瑟たる風に起ちもやらで筆柄に匍匐しぬ、このとき大霧蓬々然として空山を掠め、外套や、上衣や、手巾や、手袋や、あらゆるものを身に着けたれど、高寒總身に泌みて指顫き、耳朶冷々わたりて扯れ果てぬべう。

満山皆砂と焼石とにて、道てふ道もあらずなりぬ、さすがの案内者もかうてはなかりしと怯む色あり、半途にて下山もし兼ねまじかりしを、我は絶頂なる火桶のごとき赭ら岩に目をつけ、爺の介抱を悴に任せて只一人、胸衝く坂の焦石に杖を深く穿ち、紛々たる露華を眉毛に貫きて匍匐上りぬ。偃松、はや絶えて一寸の青蕪なし、よしや西風白草を吹いて夕日影淡からんする今なりとも、せめては手の凍らであるべきに、唇邊の青蟲に雲母のごときもの凝結するに至りては、漸瀝たる風に吐く息苦し。赭ら岩に手を掛けてその陰を見わたせば、こゝは前掛山の絶頂にてこれより摺鉢のやうに斜に下り、底には大火坑あり、勇み立ちて親子を呼ばんと振り返りたるをりしもあれ、杳茫一氣、空霄の中を亘りて、山の隅、罅の隈、雲かあらぬか、一時雨ぼと顔に迸りて



冷鐵を頸に加へられたるごとし、呼吸も窒すべうおぼえてもはず俯向くとき、襟巻代りの手巾、主を捨て奔りし。はや釜(噴火坑をいふ)に近きぞと呼はりて、岩より飛び下れば、これに氣を得て親子も後より入り来る、岩おのづからなる屏風と峙ち、命を削る木枯びたと睨まりたり、胴震ひ止みがたければ、ことしの夏行者ともが脱ぎ棄て置たる古草鞋を拾ひ集め、竹屑を細かに碎き、煙草を燃料として焚火を試たれど濕りて役に立たず、マッチ一箱遣ひ捨て、火種は煙草殻に残るばかりなり、失望して血色なく、三人無言になりて迭に顔を見合せたるとき、乾坤寂寞として只空山の淋びしきかな、岩燕、拳を放れたる石のやうに飛ぶ。

沓岩には氷柱を垂れたり、尖りたること劔のごとし、止みなんかな三冬暖氣なし、早く火口を環り見て、人間が凍らぬうち、下山するに若かずと、二人を勵まして火口に向ふ、前掛山とは舊火口の環壁を名けたるものよしにて、今吾踏める石の下に昔は噫氣雲を成し、焚烟天を衝きて火を煽きたるらしと、足の進むこと遅々たり。

淺間には水なければ、準備あるべしとて一瓶齎らしたるを飲み足らて、頂より北に

當りたる崖の下に濼ほどの水溜あるを探り當て飲む。全山皆砂と焦石とのみなれば掬ればとて一滴も覚めがたし、水のたふときと想ふべし。此の山雨には土砂を流し、焦石を轉ばし、火の靈、風の精、虚空を翔けめぐりて夷を嶮にし、拓きたるを不毛にし、人間を土龍のごとくに這はせて、あら心地よやと、千山搖ぐばかりに哄と聞の聲を擧げたる、いにし天明の名残の夢を今こゝに見る、見わたす限り、八荒たゞ吹き翻す焦石の磊塊、四望冥濛として青天は下にあるか、白日は上にあるか無分別なる足の置きところ危ふけれど、迭に握手して杖の向ふところ是れ磁石なりと、焼土原を辿る。

硫黄の臭氣鼻を衝て腦に上る、それ、そこが釜ですといはれ、踏む土迂りて底ぬけの焦熱地獄へな落ちそと、岩角に足場を拵へ、大坎にかゝり視る。この穴の直径三百五十間、周圍一里餘ありといへど、うち見やりたるころ、雲霧蒸々として六合に磅礴し、深さと同じく測りがたし、孔の内壁は、垂直に峭立して、褐色、黒色、黄色の狼藉せる怪岩を、硫煙の間に隱見す、硫煙の噴くや、たゞに一箇所に止まらず、火口中幾多の小穴より競ひ立ち、或は直上して霧と争ひ、或は風に吹きまくられて峰頂